

富山県砺波市の生活文化 と地域社会

地域社会の文化人類学的調査 20



2011

富山大学人文学部文化人類学研究室

目 次

はじめに（竹内潔）	1
砺波市の概要（竹内潔）	3
報告書の構成（野澤豊一）	4
第 1 章 夜高祭の概要（萱岡雅光、陳雨、表紙口翔子、明和亜沙美）	7
第 2 章 太郎丸住民にとっての夜高祭の楽しさと役割（陳雨）	21
第 3 章 春日町における祭りを媒介としたコミュニティの再構築（明和亜沙美）	41
第 4 章 祭礼の魅力と存続—砺波夜高祭木舟町の例を中心に（萱岡雅光） ..	59
第 5 章 新町における砺波夜高祭りの存続（表紙口翔子）	81
第 6 章 鷹栖の地域コミュニティの現況（杉田大和）	95
第 7 章 観光イベントに対する市民と行政の認識（川端勇生）	115
第 8 章 砺波散居村地域の屋敷林の現況（平石健太）	125
第 9 章 砺波散居村地域の食生活の変遷（柴草朋美）	137
第 10 章 庄川の水環境と生活文化（林香澄）	153

はじめに

富山大学人文学部准教授 竹内 潔

富山大学人文学部の文化人類学研究室では 1979 年の研究室創設以来、毎年、教育の一環として北陸の一地域を選んで調査実習をおこない、得られた知見をまとめて報告書『地域社会の文化人類学的調査』を刊行してきた。この報告書は、第 20 巻となる。

文化人類学においてフィールドワークとエスノグラフィの記述の妥当性や正当性を問う議論が巻き起こって久しいが、最近では、初学者向けにフィールドワークの体験を闊達に語るといった類のフィールドワークの入門書が次々と発刊されている。方法論的内省と議論の時代を突き抜けて、実践を通してフィールドワークが復権していく兆しなのであろうか。このことの当否は分からないが、研究におけるフィールドワーク論はさておいて、大学教育における人類学的フィールドワークの実践が持つ意義は今なお明確だと思われる。学生たちはフィールドワークを通して、大学の中やバイト先では知りあえない人々と出会い、書物やインターネットでは知りえない様々な人間の営為を豊かな実感をともなって知ることになる。このような「出会い」は、多様な人々と接するためのコミュニケーション力を育成するにとどまらず、学生たちに、それぞれが選んだテーマを実際の生活の「現場」に適用できる具体的で明確な「問い」に変換するよう、強く働きかける。さまざまな人々の言説や行為との遭遇を繰り返す学生たちは、表面的な感想やステレオタイプの「べき論」を乗り越えて、自分の問いを鍛えながら自分なりの解答へと向かっていくことになる。どれほど素朴であっても、自ら見いだした問いと問いに対して投げかけた解答はかけがえのない財産であると理解すること、これが大学における文化人類学的フィールドワークが持つ意義だと考えられるのである。

この報告書は、2010 年に富山県砺波市（図 1）でおこなった調査実習の成果をまとめたものであるが、砺波は都市化が進む地域に隣接して散居村地帯が広がり、東部には庄川流域地帯が広がるという地理的にも社会文化的にも多様な環境を有している。私自身も学生たちと一っしょに市内のさまざまな場所を歩いたが、歩いているうちに景観がめまぐるしく変化し、これまでの調査実習をおこなった小規模で比較的均質な調査地とは様相をまったく異にしていた。

このような環境と条件のもとで、学生たちはそれぞれが自身のテーマと調査地域を選んで、自主的に何度も足を運び、夏季には合宿をおこなって調査をおこなった。学生たちは、現場と教室を往還するなかで、自分たちが考えたテーマを「問い」に変えていき、やはり現場との往復を通して「問い」に答える努力を投じた。学生たちの報告はいずれも未熟であり、感想や建前的提言と「見たこと」や「聞いたこと」

の解釈が混在している場合も多いが、むしろ、そのような未熟さに学生たちの苦闘の跡と、そして自分たちの視界を広げていった成長の証しを見いだしていただければ幸いである。また、事実関係の誤りなどがあれば、忌憚なく、ご指摘をたまわりたいと願う。

謝辞

調査の開始時にさまざまなご助言をいただき、また貴重な資料をお貸しいただいた「となみ散居村ミュージアム」館長砂田龍次氏、合宿調査のために公民館を貸与していただいた桜木町のみなさまご好意に厚くお礼を申し上げます。
また、それぞれの報告において謝意が表されておりますが、学生たちの調査に際しては、砺波の多くの方々からご助力をいただきました。深く感謝いたします。

砺波市の概要

竹内 潔

各報告において砺波市内のそれぞれの調査地域の概況が紹介されているが、ここでは砺波市について概括的に紹介しておきたい。

砺波市は、富山県の南西部に位置し（図1）、地形は、市西部から庄川東部にかけての平坦な平野部と、南東部の庄東山地、砺波平野と庄東山地の間の南北に伸びる芹谷野段丘の大きく3種類に分けられる（図2）。平野部は、古くから河川や支流から用水が引かれて稲作がさかんにおこなわれ、「カイニョ」と呼ばれる屋敷林を有する農家が散在する散居村が展開している。

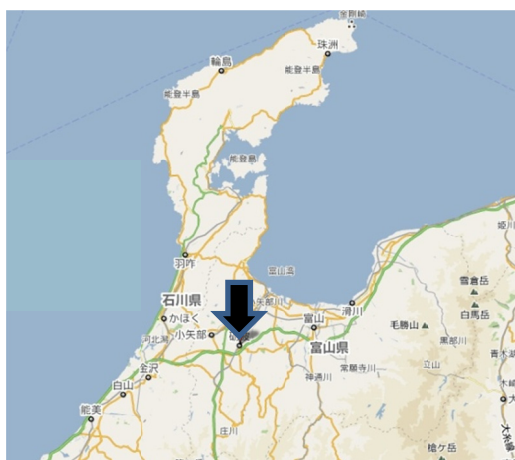


図1 砺波市の位置
(Yahoo mapにより作成)



図2 砺波市の地形
(Google earthにより作成)

1952年に東礪波郡出町（でまち、現砺波市の中心部）と周辺の5つの村が合併して砺波町が成立し、2年後に市制がひかれて砺波市となり、1955年に東礪波郡鷹栖村（たかのすむら）を編入し、2004年には庄川町と合併して新砺波市が誕生した。面積は126.96平方キロメートル、人口・世帯は、2011年2月現在で49,477人、15,393世帯で、砺波平野の中心という立地条件と北陸自動車道のインターチェンジがあることから、人口は増加しており、大型の郊外型商業施設の出店も多い。

報告書の構成

金沢大学人間社会学域博士研究員 野澤 豊一

第1章は、砺波市の夜高祭についての概要である。本報告書では、第2章から第5章の執筆者が、砺波夜高祭に参加する14町から各々一つの町を選び、詳細な報告を行っている。第1章では、それに先立って、続く4つの章を担当した4名（萱岡雅光、陳雨、表紙口翔子、明和亜沙美）が、夜高祭についての由来、歴史、夜高行燈の構造、祭りの進め方などについて、2章以降を読み進むために必要な情報を概説している。

第2章「太郎丸住民にとっての夜高祭の楽しさと役割」で、陳は、夜高コンクールで入賞常連の太郎丸を取り上げて、人々の祭りに対する関心の高さの背景を探っている。制作現場を調査した陳は、太郎丸の住民があえて難しい技術に挑戦して夜高を制作していることや、見物客に見て楽しんでほしいという住民の思いを発見し、ここから、競い合うこと自体が太郎丸の夜高祭参加者に楽しみを与えていると論じる。3つの町の連合体であり、砺波夜高で行燈を披露する出町14町のなかでも人口や世帯数が最大規模の太郎丸にあって、夜高祭を通じた共同作業と目標達成が、地理的にかなり広い範囲に住む人々を結びつけているのである。

第3章「春日町における祭りを媒介としたコミュニティの再構築」では、春日町の人々が夜高祭に向けて、「老若男女を問わず」「まるで親戚のように」共同作業を行っていたことに関心を抱いた明和が、その背景を詳細に記述している。春日町の半数以上の世帯は、10年と少ししかそこに住んでいない、「アパート住民」である。しかし、この短い期間のなかで、夜高制作に参加するアパート住民は増えてきている。この背景には、夜高制作の技術を簡単なものに変更したり、コンクールとは直接関連のない「踊り子」を祭りに導入することで、アパート住民も夜高祭の活動に参加しやすい雰囲気を作るという工夫があった。そこから明和は、春日町の住民は、「他の住民とコミュニケーションを交わ」すことに夜高祭のやりがいを見出しているのではないかと考察する。そしてここでも、祭りを通じて、アパート住民と旧住民が一緒になってひとつの地域を構築していることが、明らかにされる。

第4章「祭礼の魅力と存続——砺波夜高祭木舟町の例を中心に木舟町の例を中心に」で、萱岡は、いったん途絶えた夜高を近年になって復活させた木舟町を取り上げて、現代にあって廃れても不思議ではない伝統的な祭りの、「存続のメカニズム」の考察を試みる。木舟町の住民にとって、夜高行燈の制作は決して楽ではない。しかし萱岡は、夜高祭にはそれを上回る何かがあるのではと考える。こうして、行燈を「毎年作ること」の楽しさや、共同作業の連帯機能を住民も意識していることが、見出される。これが祭りの求心力なのだが、この求心力が持続する背景には、夜高祭運営メンバーの知人や友人が「助っ人」として祭りに関わるができるという、夜

高祭の外部に開かれた性格も欠かせないことが指摘される。

第5章「新町における砺波夜高祭の存続」で表紙口が取り上げるテーマも、第4章と同じ「祭りの存続」である。しかし、出町14町中で人口も地域面積も最小の新町の状況は、木舟町とは大きく異なる。住民が行燈制作や「突き合わせ」にやりがいを見出しているところまでは、これまでの3つの町と同じである。しかし、世帯数の少なさからくる資金集めの難航や、作業場が手狭なために他町よりも小さな行燈しか制作できないという問題が、新町にはある。しかも、自分たちの仕事で手いっぱいの新町住民には、春日町や木舟町のように、新人に仕事を効率良く教えて、外部参加者の手を取り込むだけの余裕がない。ここからは、砺波夜高祭のような他町との競争を基礎にした祭りへの参加には、ある程度の人口規模が必要になるという見えない前提、そして、地域の祭りを形成するためのノウハウが、いわゆる「マニュアル」とは違う類のものであることを、改めて思い知らされる。

第6章「鷹巣の地域コミュニティの現況—地域行事や祭礼との関連から」で、杉田大和は、日本の伝統的農村のコミュニティのあり方の理念モデルを念頭におきつつ、地域コミュニティの形成に不可欠な「共通の経験」が、都市化する鷹巣においていかに形作られているかを報告している。鷹巣には、一方では、夜高や獅子舞のような伝統的な祭りがあり、もう一方には球技大会やお楽しみ会のようなイベントある。伝統的な祭りに参加することは、住民の義務であり、時には仕事よりも優先されるほどの強制力がある。それに対して、イベントへの参加は、個人の自発性にまかされている。この違いが、「コミュニティ」の性格が伝統的な農村型から個人中心のそれになってきたことに起因することを指摘しつつも、杉田は、イベントが、都市的コミュニティを形成するための住民の積極的な試みの現れではないかと示唆する。

第7章「観光イベントに対する市民と行政の認識—チューリップフェアの事例から」では、川端勇生が、砺波市を代表し富山県でも屈指の大規模イベント「チューリップフェア」に対する、市民と行政の認識のズレを指摘して、その根本的な原因の考察を試みている。砺波市民への聞き取り調査からは、人々がチューリップを市のシンボルとして誇りに思う気持ちが浮かび上がるが、同時に、立地条件の悪さのために、フェアが市街地住民に恩恵をもたらさないことも明らかになった。また、フェアで実際にチューリップを展示するという作業は業者が行っているという理由から、市民は「ホスト意識」をもつことが難しい。市民が、行政側が望むほどにはチューリップフェアに積極的でなく、砺波に「チューリップの文化」と呼べるものが発達してこなかった背景には、こうした理由があるという。これらを指摘したうえで、川端は、市民が自ら「ホスト」として観光客に接する機会をつくることで、この状況が変化するのではないかと提案する。

第8章「砺波散居村地域の屋敷林の現況」で、平石健太は、砺波市の中野地区で、「カイニョ」として知られる屋敷林と住民の関わり、カイニョに対する人々の意識

について報告している。かつては、防風林や煮炊きの燃料、建築資材や遊び場として、生活に不可欠だったカイニョだが、近年では徐々に手放されつつある。電気やガスの普及のために燃料として利用しなくなったうえに、枝打ちなどの手入れの面倒さばかりが残ったからである。それでは、カイニョは住民にとって、もはや無用の長物でしかないのだろうか——しかし、平石の聞き取り調査からは、合理的な視点からは見えない側面が見えてくる。「先祖の残してくれた」カイニョを切ってしまうことを「寂しい」と表現する住民の語りからは、中野の住民にとってカイニョが「過去と現在をつなぐ特別な存在だということ、行政がいうような「保存してゆくべき伝統的な景観」以上のものだということがうかがえる。

第9章「砺波散居村地域の食生活の変遷」で、柴草朋美は、散居という村落形態との関わりをふまえて、砺波の食文化の変遷を記述している。砺波の散居村では、質の悪い米でつくったダンゴや、さまざまな種類の菜っ葉でつくった「ヨゴシ」などの郷土食があるが、その多くは、限られた食材を利用するための工夫の上に成り立っていた。柴草は、中野地区の家庭の献立の訪問調査を通じて、若い世代では郷土料理を食べる機会が減っていることを報告する。郷土料理がスーパーの惣菜として売られている現状を、衰退する郷土食ととらえるか、今でも忘れられずに残っていると捉えるか——柴草は、同じ郷土料理でも新しい食べ方が生まれていることにふれつつ、砺波の散居地域も核家族化やグローバル化が進んではいるものの、特に高齢者のあいだでは、郷土食は完全に失われたわけではないと結論づける。

最後の第10章「庄川の水環境と生活文化」では、林香澄が、旧庄川町の住民と庄川および用水との関わりを探る。「水の郷」として知られる庄川町だが、そのなかで林は、住民が庄川やその分流の用水をどのように認識しているかということに焦点を合わせて、調査を進めている。流送業というかつての生業形態はダム建設で姿を消し、灌漑工事のために川や用水の景観も大きく変わった。これにあわせて人々は、それまで「川」と呼んでいた二万石用水を「用水」と呼ぶようになり、以前には炊飯のためにも使用していた川の水も、今では野菜の泥を落とす程度にしか利用しなくなった。しかし現在でも、一部の庄川分流の用水沿いの世帯がもつ、「川端」と呼ばれる洗い場には、昔ながらのユニークな水利用の姿が垣間見える。林が、庄川町住民と川や用水との関係を「付き合い」と呼んだのも、日常の生活に浸透した水利用に独自の価値観を見出すことができたからであろう。

第1章 夜高祭の概要

萱岡雅光、陳雨、表紙口翔子、明和亜沙美

1. はじめに

2章から5章までは砺波で行われている夜高祭について調査にもとづいた報告をおこなう。夜高祭についての具体的報告に入る前に、ここでは、祭の概要について紹介しておきたい。まず、富山西部に広く見られる「夜高祭」について概略を述べ、「夜高祭」の起源と変遷、出し物である行燈の構造、祭の民俗学的側面などについて記す。次に砺波でおこなわれている夜高祭について概要を紹介する。

2. 夜高行灯の由来

夜高行灯とは、砺波平野一帯で、春から初夏にかけて担がれる行灯の総称である。その由来は定かではないが、福野の夜高祭には、次のような伝承がある。承応2年（1653年）に、神明社を作って伊勢から分霊を迎える際に分霊を載せた一行が倶利伽羅峠あたりに差ししかかったが、日暮れになった。その時に村人が行灯を持って迎えた。これが装飾され、夜高行灯になったという。それから、周辺の農村の田祭りで行灯を出していたのを、福野が現在「夜高行灯」として知られる形態へと発展させ、周囲の地域にも夜高祭として広まっていった。現在、大規模な夜高祭は、大元の起源とされる福野の他に、庄川、津沢、出町、北海道の沼田のものが知られているが、それ以外にも各農村で多くの夜高祭が行われる。また、起源は別であるが、射水市小杉の黒河にも夜高祭がある。なお、ヨタカには、「夜に高く掲げて神を迎える」から「夜高」と表記するという説の他に、「夜鷹」と字をあてると例もあるが、本報告書では、「夜高」の表記を使用する。

3. 夜高行灯の構造

夜高行灯は、その大きさから、「大行灯」、「中行灯」、「小行灯」などと、その大きさによって区別されるが、構造的な違いはない。なお、当時の祭礼の様子が記述されている明治9年の『氏神祭礼之砌神賑詳細帳（うじがみさいれいのみぎりかみにぎわししょうさい）』には「燈鉾、大小を交ひ、その数ひ、その数凡そ、百燈」とあることから、この頃にはこの区分は確立していて、様々なバリエーションがあったということが分かる。

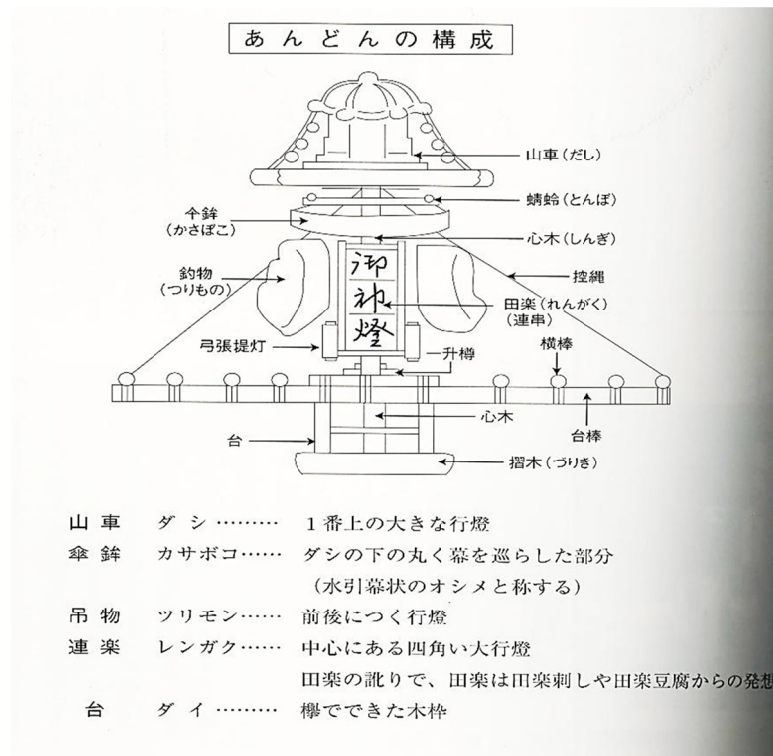


図 1 夜高行灯の構造 2003 福野夜高保存会編 『加越能の曳山祭』より転載

図 1 をもとに行燈の構造について紹介する。

- ① ダシ・・・上部の一番大きな行燈。ダシとは、本来は神が宿る依代のことであり、移動型祭壇である曳山のことを山車と書いてダシと呼ぶのも、各構造の中で最も重要な部分だからである。ただし、夜高行灯の場合は、鉾留としてのダシであり、ご神体は後述するレンガクである。
- ② コシマキ・・・コシマキとは、ダシの下に巻かれる幕である。カサボコと呼ぶ人もいる。傘鉾とは、神を迎える目印として、元来曳山の鉾（夜高ではシンギにあたるものと思われる）を飾ったものである。高岡の御車山の「花傘」も傘鉾の一種である。カサボコの先にある飾りを鉾留という。傘の中に神聖な空間を生成する装置であるとも考えられる。
- ③ レンガク・・・デンガク（田楽）が訛った語。夜高行灯の中心にある直方型の行燈。一般的には、このデンガクが夜高行灯のご神体とされる。
- ④ シンギ・・・心木、真木、芯木、神木、などと字を当てる。行灯の中心を、レンガク、ダシを貫く中心的な柱。田楽という呼び名は、このシンギが貫くことから、芋田楽を連想させることによるらしい。
- ⑤ ツリモン・・・ツリモノとも呼ぶ。おそらく「吊るすもの」の意。レンガクの前後に吊るされる、修飾。
- ⑥ ダイ・・・夜高行灯を載せる台。

4. 夜高行灯の変遷

これまでで、夜高が手に持つ行灯の形態から始まったことと、現在の行灯の構造を見た。ところで宇野通は、『加越能の曳山祭』の中で、夜高行灯が現在の形になるまでの変遷を次のようにまとめている（図 2）。

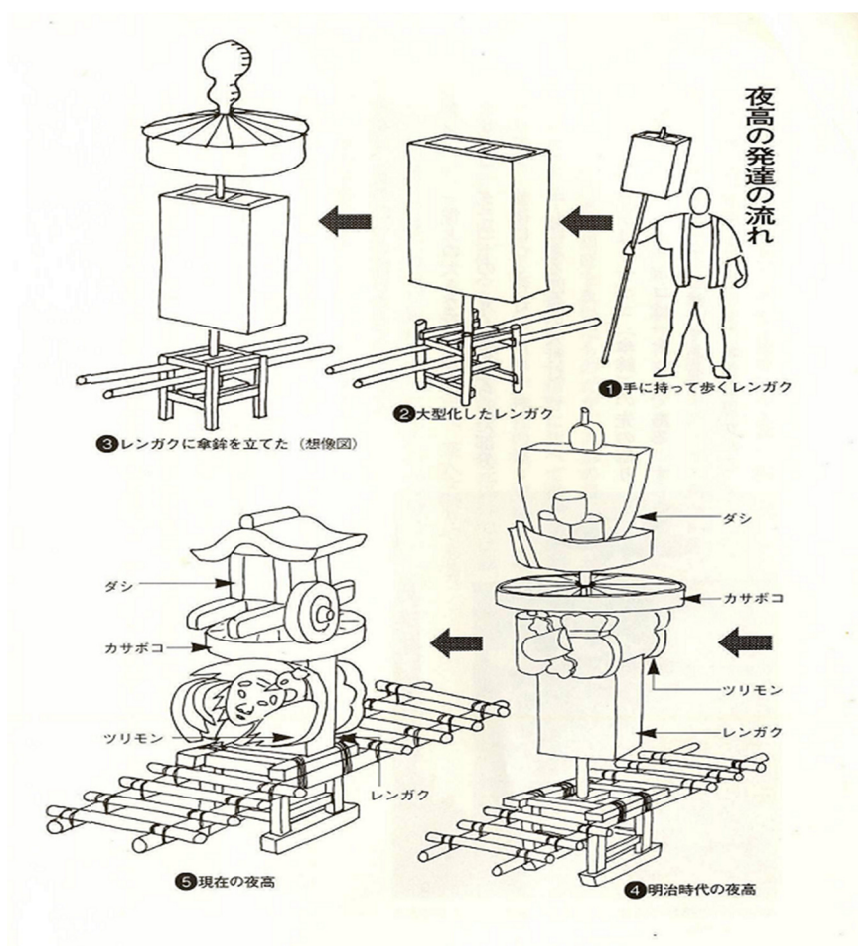


図 2 夜高行灯の変遷 宇野通 1997『加越能の曳山祭』より転載

デンガク行灯が大型化していき、カサボコをつき、その鉾留が大きくなり（風流化し）、ダシになった。ダシが大きくなり、やがてカサボコからツリモンが吊られたという。

夜高祭に限らず、行灯の祭の多くがそうであるが、電線が張られて高さが制限される前の明治の後期までは、非常に高くなる（高さを競う）傾向があった。福野の夜高は、一番高い時で 13 メートルあり、岩瀬の曳山の「タテモン」は、17 メートルを超えるものもあったという。なぜここまで高くすることができたかという、行灯は作り直すことが可能であり、例えば高岡の御車山など、一度製造されると作り直しが難しい曳山に比べると、加工しやすいからである。そういう意味で、行灯、

行灯の祭は非常に風流化しやすいという特徴を持っている。これらの祭は電線により、高さは制限されるようになったが、その代わりに模様や色を工夫するなどして現在も人目を惹きつけ続けている。夜高祭の場合、ダシが縦長ではなく、横に大き



写真 1 復元された文久の大打灯

くなっていき、カサボコとデンガクまでの空間に吊り下がっていたツリモンは、レンガクの前後に吊り下がるようになった。このように、細長かった夜高行灯は、全体的に上から押しつぶしたような形になっていき、今の形になったのである。電線による制限がなかったころの行灯の姿は、福野市によって復元された「文久の大打灯」を見れば知ることができる。「文久の大打灯」とは、文字通り文久年間に作られた夜高行灯を復元したもので、福野の夜高祭の期間、JR福野駅前に置かれる（写真 1）。

5. 砺波夜高祭の意味―「田祭り」とは何か―

ここでは「夜高祭り」について民俗学的な側面から紹介しておきたい。

夜高祭りは、神迎いの神事として始まった福野の夜高と、それ以外本来は田祭りであったものが夜高祭りに変化したものとの 2 つに大別することができる。後者の夜高は、元々この地方で「ヤンスゴト」と呼ばれていた田祭りが、福野の影響で夜高の形式に変化していったという説明が一般的である。

田祭りについてかんたんに触れておくと、農村では、田植えを終えた後に祝い事として「さなぶり」を行う場所が全国的にみられる。この風習地方により「サノボリ」、「シロミテ」などと呼ばれる。「サ」は田の神のことである。田植え前に田の神を田んぼに迎える行事をサオリ（田の神が降りる）と呼ぶが、サノボリは（田の神が登る）、田の神を山に帰す儀礼である。サノボリは、各家で行われる家サノボリと、村単位で行われる村サノボリがあり、村サノボリを行う時、村全体で農作業を休んだという村もある。これが「やすみごと」として、「ヤンスゴト、ヤスンギョウ」になった。『日本民俗地図』によると、この名称は、富山の呉西と、石川の東側に浸透しているようである。サノボリ行事は地域ごとにより内容が多様であるが、砺波平野では、農作業を休み、子どもたちが手に四角いトッペ行灯（トッペとは豆腐のこと；形状はレンガクと同じ）を持ち、村を練り歩いて各家を回る。藁で作った人形を引き回す村もあるという。類似のサノボリ行事は、砺波の他には、青森県の北側と、秋田県の東に少数分布しているのみである。

6. 行灯祭りの分布

次に、行灯祭りが全国的にどのように分布しているかを見てみよう。

実は、夜高のような行灯の祭は全国を見渡してみても、希少である。富山の夜高、石川の能登のキリコ、そして青森から東北に分布するねぶた系の祭のみである。石川と富山を一つにまとめると、北陸と東北にのみ行灯祭は分布しているということになる。ねぶた祭りは本来七夕の「眠り流し」であるが、類似の行事は日本海側の北陸から東北に分布している。ねぶたも、キリコも、夜高もその原型となった行灯は同じ形である。これらの祭りをつないだのが、江戸時代中期より盛んになった、青森と大阪の間を結ぶ西廻り航路を使用した交易の北前船による交易である。これにより、北陸から青森までの日本海側で文化的交流も盛んになり、行灯の文化が北上していったものと考えられている（小松 1999）。しかし、大阪から北陸までの間には類似の行灯行事がみられない。東廻りにおいてはなぜ行灯文化（松平誠 2008）が伝播しなかったのかという点はまだ分かってはいない。ただ、少なくとも行灯文化の発祥は北陸にしる、東北にしる、それより西ではないということは分かる。「眠り流し」系の行事も、富山の滑川の「ネブタ流し」が南限である。行灯文化が存在する、あるいはかつて存在していた地域は、行灯文化を受け入れる何らかの素地があったのかもしれない。



写真3 滑川のねぶた流し（左）と能登のキリコ（右）

（萱岡 雅光）

7. 砺波夜高の概要

本節では、今日行われている砺波夜高祭の日程、場所などについて概要を紹介する。

7.1 祭りの日程と場所

砺波夜高祭は、毎年6月の第2週の金曜日と土曜日の2日間に行われる。砺波夜高祭では、初日の「夜高行燈コンクール」と2日目の「夜高行燈の突き合わせ」という2つのイベントがメインとなっている。2009年の統計データによると、祭りが行われた2日間におよそ6万人の見物客が訪れた。初日の夜高コンクールよりも、2日目の突き合わせの方が非常に盛り上がっており、見物客も初日より多いようである。

砺波夜高祭のメインイベントは富山県砺波市の砺波駅周辺にあるメインストリートで行われている。祭り初日の夜には、夜高祭に参加する14町の夜高行燈がこのメインストリートに集まり、夜高行燈コンクールを行う。そして、2日目の突き合わせは、このメインストリートにある「富山第一銀行砺波店前」と「北陸銀行砺波店前」の2か所で行う。

7.2 夜高行燈コンクールについて

夜高行燈コンクールは祭りの初日に行われる。今年（2010年）に筆者が観察した時は、コンクールは21:00から審査を始めるため、20:30頃に14町の夜高行燈が既定の場所に集まってきた。そして、14基の大作燈が一行に並んだ。審査中は、高評価を得るために、夜高節を歌ったり、ダンスを踊ったり、各種のパフォーマンスを行っていた。

夜高行燈コンクールはいくつかの賞がある。ちなみに、今年（平成22）の成績は表1と表2の通りであった。

表1. 大作燈の部の授賞

しんとみ 新富町	砺波市長賞	(1位)
たろうまる 太郎丸	砺波商工会議所長賞	(2位)
かすが 春日町	砺波市議会議長賞	(3位)
ひろがみ 広上町	砺波市観光協会会長賞	(4位)
さくらぎ 桜木町	砺波市文化協会会長賞	(5位)
みなみ 南町	出町自治振興会会長賞	(6位)
なべしま 鍋島	(協) 砺波商店会理事長賞	(7位)
しんさいえ 新栄町	砺波夜高振興会会長賞	(8位)

部門賞

新富町	行燈賞
太郎丸	部門賞（ツリモン）
鍋島	交流賞・安城市観光協会

表 2. 小行燈の部の授賞

太郎丸	砺波市長賞	(1 位)
旭町	砺波商工会議所会議賞	(2 位)
西町	砺波市議会議長賞	(3 位)
南町	砺波市観光協会会長賞	(4 位)
広上町	砺波市文化協会会長賞	(5 位)
新富町	出町自治振興会会長賞	(6 位)

7.3 夜高行燈の突合わせについて

砺波夜高祭の突き合わせも夜高行燈コンクールと同じ 14 町が参加している。これら 14 町は、「東 5 町」、「西 3 町」、「南北 6 町」と分けられている。東 5 町は東町、春日町、桜木町、木舟町、新町である。西 3 町は神島、広上町、深江である。南北 6 町は太郎丸、鍋島、三島町、南町、新栄町、新富町である。

突き合わせの陣営としては図 2 のように、東 5 町と西 3 町は互いに対戦はせず、南北 6 町と対戦する形になっている。

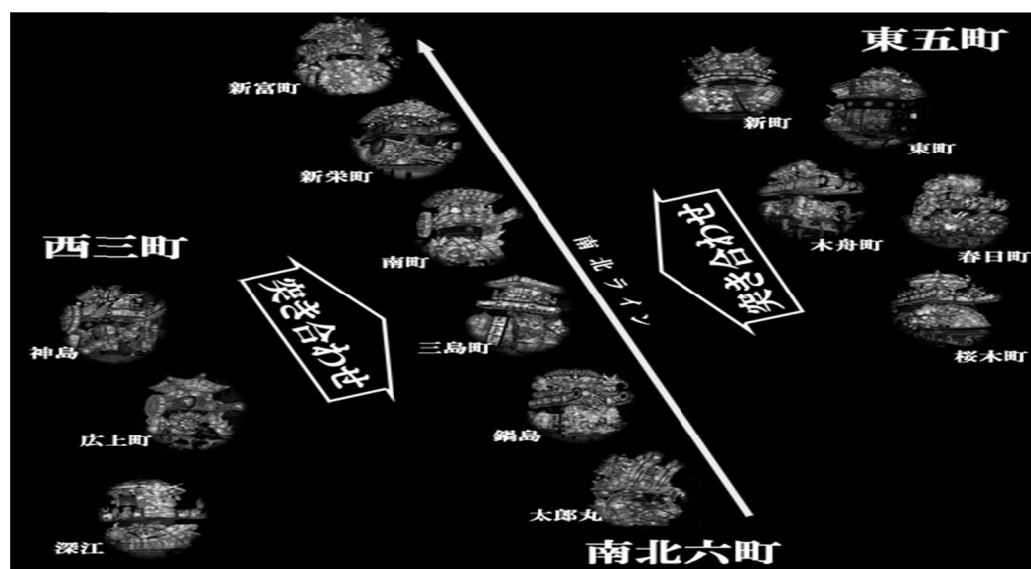


図 2. 砺波夜高祭の突き合わせ陣営

http://yotaka.fc2rs.com/modules/tinyd0/index.php?id=7__ (2010 年 12 月 16 日閲覧)

以下の表 3 は、今年（2010 年）に開催した砺波夜高祭 2 日目の突き合わせの組合わせ表である。表の中には対戦組み合わせと対戦時間を記載している。突き合わせは 20 時 45 分に、2 か所で同時に始まり、そして、23 時 25 分に終了する。1 回の対戦時間はおよそ 20 分間である。

表 3. 夜高行燈突き合わせの組み合わせ表

対戦時間	富山第一銀行砺波店前	北陸銀行砺波店前
1 20:45～21:05	鍋島 VS 広上町	新富町 VS 桜木町
2 21:05～21:25	太郎丸 VS 深江	南町 VS 春日町
3 21:25～21:45	新栄町 VS 神島	三島町 VS 新町
4 21:45～22:05	太郎丸 VS 木舟町	鍋島 VS 東町
5 22:05～22:25	南町 VS 桜木町	新栄町 VS 深江
6 22:25～22:45	新富町 VS 木舟町	鍋島 VS 神島
7 22:45～23:05	三島町 VS 東町	太郎丸 VS 春日町
8 23:05～23:25	新富町 VS 新町	南町 VS 広上町

表 3 から分かるように各町が 2 つの場所で突き合わせは、基本的には 2 回であるが、場合によっては 3～4 回する町もある。また、突き合わせはコンクールとは違い、公式に勝ち負けの決まりがない。しかし、砺波夜高祭りの関係者たちの中には、行燈が互いにぶつかった後に、もし後ろに下がってしまったら、負けたととらえる。したがって、突き合わせの際には、ライバル意識が高まり、どちらの町も後ろに下がらないよう、力を尽くして夜高行燈を押し合う。

（陳 雨）

8. 福野夜高と砺波夜高の違い

前述したように、砺波平野で行われている夜高祭は、元をたどれば福野夜高に辿り着く。だが、福野から他の地域へ夜高が伝播する過程で、さまざまな変化が加わり、現在では福野夜高と他地域の夜高の間に、いくつもの違いを見出すことができる。砺波夜高も例外ではない。以下から、砺波夜高と福野夜高の違いを詳しく述べていきたい。

まず、福野夜高祭は古い家屋の建ち並ぶ狭い路地で行われるのに対し、砺波夜高祭は砺波駅の周辺にある比較的広い道路で行われるという違いもある。そういった地理的な条件の違いは、夜高同士の「ケンカ」の仕方にも影響しており、福野では狭い路地を夜高同士がすれ違う際に、相手の夜高を蹴る、殴るなどして破壊するやり方だが、砺波では広い道路で、何十メートルもの距離を置いて向かい合った夜高同士を、曳き手が押して一気にぶつけあうというやり方をとっている。こういった「ケンカ」で、夜高を動かす際には、曳き手たちが声を合わせて「ヨイヤサー」という掛け声を叫ぶ。この掛け声についても、福野では自分たちの生の声だけで掛け声をかけるのに対して、砺波では、曳き手たちの生の声に加えて、ほとんどの町で、夜高の上に乗った人が、拡声器を用いて掛け声をかけている。

さらに、両者の間には、デザイン面での違いがある。福野は、夜高の彩色に使う色が少なく、赤を主体にして着色を行う。さらに、例年デザインはほとんど同じであり、壊れてもまた同じものに作り直すとされている。一方で、砺波では、福野と同じく、赤を基調としたデザインだが、使う色は砺波よりも多く、全体的にカラフルな印象を受ける。また、デザインは毎年変更されており、町によってはダシの龍が煙を吐くなどの変化に富んだ演出が行われている。

これらのことから、福野夜高祭が、古くからの伝統が守られ続けており、重厚な雰囲気を持つ祭りであるのに対し、砺波夜高祭は自由度が高く、各町の趣向や時代に合わせた変化を楽しめる祭であり、それぞれ異なった特徴を持っているということが分かる。

9. 砺波夜高祭の組織

砺波夜高祭の運営は、砺波夜高振興会と、常任理事会、裁許会が中心になって行う。その他に、夜行会と呼ばれる夜高好きの若者を中心とした組織も夜高祭のサポートに取り組んでいる。以下に具体的にそれぞれの組織の内容や役割を示す。

● 砺波夜高振興会

砺波夜高振興会は、砺波商工会議所内に設置された組織であり、夜高祭の主催者である。夜高祭を観光の視点から、管理しており、主に会場や駐車場の手配、各関

係者との連携などを行う。

- 常任理事会

夜高祭に参加する 13 町は、東、西、南北の 3 ブロックに分けられるが、各ブロックから 2 名ずつ常任理事が選出され、3 年間の任期を務める。夜高祭の規律を管理しており、安全に祭りを進行するために、当日の警備などを行う。

- 裁許会

各町の責任者である裁許によって構成される。夜高振興会や常任理事会との話し合いの場で、各町の意見や要望を出し、実際に祭りに参加する人々の意見を全体に反映させる役割を持つ。

- 愛好会（通称「夜行会」）

夜高に情熱を注ぎ、夜高の将来について語りたいたいと考えている若者によって、自主的に運営されている。参加には、30 歳以下という年齢制限がある。夜高祭を広く知ってもらうために、夜高祭のポスターやパンフレット、看板などを制作し、宣伝の面で大きな役割を果たしている。

夜高祭に関わる組織は、どこかの組織が決定権を持つというわけではない。裁許が町内での細々とした意見を聞き、それを常任理事会、さらには夜高振興会に伝え、全体で話し合い、決定したことを夜高祭全体に反映させていくというように、それぞれの組織が連携して、各々の役割を果たすことで、夜高祭の円滑な運営が可能になっている。

10. 砺波夜高の各町における行燈

では、砺波夜高祭に行燈を出している 14 の町行燈を簡単に紹介しておきたい。なお、以下の写真は 2010 年の本祭で撮影したものを使用している。

【南北六町】

1. 新富

町内の貸ガレージで、青年会を中心に夜高制作を行っている。細かく鮮やかで斬新な模様や、ドライアイスを使用し煙を出すツリモンなどが特徴で、近年コンクールで多く賞を獲得している。また、新富町は小行燈も出しており、一部のデザインを子どもた



ちが自由に描いている。

2. 新栄町



町内の公民館で町内会を中心に制作を行っており、子ども、女性が紙貼りなどを手伝いに来る。骨組には竹を使用しており、電球はLEDを使用している。ツリモンの形は独特で、円柱状になっている。LEDを利用している。

3. 太郎丸



町内の公民館で青年会を中心に制作を行っており、子ども、女性が紙貼りを手伝いに来る。ぼかしを多く使った鮮やかな模様が特徴で、新富町と並びコンクールの賞の常連である。また、太郎丸は小行燈も出しており、デザインは子どもが型を使って描いている。

4. 鍋島

町内の公民館横の倉庫で青年会中心に制作を行っており、女性が紙貼りを手伝いに来る。骨組は竹、角材を使用しており、細部には塩ビ管やコンパネを使用している。太鼓台にはキャラクターのツリモンが吊るされる。



5. 三島町

町内の公民館で男性を中心に制作を行っており、子ども、女性が紙貼りを手伝い

に来る。骨組は竹を使用しており、金属の溶接は行わない。行燈に描かれる模様はあっさりしたものである。

6. 南町



町内にある神社の中で、青年会中心に制作を行っており、婦人会が紙貼りを手伝いに来る。

骨組には竹、木を使用しており、金属の溶接も行う。型はあまり使わずフリーハンドで、細々せずシンプルに、荒々しい模様を描く。南町は小行燈も出しており、デザインは子どもが描いている。



【東五町】

1. 春日町

町内の公民館で、青年会を中心に制作を行っており、子ども、女性が紙貼り、模様描き、色塗りを手伝いに来る。骨組には番線を使用している。型紙を使用して模様を描き、色の塗り方はベタ塗りが多い。ダシの部分は大きな花車の形になっている。



2. 木舟町



木舟公園に建てたプレハブ 2 つと、小屋を 1 つ使い、青年会を中心に作業を行っている。婦人会が紙貼り、色塗りを手伝いに来る。ダシは大きな船の形になっている。また、当日子ども太鼓が練り歩く。木舟町の夜高は 16 年前に一度途絶えているが、10 年前に復活している。

3. 桜木町

町内の公民館で、青、壮年会を中心に制作を行っており、婦人会が紙貼りを手伝いに来る。骨組は竹や木を使用しており、補強にはタコ糸を使用している。また細部には塩ビ管を使用し、電気はネオンライトを使っている。



4. 新町



町内の公民館で、男性を中心に制作を行っており、婦人会が紙貼りを手伝いに来る。骨組は竹や木を使用している。動くツリモンが特徴である。子どもは、各自でとっぺ行燈を制作する。ダシは船の形になっている。

5. 東町

町内の空き駐車場にプレハブを建て、男性を中心に制作を行っており、婦人部が紙貼りなどを手伝いに来る。当日子ども太鼓が練り歩く。骨組には角材を使用している。ダシやツリモンには、歌舞伎曳山をモチーフとしたデザインが施されている。



【西三町】

1. 神島

町内の、夜高制作のために作られた公民館で、青年会を中心に制作を行っており、子どもや婦人会が紙貼りを手伝いに来る。また、子どもは太鼓の台に自由に絵を描く。骨組みには竹を使用しており、細部には針金やアルミを使用している。



2. 広上町



町内にある大きな小屋で、男性を中心に制作を行っており、伝統的に制作には女人禁制となっている。骨組には竹、番線を使用している。模様は型紙を使用しているが、フリーハンドでも描く。色は赤を基調とし多く使用しているため、夜高は全体的に赤っぽくなっている。

3. 深江

町内にある小屋で、男性中心に制作を行っており、女性が紙貼りを手伝いに来る。骨組は竹を使用しており、補強には番線を使用している。模様は型紙を使用するが、フリーハンドでも描く。町内の各班でとっぺ行燈を作っており、女性が蠟引きする。



以上、砺波夜高祭りについて概要を見てきた。次の章からは、4つの町での現地調査にもとづいて、祭りと地域の関係について具体的に見ていきたい。

第2章 太郎丸住民にとっての夜高祭の楽しさと役割

陳 雨

1. 太郎丸について

^{たろうまる}
太郎丸は、砺波夜高祭に参加している町の中で人口が多く、面積が広く、商業や産業が盛んである。さらにほぼ毎年の夜高コンクールで何らかの賞を受賞している。夜高に関わる出町 14 町の中でも夜高祭への参加に熱心な町である。このような町で住民が夜高祭に対してどのような関心を持っているのか興味を持ったため、この町を調査地として選んだ。

現在の太郎丸は三つの町（^{ゆたかまち}豊町、^{たろうまるちゅうおう}太郎丸中央、^{ほりたじま}堀田島）で構成される。本来は散居村景観の水田農業地帯である。現在、国道 156 号線、中野往来（主要地方道砺波庄川線）、国道 359 号線が通り、北陸自動車道砺波 IC がある交通の要路となっている。下記の図 1 の黒い線で囲まれている範囲が太郎丸である。

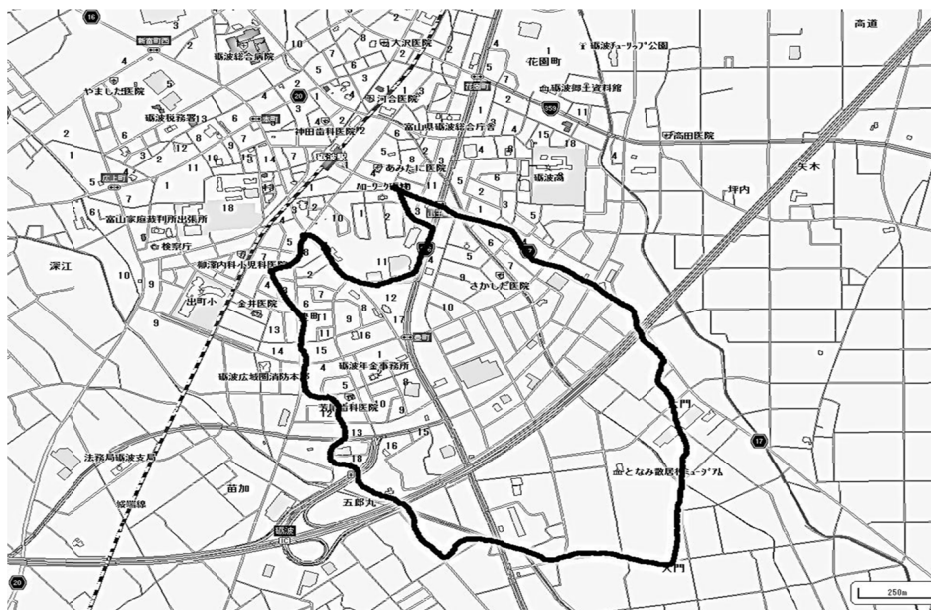


図 1. 太郎丸地域（いつも NAVI (PC) より作成）

砺波市役所によると、太郎丸の世帯数は 575 世帯、人口は男性 746 人、女性 798 人の計 1544 人である（2010 年 9 月 30 日時点）。砺波市出町地区で一番南に位置しているため、昔「^{かみむら}上村」と呼ばれていた。出町地区の他の町とは違い、太郎丸では「町」という字を後ろに付けず、単に「太郎丸」と呼ばれている。砺波夜高祭に参加している 14 町のうち、「鍋島」、「神島」、「深江」も太郎丸と同じく「町」を付け

ずと呼ばれている。

せいふうかい 正風会

正風会とは1910年（明治43年）に発足した、100年もの長い歴史を持つ組織である。太郎丸正風会百年によれば、正風会は、1908年（明治41年）に出された^{ぼしん}戊申詔書^{しやうしよ}が発端となり、太郎丸上村の住民内で創立された。創立時の会則は戊申詔書で説かれた勤勉節約の理念に沿ったものとなっており、風俗の矯正、身分相応の儉約、共同一致による公益を図ることなどが目的とされている。そして、その目的に沿って、生活普及と風紀の改善、道德心の育成に努めていた（太郎丸正風会記念雑誌委員会、2008）。当時、正風会の集合場所であった正風会館は、現在、太郎丸正風会館となっている。そして、太郎丸の公民館として、夜高祭りの製作や獅子舞の練習などに利用されている（写真1）。正風会館と隣接しているのは太郎丸堂島八幡宮という神社であり、太郎丸では夜高祭の宮参りはここで行われる（写真2）。他にも町の獅子舞はこの神社に奉納される。

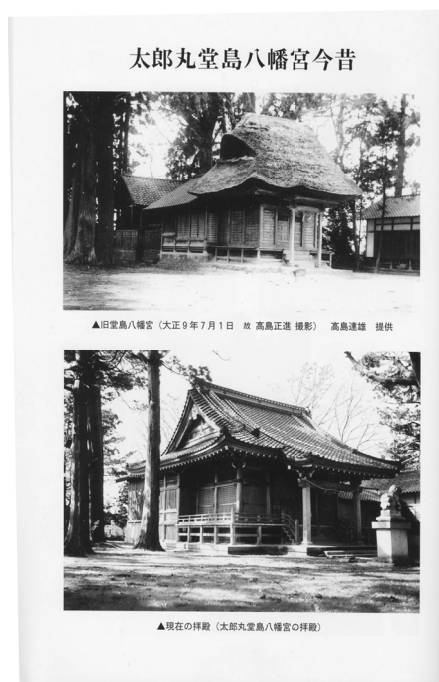


写真1. 現在の太郎丸正風会館と昔の様子 写真2. 太郎丸堂島八幡宮
（写真1・2は「太郎丸正風会百年」に拠る）

2. 太郎丸夜高祭に関する組織と役職

2-1. 祭りの組織

太郎丸夜高祭には、小学生以下の子どもたちで構成される児童クラブ、これら小

学生の親たちで構成される児童会、社会に出た時から 40 歳までの男子青年会、小学生のお母親たちの母親クラブ、そして婦人会といった組織が関わっている(表 1 参照)。

表 1. 太郎丸の夜高祭に関わる組織

児童クラブ	小学生
児童会	小学生の親（人数は 50～60 人）
青年会	社会人～40 歳まで（豊島 18 人；太郎丸中央 11 人；堀田島 14 人）
母親クラブ	小学生の母親
婦人会	紙貼り、ご飯作りなどを行う

2-2. 祭りの役職

夜高祭では、祭りのためだけの役職が設けられている。「裁許^{さいきょ}」は祭りの準備段階から祭りが終わるまでの各町の代表者及び責任者としての役目を背負っている。その補佐役には「副裁許」という役職がある。裁許は、豊町、太郎丸中央、堀田島といった太郎丸を構成する三つの町で年ごとにローテーションし決められている。そして毎年会計となる人は裁許が決めることになっている。

表 2. 祭りに関わる主な役職

役職名	役割
裁許（さいきょ）	祭りの代表者
副裁許	裁許の補佐（2 人）
警護	突合せ時の警備をする
会計・会計補佐	夜高祭りの費用管理
電気	夜高行燈内部の電球とバッテリーの取り付けなど
連絡係り	祭りに関する諸事

2-3. 裁許と副裁許の服装について

以下の写真 3 に写る三人の中で、中央の人は今年の裁許であり、その両脇の二人は副裁許である。基本的には衣裳は同じだが、襷^{たすき}の色が違っている。裁許の襷は赤色で、そこに「太郎丸裁許」と書いてあり、副裁許の白色の襷には「太郎丸副裁許」と書いてある。



写真 3. 裁許と副裁許

3. 太郎丸夜高祭の特徴

砺波の夜高祭は町によって、行燈が少しずつ違うなど、各町の特徴がある。太郎丸の夜高行燈は色、デザイン、絵柄、紙の質などを非常にこだわっているのがその特徴である。次から、それらの特徴について具体的に説明していく。

3-1 行燈用紙について

太郎丸の夜高行燈は和紙を使用している。和紙は普通の紙より色が鮮やかで、丈夫なためである。さらに、太郎丸では和紙に描く絵柄をもっと綺麗に見せるため、質の良い五箇山和紙を使用し、その和紙を一年以上寝かしている。青年会のKさんはその理由を「一年以上寝かした和紙のほうが色が綺麗に見える」と語った。下記の写真 4 と写真 5 は、実際に今年描かれた太郎丸夜高行燈の絵柄の一部であるが、本書での写真は白黒であるため、その鮮やかな色が表現できないことが残念である。



写真 4. 和紙に描かれている絵柄 1



写真 5. 和紙に描かれている絵柄 2

3-2 太郎丸のぼかしについて

ぼかしとは、色を濃い部分からしだいに薄くしていくふちどりの技法のことである（写真 6 を参照）。近年、砺波夜高祭において夜高行燈の色をどのようにしたら、よりよくきれいに見えるかという意識が高まり、その結果ぼかしが各町で使われるようになった。

太郎丸のぼかしは他の町よりもずば抜けていると言われており、近年砺波夜高祭のコンクールでも、ぼかしを多用した絵柄によって多くの賞を取っている。太郎丸はぼかしの導入が他の町より早く、毎年の夜高行燈を製作するときに、ぼかしの段階で非常に力を入れている。



写真 6. 太郎丸夜高行燈ぼかしを使った部分

4. 太郎丸夜高祭の日程

太郎丸夜高祭の日程は、以下表 3 のようになっている。しかし、私がこの祭りを調査し始めたのは 4 月のことであったため、製作検討と準備には触れることができなかった。

表 3. 太郎丸夜高祭の日程

3 月 6 日（土）	製作検討①
21 日（日）	製作検討、準備②
23 日（火）	製作開始日
4 月 3 日（土）	夜高 総会
5 月 22 日（土）	中入り
30 日（日）	だいじめ 台締め
6 月 6 日（日）	なわじめ 縄締め
8 日（火）	組立て
9 日（水）	仕上げ
10 日（木）	製作予備日
11 日（金）	曳きまわし
12 日（土）	曳きまわし、突き合わせ、行灯解体
13 日（日）	会館清掃、反省会

砺波夜高祭は製作検討、準備から祭り終了までに約 3 カ月間かかる。このような準備期間の長い祭りは富山県ではとても珍しい。

5. 祭りの流れ

これから、太郎丸夜高祭の日程に基づいて、夜高の製作から当日までの主な作業や行事の内容について詳しく説明していく。

5-1. 台締め

太郎丸では夜高の製作開始日から 5 月の月末までは、行燈の骨組み作りと紙貼り、色塗りの作業が行われた。

5 月 30 日には「台締め」が行われた。この日は事前に連絡があり、40 人くらいが集まった。台締めは非常に難しい作業であるため、青年会の OB の方々の手伝いが不可欠である。この日も多くの OB の方々が手伝いに来ていた。

夜高には行燈全体を支える基礎となる台がある。「台締め」とは、夜高の重要な部

分である「ツリモン」や「ダシ」を載せるためや、夜高を押すために必要な、「練り棒^{ねりぼう}」や「横棒」と呼ばれる丸太を載せる作業のことである。その台はケヤキ製で、非常に丈夫なためぶつかっても簡単には壊れない。また、台の下には車輪が付いている。

台締めには次のように進む。まず、台の両端に練り棒を載せる（写真 7,8）。そして、練り棒の上に横棒を載せる（写真 9）。砺波の夜高の練り棒は 9 メートル、横棒は 2,5 メートルと長さは決められている。練り棒と横棒は「ばんせん」で固定する。練り棒は前方が長く、後方は短いようにして載せる。横棒は基本的に木製だが、前後のバランスを整えるため、一番後方には鉄製の横棒を付ける。また、太郎丸は「突き合わせ」（後述）の時いつも下側となるため、下側から上側の突き合わせ相手の夜高をより押し上げられるように、その戦略として台の一番後方の横棒に鉄製の棒を使っている。横棒は台に載せる本数は町によって違う、太郎丸は前の方には 4 本、後ろの方には 3 本、そして、バランスをとるために練り棒の下にも縛り付けている、前下には 2 本、後ろ下には 3 本。一般的に練り棒の上に載せる横棒は太ければ、本数が少ない、逆に細ければ、本数が多くなる。



写真 7. 練り棒



写真 8. 横棒



写真 9. 台締め後の様子

5-2. 縄締め

縄締めとは台締めした後にばんせんで固定された台を縄で巻く作業である。練り棒や横棒によって、全体が非常に長く、大きくなったため、大量の縄を使うことになる。



写真 10. 使われている縄

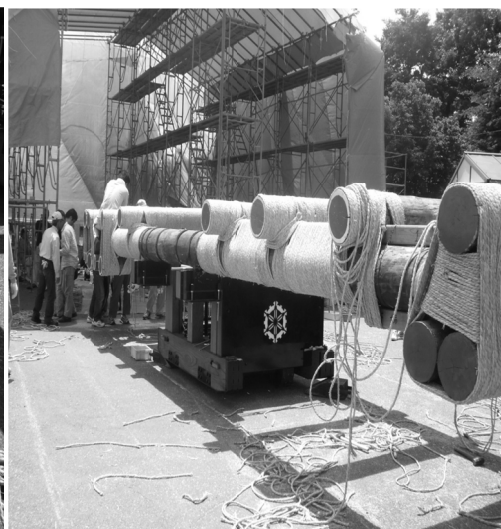


写真 11. 縄を巻いた台の様子

6月6日の縄締めが行われる日には、台締めと同じく40人前後の青年会のOBの方が集まった。縄締めも非常に難しい作業であり、さらに台の前方と後方は、上と下の横棒を縄で巻かなければならないため、OBの手伝いが必要となる。大量の縄を練り棒と横棒の間に沿って巻くことによって、練り棒と横棒は固定され、外観もきれいになる。

5-3. 組立て

太郎丸では、祭り本番の2、3日前に組立て作業を行う。まず、縄締めを終えた台の中央部に長さ4～5メートル「シンギ」と呼ばれる木をのせる。このシンギは夜高行燈ではかなり重要な部分である。なぜならこれからの作業は、今まで作った「田楽」や「ダシ」、「ツリモン」はシンギを通してのせることになるからだ。これらの部分はクレーンで持ち上げ、一つ一つ装着していく。まず、田楽をシンギに通してのせ、そして、田楽の上にダシをつける。最後に、ツリモンをダシの下に吊り下げる（完成した様子は写真12を参照）。



写真 12. 完成した様子

6. 製作と製作現場

夜高の制作は、3 月の後半からはじめられる。制作メンバーは太郎丸の 3 つの町（豊町、太郎丸中央、堀田島）内にそれぞれに属している青年団である。普段は 3 つの町の青年団は別々に活動しているが、夜高祭りのときだけは共同作業をする。

太郎丸の夜高の制作期間は約 3 カ月間にかかるが、この 3 カ月の間は、土・日を除いて毎日午後 6 時半頃から製作が行われる。制作の参加は、自由で、個々人が都合に合わせて集まっている。そのため、毎日制作に入る人もいれば、そうでない人もいる。また、制作現場では CD プレーヤーなどで音楽が流され、制作者は話や冗談を言いながら作業しており、非常に和やかな雰囲気だった。



写真 13. 制作風景 1



写真 14. 制作風景 2

そして、多くの制作メンバーが次の日に仕事があるにもかかわらず、夜遅くまで作業している。なぜ毎日このように夜遅くまでするのか制作の人に質問すると「夜高が好きだから」、「楽しいから」、「ここで世間話できるから、楽しい」、「普段あんまり顔合せる機会ないけど、ここで色んな話できるから」と多くの人は語った。

以下は今年の太郎丸夜高行燈の外観の様子である。左は昼間の様子であり（写真15）、右は夜の様子である（写真16）。台の上に白い紙に「太郎丸上村」と書かれた部分が「田楽」、その田楽の前後に吊り下がっているのが「ツリモン」である。この写真では分かりづらいかもしれないが、前のツリモンは鳳凰で、後ろは龍である。田楽の上に載せているものは「ダシ」と呼ばれる。今年、太郎丸の夜高行燈には、ダシの上に電線よけを初めてつけた。電線よけは、非常に役立ったため、来年またつけるという話であった。ちなみにこの行燈は、今年の砺波夜高祭コンクールで2位となる砺波商工会議所会頭賞を受賞した。



写真 15.太郎丸夜高行燈昼間の様子



写真 16.太郎丸夜高行燈夜の様子

7. 祭り当日（1日目）

6月11日（金曜日）

砺波夜高祭において、太郎丸は太行燈と小行燈の両方を出している。当日の太行燈・小行燈のスケジュールは、以下表4と表5の通りである。

表4. 太郎丸小行燈初日の流れ

16:00	集合	太郎丸会館
18:00	出発	曳き廻し
18:50	休憩	斎藤銘木店横
19:15	出発	出町中心部へ
19:45		審査会場（審査 20:00）北陸銀行前
20:00		出町神明社前
20:30	到着	金森自転車前（児童と母親は解散、太行燈を先導する）
20:30	以後	太行燈を先導するため、以下の太行燈の巡行と同様

表5. 太郎丸太行燈初日の流れ

17:30	集合	太郎丸会館
18:00	出発	曳き廻し
18:50	休憩	斎藤銘木店横
19:15	出発	出町中心部へ
20:00		本町交差点付近で待機
20:45		審査会場（審査 21時から） 待機 展覧
22:10		審査発表
22:20	出発	曳き廻し
23:50	到着	太郎丸会館（翌日の突き合わせ準備）

6月11日が砺波夜高祭の初日である。この日の太郎丸夜高の参加者の集合時間は午後4時半となっている。私が午後1時に着いた時、すでに何人が集まっていた。今日、行燈にバッテリーを取りつける作業がある。太行燈に取り付けるバッテリーは全部で14個あり（太行燈）、他の町より多いそうだ。バッテリーは多いとは言え、2日間は持たないため、1日目終了後には充電しなければならない。

集合時間に近づくと共に人がどんどん集まってきた。出発する前に、太郎丸正風会館前で裁許はお神酒持ち、副裁許はお清めの塩を持ち、行燈の台に沿って、一周

りまいて歩くことになっている。祭りが無事に終わるようと祈っているそうだ。そのあと、裁許と副裁許 3 人でそのお神酒とお清めの塩を持ち、隣にある「太郎丸堂島八幡宮」という神社に行き、参拝した。



写真 18. 裁許と副裁許お宮参り



写真 17. 出発する前お神酒で夜高を撒く

夕方 6 時に会館から出発する。行燈の一番前に歩いているのは裁許と町内会長である。砺波夜高祭で、町内会長が裁許と一緒に歩くことは昔からの慣例であるが、他の町にはこのような慣例はないそうだ。裁許の後ろは副裁許が続く。副裁許は行燈が進む方向やルート案内する（写真 19）。行燈は非常に高さがあるため、途中、電線と引っ掛かることがある。そのため、長い竹を持ち、電線よけをする役を設けている（写真 20）。



写真 19. 公民館を出た時の様子



写真 20. 町内で練りまわす様子

1 時間くらい太郎丸町内の一部で練りまわしてから出町中心部へ向かう。太郎丸の夜高行燈は出町中心部に行く途中、国道を渡らなければならないため、その際はパトロールカーが夜高行燈の前と後ろに一台ずつついて誘導していた。夜 8 時頃に出町中心部に到着し、砺波夜高祭コンクール場所となる^{ほんまち}本町交差点付近で待機する。しばらくすると他の町の夜高行燈が次々と到着した。

夜高コンクールを行うため、14 基行燈は一行に並ぶ。審査員は順番に審査を進めていくが、審査員が自分の町の夜高行燈を審査するまでの間も、囃す、夜高の歌を歌うなどしてにぎやかにしていた。観客を喜ばすためでもあるのだろうが、自身らも楽しんでやっているようだ。

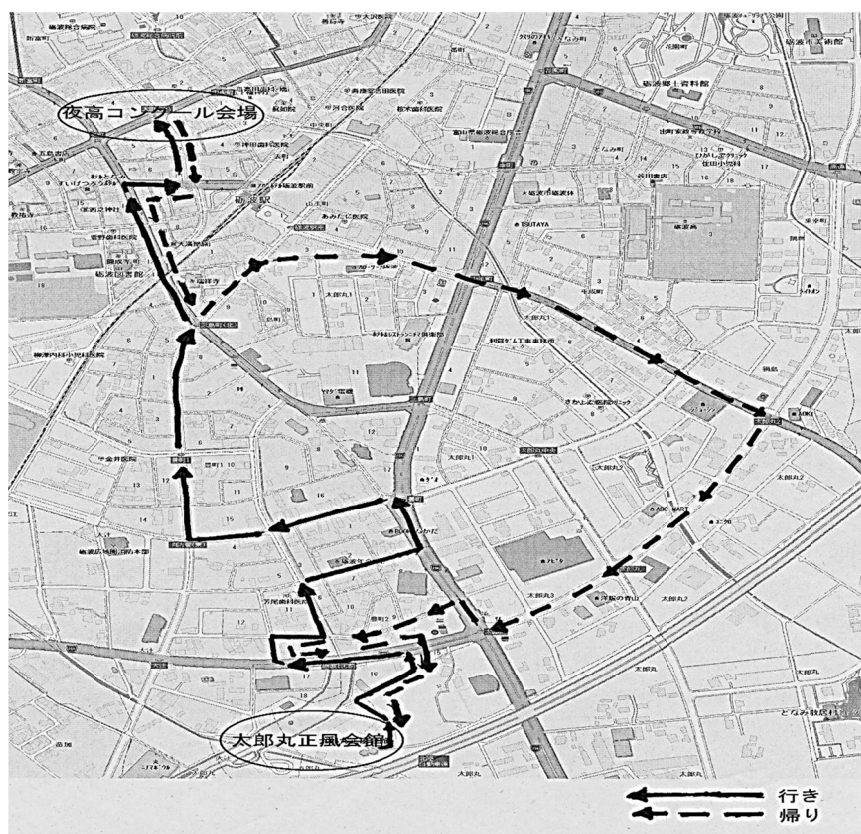


図 2. 1 日目目曳きまわしルート

7-1. 祭り当日（2 日目）

6 月 12 日（土曜日）

2 日目の太郎丸の大打燈、小行燈のスケジュールは、以下表 6 と表 7 の通りである。

表 6.太郎丸小行燈 2 日目の流れ

17:00	集合	太郎丸会館前
18:30	出発	出町中心へ
19:30	写真撮影	光影社前
20:00		中村百貨店前
20:40	児童、母親解散	金森自転車店前
20:40	以後	大行燈を先導するため、以下の大行燈の巡行と同様

表 7.太郎丸大行燈 2 日目の流れ

17:00	集合	太郎丸会館
18:20	出発	出町中心へ
19:20	写真撮影	光影社前
19:50		突き合わせの準備
20:30	待機	龍三前
20:45		突き合わせ開始
21:05	対深江町	富山第一銀行前
21:45	対木舟町	富山第一銀行前
22:45	対春日町	北陸銀行前
23:30		本町交差点にて手打ち
23:50		太郎丸会館へ向け出発
24:50		会館到着 行燈の解体・片づけ

実際は、時間通りにいかず、多少ずれたところがあったが、流れとしては以上のように進んだ。

祭り 2 日目は夕方 6 時 20 分頃に、太郎丸正風に出発した。町内の練りまわしをしながら、出町の中心部に出るまでは、およそ 1 時間かかった。そして、2 日目に 1 日目のコンクールで優勝した賞状を行燈に飾り、出町中心部で太郎丸夜高大行燈と夜高小行燈にかかわる人たちの集合写真を撮る。この集合写真は、毎年必ず撮ることになっている。

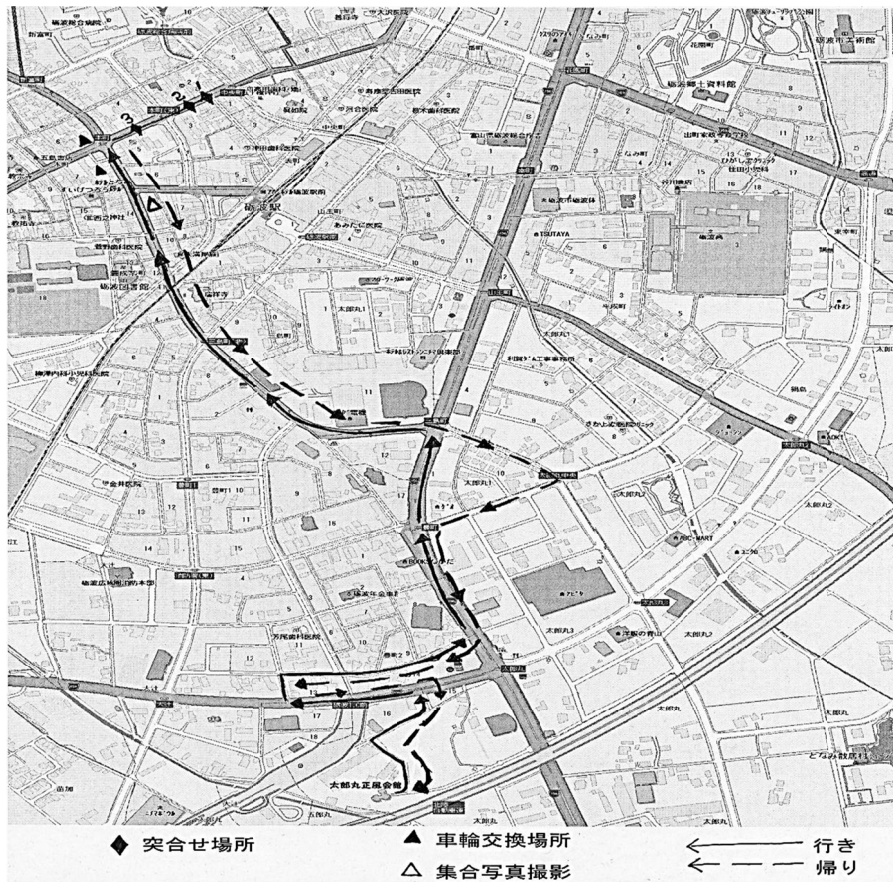


図 3.祭り 2 日目練りまわしルート

7-2. 太郎丸の突き合わせについて

2 日目に行われる突き合わせに太郎丸の夜高行燈は参加している。そのため、車輪を突き合わせのものに交換する(交換場所は図 3 を参照)。この車輪は「ケンカ車輪」と呼ばれている。ケンカ車輪は普通の車輪よりスピードが早い、そして、前述したように、突き合わせの際、太郎丸は下から押し上げる側になることが多いため、数 10 メートル離れた距離から最高スピードで走り、一気に相手に突っ込み、さらにその勢いで相手を押さえつける戦略をとることが特徴である。突き合わせはコンクールのように勝ち負けが公式に決まるわけではないが、砺波夜高祭りの関係者は、もし後ろに下がってしまったら、負けたと感じる。したがって、突き合わせの際には、ライバル意識が高まり、どちらの町も後ろに下がらないよう、力を尽くして夜高行燈を押し合う。

そして、突き合わせの時は、太郎丸の人口は多いため、制作段階で来ていなかった人が多く来ていた。突き合わせのために来た人たちも太郎丸の住民であり、これらの人たちは、昔太郎丸夜高祭と何らかのつながりがある人が多かった。夜高行燈を押す人が多いからこそ、突き合わせで太郎丸は勝つことが多い、なにより、自分

の町が勝った時の喜びは格別である。

7-3. 突き合わせ相手について

突き合わせは砺波市出町中心部の富山第一銀行前と北陸銀行前の 2 か所で行われる。第一銀行前では太郎丸は深江と木舟町と対戦し、春日町との対戦は北陸銀行前で行う（図 3 を参照）。祭りの初日の夜高コンクールの時にも見物客が大勢いたが、2 日目の見物客は初日より明らかに多い。夜高行燈が互いにぶつかる突き合わせは非常に危険であり、見物客との事故を起こさないように、道路の両端にロープを張り、警備を設けている。

21：05 から一回戦となる深江と第一銀行前で対戦し、2 回戦は 21：45 から、同じく第一銀行前で木舟町と対戦した。そして、3 回戦は、22：45 から北陸銀行前で、春日町と対戦した。

突き合わせは相手と 2 度ずつ対戦することになっている。だが今年は、春日町と対戦した時に非常に盛り上がったため、4 度も対戦するという異例の事態があった。

7-4 手締め

14 町の夜高行燈がすべて突き合わせを終えた後、「東」「西」「南北」に分かれ、3 つの交差点で手締めを行う。夜高の曳き手はこの手締めのことを「シャンシャン」と呼んでいる。

午後 11 時半頃、本町交差点で南北六町が手締めを行う。（南北六町とは太郎丸、鍋島、三島町、南町、新栄町、新富町を指す。）六つの町では、毎年「当番裁許」という役割が決められている。そして、六つの町の裁許と副裁許全員が輪になって、お神酒を当番裁許から順に、1 人一口ずつ飲み、全員飲んだ後、事前に決められた一人が各町を代表して夜高節を歌う。最後に、南北六町の全員が掛け声とともにリズムを合わせて手拍子を打つ手締めを行い、今年の夜高祭は幕を閉じた。

8. 住民の祭りに対する意識

太郎丸町内の住民全てが、夜高祭に直接かかわるわけではない。夜高祭りにかかわっていない人々も含めて、住民は祭りをどのように認識しているだろうか。かかわっている住民、かかわっていない住民、両方の住民の語りから考えていきたいと思う。

8-1 祭りにかかわっている住民の語り

まず太郎丸夜高と直接にかかわりがある住民、つまり、制作段階から参加している住民らに夜高祭の魅力とは何か訊ねたところ、30 代男性は「自分達が苦勞して作

ったモノが毎年壊れ、そしてまた毎年作り直すところ」と語る。そして同じ男性に夜高祭が続いている理由を聞くと「おもしろいから、好きだから、維持していく楽しみがある」と語った。

今回の調査で、夜高祭の PR について多くの制作者に聞いたところ、「知名度上げたい」、「人来てほしい」、「市とかもっと PR してほしい」というほぼ同じような答えが多く返ってきた。

20 代男性は「子どもの頃から、ケンカ（突き合わせ）に出たかった。しかし（小さな子どもと違って）中高生は（祭りに）来ない時期（中学生高校生の時期は祭りに参加しようとしな）、（かれらを）どう（祭りに）戻すかが課題の 1 つ」と語った。また、現在、太郎丸夜高祭の問題点は何かと他の 20 代男性に聞いたところ、彼は「子どもが少ないので、大人になっても（町に）残ってるか不安」と語ってくれた。

このように、現在、各町の夜高において、制作を受け継ぐ若者が少なくなっていることが共同問題だ。しかし、太郎丸夜高制作している人たちの中に 1 人高校生がいた。私は彼に、夜高祭のことをどういう風に考えているのかについて、話を聞いた。

彼は現在高校 2 年生で、青年団にはまだ入っていない。それにもかかわらず一週間に 3 回くらいのペースで製作に来ている。彼は小さい時から毎年続けて夜高にかかわっているという。

夜高祭りに参加したきっかけとは何かと質問すると、「お父さんが参加していた、夜高が大好きで、津沢や福野にも連れていってくれた、小学校から小行燈制作していた、中 2 から大行燈制作に入った」と語った。

そして、なぜ夜高を作るのかに対して、「祭りや突き合わせを見ていて、綺麗な、俺も作りたいと思った」、「楽しい、綺麗にできたら嬉しい、小さい頃から夜高に親しんでる」と話した。

夜高の自分の中での位置づけはという質問に対しては、「普通に楽しむもの、文化祭の出し物感覚ではない...見た目も、かかわる年齢層も違う、1 人でも続けていきたい、なくなってほしくないし、もしなくなったら立ち上がるつもり」と熱弁した。

彼にどんな夜高を作りたいかと訊くと、「今のように綺麗さ重視、迫力やインパクトよりも、デザインの美しさやぼかしなどで勝負したい」と話す。ここまでの語りからこの高校生が夜高祭に対し、非常に熱意を持っていることがわかる。また、夜高祭りの魅力は、決して大人にしか分からないものではなく、若者にも通じるものだということが分かる。

8-2 祭りにかかわっていない住民の語り

ここまでは祭りと直接かかわっていた人間の語りだった。では、これからは祭り

に直接にかかわりっていない住民の語りから、自分の町の夜高祭に対する意識について分析しようと思う。

住民の聞き取り調査方法として、一軒一軒に訪問調査を行った。他にも畑作業をしていた人たちを対象とし、調査を行った。

まず、毎年の夜高祭見に行くかという質問に、50代男性と50代女性は「毎年行く」と言う、60代女性は「毎年行っていたが、今年、体の都合で行かなかった」と話す。

砺波の夜高祭は各町が自らお金を出して、催されている祭りであるため、毎年町内で募金を行っている。この募金についてどう思うか聞いたところ、50代女性は「毎年（お金）出してる、文句なし」、そして60代女性は「『出すもの』と思う」と語った。

自分の町の夜高はどう思うに対して、50代男性が「形が年々違う」、60代女性は「今年はきれいだった、年によって違う」、50代女性は「色はあっさり、他の町は赤い」、70代女性は「支えてあげたい、見守りたい」また「豪快な感じ、男の世界だと思う」と笑いながら話していた。

わたしは現在祭りに直接かかわっていない以上の住民たちは、祭りとは全くかかわりが無いと思っていた。しかし、実際に話を聞くと、多くの住民が何らかの形で祭りとかかわっていたことが分かった。例えば、一回だけ祭りの制作したことがある住民や、昔に紙貼りしていたことがある住民、家族のだれが祭りとかかわっている住民などがいた。つまり、太郎丸町内住民が自分の町の祭りに非常に興味を持っていることが分かる。

9. まとめ

以上の、太郎丸夜高祭と直接かかわっていた住民の活動と語りをまとめると、祭りにかかわる住民が魅力と感じているのは、「毎年新しい行燈を創る楽しみ」、「見物客に見られる楽しみ」、「維持すること」であることが分かった。夜高行燈の制作にわざわざ「五箇山和紙」を使用したり「ぼかし」に凝るところからは、夜高祭に参加する太郎丸の人たちが、他の町と競うことに楽しみを見出していることもうかがえる。また、こうした夜高祭の楽しさが大人にしか分からないものではないということは、夜高祭に制作から関わっていた一人の高校生に感じられた熱意からわかる。

一方の、祭りと直接かかわりのない住民であっても、以前に何らかの形で関わったことがあるなどの理由から、毎年祭りを見に行く住民がほとんどのようだった。こうした背景があるため、たとえ自らが祭りに直接参加しないとしても、夜高祭の負担に対して不満のある住民はほとんどいないようであった。それどころか、参加していない住民であっても、太郎丸の一員という意識から、夜高祭と一緒に支えたいという気持ちを持っているようである。自分の町の行燈が毎年創られることや行

燈の美しさに対して、非常に関心を持っていることは、「形が年々違う」、「今年はきれいだった」、「色はあっさりしている」といった語りからもよく分かるところである。つまり、夜高祭の楽しさは、直接かかわる人たちだけが楽しんでいるものではない。

制作と制作風景の章で述べたように、太郎丸では 3 つの町内の青年団が、夜高祭の制作期間中に団結し、協力し合う。普段同じ町内に住んでいても、会う機会が少ない住民同士が、祭りの制作で集まることによって、交流ことができる。夜高祭を制作に参加することをきっかけに、新しく参加した人間も以前から参加していた人も、互いにコミュニケーションを深めている。この状態を図に表したものが、図 4 である。色の濃い部分が、太郎丸が夜高祭期間中に形成される地域住民のコミュニケーションの場である。

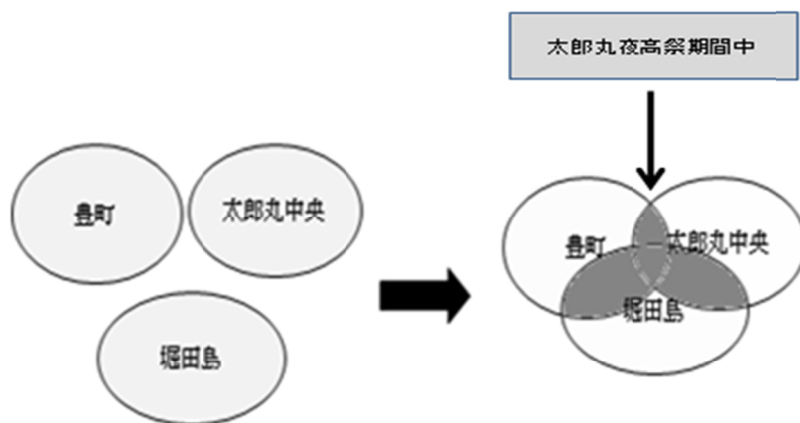


図 4.太郎丸夜高祭期間中における機能

以上のことから、祭りの制作と実施は二重の意味で人々を結びつけていることがわかる。ひとつは、参加しているか否かに関わらず、夜高に関心のある人々を結びつけるという役割であり、もう一つは、夜高行燈の制作を通じて太郎丸という地理的にかなり広い地域の 3 つ地域の住民間のコミュニケーションの場を作りだしているという役割である。

おわりに

今回、砺波夜高祭の調査をきっかけに、太郎丸で夜高祭の制作段階から、祭りが終わるまで調査を行った。太郎丸では夜高の制作者だけではなく、町内住民も夜高祭に対して、非常に熱意を持っていることを肌で感じた。特に、制作者たちの祭りに対するひたむきな情熱が印象に残った。

祭り当日の夜高コンクールや突き合わせには、私が曳き手として参加したこともあった。夜高コンクールで賞をとった時、突き合わせで勝った時、その喜びが今も忘れられない。その時は、まるで自分も太郎丸の一員であるかのように感じられた。私は留学生として日本にやってきてから、それまで日本の祭りに参加したことはなく、今回、夜高祭に参加できたことは、はじめて日本で参加した祭りであり、非常に良い体験であった。

今回の調査にご協力いただいた太郎丸の方々には、とても感謝の気持ちでいっぱいです。今後とも、太郎丸の夜高祭がさらに発展していくことを願います。

参考文献

太郎丸正風会記念雑誌委員会 2008（株）吉田印刷所 『太郎丸正風会百年』

第3章 春日町における祭りを媒介としたコミュニティの再構築

明和 亜沙美

はじめに

砺波夜高祭を調査すると決めた際に、まず夜高祭の調査をおこなう4人のメンバーで突き合わせに参加する全14町を訪問し、準備の様子を観察した。砺波夜高は、元祖である福野夜高と異なり、毎年各町が独自のデザインを考えて、夜高の制作を行っている。祭りの出し物である夜高のデザインや形の制約が少なく、各町の個性が際立つという特徴は、夜高の見た目だけでなく各町の雰囲気にも通じていて、制作現場を訪問して受けた印象はそれぞれの町でまったく異なっていた。13町のさまざまな雰囲気に触れたなかで、春日町では、老若男女問わず、多くの住民が言葉を交わしながら、まるで親戚同士のように和気あいあいと作業を行っており、その楽しい雰囲気がひととき印象的だった。春日町の持つどのような背景が、住民たちの和気あいあいとした雰囲気を生み出しているのか。こういった興味を抱いたことが、今回春日町の夜高祭に参加し、調査を行おうと思ったきっかけである。

この報告書では、春日町の概要や祭り本番の様子、さらに住民の語りを通し、春日町における祭りとコミュニティの関わりについて述べていきたい。

1. 春日町の概要

春日町は、JR 砺波駅西口を出て、北東に進んだ場所に位置している（図1）。町内には、砺波市警察署のほか、1999年に建設された7階建てマンションがある。実際に町内を歩いてみたところ、飲食店が密集している駅前市街地と、住宅と少しの店舗が立地している出町郊外のちょうど間に位置しているような印象を受けた。

「春日町」という町名は、昭和20年代からの俗称が、由来となっている。当時は「かすがちょう」と呼称されていたが、当用漢字の策定を受け、昭和37年に「はるひまち」へと変更された。だが、実際に住民たちが町の名前を呼ぶ際には「かすがちょう」「はるひまち」の両方の呼び名を用いており、春日町では二つの呼び名が定着しているようである。

夜高祭には、大行燈のみで参加しており、小行燈は制作していない。また、夜高行燈コンクールでは、平成2年から平成16年まで、15年連続で市長賞を獲得したという記録が残っている。

1-1.春日町の祭りに関わる人口

次に、春日町の祭りに関わる人口の特徴について述べる。ここでは、マンションに住む住民を「マンション住民」、春日町のマンション以外に住む住民を「旧住民」と呼称する。平成 22 年度 8 月時点では、春日町の総世帯は 143 世帯であり、そのうちマンション住民は 73 世帯、旧住民は 70 世帯となっており、マンション住民と旧住民の割合はほぼ同じとなっている（図 2）。前節で紹介した太郎丸は 575 世帯が暮らしており、それに比べると比較的小規模な地域である。

春日町の世帯数

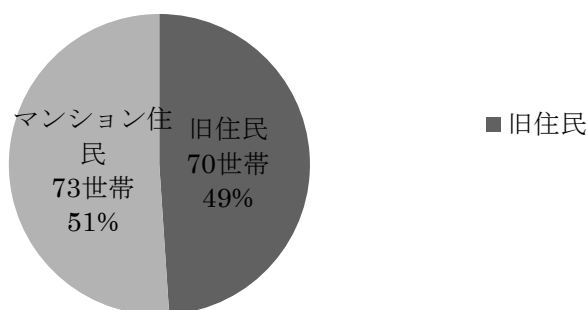
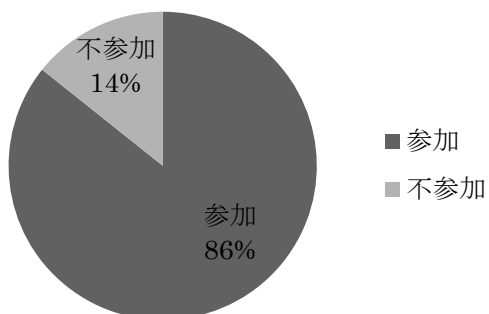


図 2. 春日町の世帯数

次に、春日町の世帯のうち、夜高制作に参加した世帯について記述する。これは、参加人数、参加回数、参加内容を問わず、少しでも夜高制作に参加した世帯を数えたものである。図 3 にグラフとして掲載したが、旧住民は全体の 86%、マンション住民は全体の 22% が夜高祭の制作に参加している。

旧住民



マンション住民

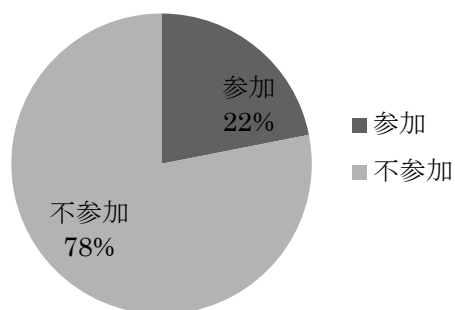


図 3.旧住民世帯、マンション住民世帯の夜高制作参加率

これを見ると、旧住民の九割近くが夜高制作に参加しており、彼らの中で夜高祭への参加が習慣化していることがうかがえる。一方で、マンション住民の参加は全体の 4 分の 1 程度であり、数字から考えると、マンション住民の参加率は少ないように思える。

だが、春日町の 30 代の男性に聞いたところ、「現状として、20 人ほどの青年会の中心メンバーのうち、3 分の 1 はマンションの住民」だという語りが得られた。つまり、春日町では、夜高祭の準備に頻繁に参加し、運営や管理の中枢を担う中心メンバーである「コアメンバー」の多くの割合を、マンション住民が占めているのである。

この節では、春日町のなかで、どのような要因が働き、マンションが建築されてからの 11 年間で、4 分 1 のマンション住民が夜高制作に携わるようになり、マンション住民がコアメンバーの多くの割合を占めるようになったのか、そして、その結果として春日町のコミュニティがどのように変化したのかということを考察したい。

2. 春日町の祭組織

まず、春日町の夜高祭に関する主要組織について述べる。春日町には、小中学生の所属する鹿の子クラブ、満 42 歳までが所属する青年会、満 60 歳以上が所属する春和会の 3 つの組織がある。(表 1) また、夜高祭に関連して、青年会のなかの選抜メンバーで構成される春日町夜高保存会という組織もある。以前は婦人会も存在していたが、4 年ほど前に無くなったそうである。

表 1.春日町の主要組織

鹿の子クラブ	小中学生
青年会	満 42 歳までの男性
春日町夜高保存会	(青年会の選抜メンバー)
春和会	満 60 歳以上

夜高祭は青年会が中心となって作業を行う。春日町では、慣例として、その年の青年会長が夜高の裁許を兼任する。裁許は、年齢や前年の裁許の意見などを踏まえた上で、ふさわしい人が選出される。

また、夜高祭では、裁許の他に、2 人の副裁許と町内会長が夜高制作の責任者を務める。

3. 夜高制作の様子

ここでは制作の流れに沿って、春日町の夜高制作の特徴に焦点を当てて紹介していきたい。

3-1. ダシ、ツリモンの骨組みを作る

今年は、ダシを作り直し、ツリモンは去年の物に手直しを加えて、再利用した。

ダシ、ツリモンの骨組みの材料は、各町内で異なるが、春日町では、竹と番線（主に結束のために使われるやわらかい鉄線）を使用する。番線同士が接する部分は溶接して繋げる。また、骨組みに使う竹に関してもこだわりがある。乾燥させた場合は、曲線を表現する際に、火であぶるなど熱を加えて竹を曲げる必要があるが、生の竹は熱を通さなくてもよくしなるという理由から、春日町では生の竹を採用している。

3-2 下書き、蠟引き、紙貼り

春日町では五箇山和紙を使用する。春日町の夜高には、複雑な絵の部分と、紋様の部分があり、絵の部分は技術を持つ人が担当するが、紋様の部分は、用意された型をなぞって下書きをする（写真 1）。そのため、文様の部分の下書きは、作業するのが比較的容易である。この紋様の型は、それまでの夜高のデザインに使用された何通りものパターンの組み合わせを変更したり、アレンジを加えたりして、新たにデザインされたものである。下書きの後の蠟引きを行うことで、色塗りをする際に、色が滲まないように工夫をしている。

次に、下書きをした紙を骨組みに貼りつけていく。（写真 2）曲線部分など、先に下書きをしておくのが難しい部分の場合は、白いままの紙を骨組みに貼りつけ、その後で下書きを書き、蠟引きをする場合もある。



写真 1. 型を使用した下書き



写真 2. ダシの紙貼りの様子

3-3.色塗り

蠟引きの後に色塗りを行っていく。現在、夜高制作には、主に 34 色の色が用いられる。以前は赤色がデザインの主体であり、色の種類も少なかったが、春日町の人間の提案によって、赤色以外の多様な色が使われるようになり、砺波夜高全体で多様な色彩を使用するようになったそうである。

まず、配合された液状の絵具を、色ごとにわけたプラスチックの容器の中に入れ、作業を行う人は、そこから必要な分だけを小さなコップに取り、筆で色を塗っていく。色が混ざって変化しないように、コップや筆には何色に使うものなのかが明記されており、厳密に使い分けられている。こういった工夫をすることで、複数の人が何日にも渡る作業を円滑に行えるようになっている。

《春日町で使用される色》

濃い赤、薄赤、水赤、濃いピンク、薄ピンク

濃い青、中青、薄青、水青、白（色を塗らない）

濃い紫、中紫、薄紫、水紫、黒（墨汁）

青緑、薄緑、水青緑、茶色、金色（顔彩）、銀色（顔彩）

また、上記の色を混ぜ合わせて以下の色が作られる

緑、黄緑、薄黄緑、黄色、大判色、オレンジ色、あずき色、

青紫、赤紫、藤色、ローズ色、薄ローズ色、染め紺

この色塗りの段階では、男性に加え、多くの女性と子どもが参加する。私が作業に参加したときは、それぞれ世間話をしながら作業を行っており、作業場は非常に和気あいあいとした雰囲気だった。

3-4.台締め、縄締め、組み立て

祭本番の 2 週間前までに、保存してある丸太を出して、夜高の台部分を組み立てる。

例年、夜高祭の 2 週間前の日曜日に縄締めを行う。今年は 25 人ほどの男性が作業に参加した。まず、台締めの工程で、台に巻いておいた太い番線を、バールを使って締め、丸太同士がバラバラにならないように固定する。さらに、締めた番線の上から縄を巻いて締めるが、その際に「ステップル」と呼ばれる U 字型の釘を打ち付ける。

さらに、この縄締めの過程で、夜高の「ケツ」側に、重りの役目を果たす金属の塊を溶接して付ける。春日町は、突き合わせの際に、夜高の頭を上げ、相手の夜高の上に覆いかぶさるような戦い方をするので、この様に、重りをつけることで、夜高を安定させるそうである。最後に、重りを溶接した部分に上からごさをかぶせ、

縄締め作業は完了である。

夜高祭の 1 週間前に、色塗りを終えた行燈部分をクレーン車を使って持ち上げ、縄締めを終えた台の上に装着する。ここまで説明してきた工程を全て終え、春日町の夜高行燈は完成する。

3-5.制作の雰囲気

13 の町のなかでは、春日町は比較的女性の参加が多く、また参加者の年代も幅広いと思われる。春日町の制作現場では、通常、多くの女性や子どもが参加しており、それぞれ世間話や冗談を楽しんでいる。また、子どもたちは、自分の両親や同年代だけの友達だけでなく、他の大人とも気軽に言葉を交わし、夜高制作に参加する誰もがコミュニケーションをとりあえる雰囲気をかもし出している。

13 町のなかで女性の参加が少ない町では、夜高制作の過程で、婦人会に入っている人が作業を手伝う日が何日間か決まっており、女性はその日のみ作業に参加するという。春日町には婦人会がないため、女性が作業に参加する日が指定されているということもなく、女性は自分の手が空いている日に作業に参加している。つまり、女性の夜高制作への参加は、それぞれの自主性にまかされていると言える。

参加が各自の自主性に委ねられているということは、参加の義務を感じにくく、女性があまり参加しなくなることに繋がるとも考えられる。しかし、春日町では、夜高制作の現場がただの作業場ではなく、地域に住む他の住民とのコミュニケーションの場になっており、参加日が決められていないということは、自分が参加したいと思ったときに、コミュニケーションの輪の中にいつでも気軽に参加できるというという方向に作用しているのだろう。

4. 今年の制作の特徴

砺波夜高と福野夜高の大きな違いとして、福野夜高は滅多にデザインを変更せず、またあまり大幅な変更もしないのに、砺波夜高は毎年デザインを変えて夜高を制作するという点が挙げられる。

春日町もその例に洩れず、今年度は「ダシ」のデザインを変更し、完全に新しいものを制作した。一方で、「ツリモン」は昨年之物にマイナーチェンジを加え、再利用した。ダシやツリモン部分を一から作る際には、多くの労力が必要となり、スケジュールや資金面でも、町の負担が大きくなる。そのため、春日町に限らず、各町では、前年までのダシやツリモンを保存しておき、それを作り変えて、次の年に使うことが多い。

さらにデザイン面では、今年から「ぼかし」と呼ばれるグラデーションを用いた塗り方をする部分を少なくし、単色のべた塗りの部分を多くするという変更がなさ

れた。

さらに、フリーハンドで描かれる絵の部分を少なくし、前述したような、型を使用して描かれる文様を、デザインの主体とした。これは春日町の夜高のデザインとしては、新しい取り組みである。

なぜこういった変更がなされたのか、今年度の裁許になった 30 代の男性に話を伺ったところ、「賞をとれるようなきれいなものを作るなら、ぼかしや絵を入れて細かい物を作ればいいけど...（中略）個人的には、来てくれた女の人とか、子どもとか、技術が無い人でも、みんなが作れるような方向に進めていきたい」という語りが聞けた。

写真 3 は太郎丸の夜高を撮影したものである。人物の絵が描かれ、桜の花や髪の部分に、ぼかしが用いられている。ぼかしや、絵を描くには、熟練した技術が必要



であり、それは夜高制作に参加したからといって、すぐに身につくものではない。今年度の春日町では、そういった専門技術が必要となる複雑な部分を省き、デザインの簡略化を試みた。それは、地域に住む人々が、経験の有無に関わらず、夜高政策に携われるようにという意図から行われたということが、裁許の語りからも分かる。

写真 3.ぼかしや複雑な絵を取り入れたデザイン（太郎丸）

5. 春日町独自の取り組み

ここまで、春日町の夜高制作に見られる特徴について詳しく述べてきた。本章の冒頭で説明したように、砺波夜高祭は福野夜高祭に比べ、各町が自由に個性を伸ばすことのできる気風を持っている。春日町でのみ導入されている「踊り子」も、砺波夜高祭に参加する町が、積極的に独自の取り組みを行っているということをうかがわせる。

5-1. 踊り子の導入

2005 年から、町内の男性の提案をきっかけとして、春日町の祭り演出のひとつとして、踊り子が新たに導入された（写真 4）踊り子となるのは、小学校 3 年生から 5 年生までの、10 人ほどの女子である。踊り子は、鳴子を両手に持ち、夜高の曳きま



写真 4. 踊り子の子どもたち

わしの際や、コンクールの審査の際に踊りを踊る。また、踊り子の衣装として、彼女たちは黄色と黒を基調としたはっぴを羽織り、赤い手ぬぐいを頭に巻いている。このはっぴと手ぬぐいは、踊り子の導入を提案した男性が管理しており、毎年子どもたちに貸し出される。

5-2.なぜ踊り子が導入されたのか？

砺波夜高祭に参加する各町は、夜高のデザインやコンクールでの演出に工夫を凝らす。だが、夜高自体ではない面での独創性は、突合せはもちろんのこと、コンクールにおいても直接的な評価につながるわけではない。それでも、踊り子が導入され、近年絶えることなく続いてきたのはなぜなのか。踊り子の導入を提案した60代の男性にこの疑問を投げかけたところ、「やっぱり人より先駆けて新しいものを取り入れていかないと。まったく同じことをやっていても、見る人もやる人も楽しくない。守らなくてはならない伝統は、伝統として置いておいて、時代に合わせて（新しいものを）取り入れていかなくては」という返答を得た。つまり、夜高祭に積極的に変化を取り入れていこうとする姿勢が、踊り子の導入のきっかけとなったということが分かる。男性はさらに、「新しいものを取り入れていけば、自分のやりたいことをできない人も出てこない。そういうことを言える雰囲気も大事だと思う」と続けており、春日町のなかで、新しい要素を柔軟に取り込もうとする雰囲気を作ることで、祭りに関わるそれぞれの住民が、自分のアイデアを気軽に発言できるように心がけていることが感じられる。

さらに、町内の方に聞き取り調査を行ったところ、今年度の夜高の制作や当日の曳きまわしには、43人の子どもが参加しており、そのうちほぼ半数がマンションに暮らす子どもだということが分かった。つまり、マンションが建築され、人口が増え、夜高に参加できる子どもの数が増加したことで、子どもたちが夜高祭のなかでひとつの役割を担えるようにする余裕が生まれたのだということが考えられる。

6. 夜高祭本番の様子

今年の砺波夜高祭りは、6月10日（金）11日（土）に行われた。私は、春日町の夜高につながり、祭本番の雰囲気や祭り参加の様子を調査した。2日間の主なスケジュールは以下の通りである。

1日目

- 17:00 春日町公民館に人が集まり始める
- 18:00 公民館を出発し、町内を曳きまわす
- 18:30 頃 砺波市警察署に立ち寄る
- 21:00～ 砺波駅前市街地にて、各町の夜高集合
- 22:00 大行燈の審査

2日目

- 17:00 前日と同様、公民館に集合する
- 18:30 公民館を出発し、町内を曳きまわす
- 16:50 頃 砺波市警察署
- 17:20 頃 神社に立ち寄る
- 20:40～ 砺波駅前市街地にて、各町の突き合わせが開始
- 23:30～ 「手締め」（後ほど詳しく述べる）

6-1. 1日目の様子

当日の17:00頃から、夜高が収納されている春日町公民館に、人が集まり始める。出発の直前には、夜高を曳く男性や、縄につながる子どもと保護者、太鼓を叩く子ども、踊り子、そして見物にきた近所の住民が多く集まり、賑わいを見せていた。

出発式

出発式に訪れた人々には、景気付けに、かまぼこと、イカの白糸煮が振舞われる。

出発式では、裁許と副裁許が夜高の上に乗り、台の四隅にお神酒と塩を撒く。その後、集まった人々に対して、裁許が出発の挨拶をし、町内の曳き回しに出発する。



写真 5. かまぼことイカの白糸煮

町内曳き回し

引き回しの際には、太鼓を積んだ台車が一番前を進んでいく。さらに、小学校 3 年生から 5 年生までの子どもが、その太鼓を叩きながら台車についていく。台車には太鼓だけでなく、スピーカーも積んであり、曳き回しの間は夜高節の音源が流れている。

その後ろから、踊り子たちが、夜高節と太鼓に合わせて踊りながらついてくる。少し離れて、男性陣が夜高を押していくが、夜高から前方へ伸びる綱には、子どもたちとその保護者（主に母親）がつながっている。

踊り子と綱の先頭の間に、裁許と副裁許が立ち、夜高を誘導しながら進む。副裁許は二人いるが、もう一人の副裁許は、列の最後尾で、進行方向を指示する。また、夜高の上には、マイク係の男性が乗り、「ヨイヤサー」と掛け声をかけ、男性陣を叱咤すると同時に、裁許・副裁許と連携して、夜高がスムーズに動けるように上から指示を出す。

町内を曳きまわす際、近隣の家の前に住民が出てきて、夜高を見物している姿を多くみかけた。赤ん坊に話しかけながら夜高を見物している母親や、家の前に椅子を出して座りながら懐かしそうな顔をしている年配の方の姿からも、春日町に暮らす住民にとって夜高が非常に親しみ深い存在であることが伝わってきた。



写真 6. 綱を曳く人々



写真 7. 太鼓を叩く子どもと踊り子

砺波警察署でのパフォーマンス

町内曳き回しの途中、春日町内にある砺波警察署に立ち寄る。警察官の方々や、見物にきた住民の前で、踊り子の踊りや、夜高を前後に大きく揺さぶるなどのパフォーマンスを行う。

町内曳き回しを終えた各町の夜高は、それぞれコンクールの行われる砺波駅前市街地を目指して動き始める。



写真 8. 砺波警察署前でのパフォーマンス

行燈コンクール

21:00 頃、駅前市街地の北陸銀行前の道路に、14 町の夜高が勢ぞろいする。夜高は事前に決められた順番に、一列に並ぶ。春日町は、北陸銀行から見て東側の、列の最も端に位置する。(図 4)

神島	新町	新富町	三島町	南町	深江	桜木町	木舟町	広上町	鍋島	東町	太郎丸	新栄町	春日町
----	----	-----	-----	----	----	-----	-----	-----	----	----	-----	-----	-----

→

←

図 4.行燈コンクールでの夜高の並び方

18 人の審査員は、2 組に分かれ、一方の列の端から、反対側の列の端に向かって進みながら、審査を行う。その間、各町は、審査員や見物客に対して、夜高を揺さぶる、曳き手が夜高節を歌うなどのパフォーマンスを行う。

全ての審査を終えた後、午後 11 時半頃から、行燈コンクールの審査発表があるが、春日町の夜高は発表を待たず、公民館に戻ることになった。

「コツン」

砺波夜高祭では、2 日目に突き合わせを行う。しかし、1 日目の行燈コンクールの終わりに、町同士が話し合った上で、非公式に軽い突き合わせを行う場合がある。この非公式の突き合わせは、現地の人に「コツン」と呼ばれている。

春日町では、駅前市街地から夜高を引き上げる際に、南町と話し合い、コツンを行うことになった。

本来の突き合わせでは助走をつけて一気に夜高同士をぶつけあうところだが、コ

ツンでは、ほとんど助走をつけず、ただ夜高同士を組み合わせ、押し合いをする。両者は台の上に乗ったマイク係の「ヨイヤサー、ヨイヤサー」という掛け声にあわせて、夜高を押す。本番ほどではないが、巨大な夜高が押し合う姿は迫力を感じさせる。時折、マイク係が「春日町、煽るぞ！」「声合わせていくぞ！」など曳き手に声をかける場面が見られた。

裁許が吹く笛の音を合図に、コツンは終了する。互いにお礼を交わした後に、春日町の夜高は公民館への帰路についた。

6-2.2 日目の様子

春日町は、1日目の行燈コンクールで、砺波市議会議長所を受賞した。行燈コンクールで賞をとった町の夜高には、賞の名前が書かれた長い紙が貼られる。

2日目は、前日と同じ流れで、出発式と町内曳き回しを行ったあと、20:45頃に砺波駅前市街地に集まり、突き合わせを行う。

町内曳き回しでは、前日と同様に、砺波警察署に立ち寄った後に、神社に向かい、突き合わせ前の祈願を行った。

突き合わせ前には、「東」に属する他の町との連携をとったり、突き合わせのために夜高に手を加えたり、春日町の人々が慌ただしく動いている。

夜高の車輪を外す

突き合わせの際、春日町の夜高は、頭を上げ、相手の夜高の上に乗上げる戦い方をする。こうした戦い方は「煽る」と呼ばれる。煽る戦い方は、相手に力負けした場合、下から一気に押され、夜高が後ろに下がってしまう。そのため、煽る戦い方をする町は、夜高が簡単に後ろに下がってしまわないように、突き合わせの前に車輪を外しておくことが多い。春日町でも突き合わせの前に、夜高のケツ側にある車輪を外した。

一方で、下から押し上げる戦い方をする町は、突き合わせの前に、曳き回しの際につけている普通の車輪を外し、「ケンカ車輪」と呼ばれる突き合わせ用の車輪に付け替えるそうである。

「東五町」の連携

春日町は、新町、木舟町、東町、桜木町と共に「東五町」に属している。東五町に属する町の多くは、対戦町に対して人数が少なく、参加者の年齢層もやや高めな傾向にあり、突き合わせの際には苦戦を強いられる。そのため、例年、東五町では、自分の町から人員を派遣し、互いに協力し合って、突き合わせに参加している。

助っ人を出し合うにあたり、ある程度の決まりごともある。まず、他の町に助っ人に行く場合は、自分の町の名前が入っているはっぴは脱ぐか、裏返しにして

着なくてはならない。

以前は助っ人に出す人数には特に決まりはなかったが、現在は 4、5 人程度に定められている。

突き合わせ

午後 8 時 45 分から、第一銀行前と北陸銀行前の二箇所、突き合わせが開始される。各町は 2 回ずつ突き合わせをする。

例年、春日町の対戦町は南町と太郎丸であり、2 回とも北陸銀行前で突き合わせが行われる。

砺波駅前市街地は大勢の見物客と、夜高関係者でごった返していた。昨夜よりもさらに見物客の数は増えており、突き合わせの行われている周辺には、客が溢れださないように、歩道と車道の間にロープが張られている。さらに、常任理事会や各町の夜高関係者、警察官が事故が起きないように周辺を警備している。

対戦する夜高は、数十メートルの距離を開けて向かい合う。両方の町の裁許と副裁許が、真ん中まで走って行き、突合せに関する打ち合わせとして、少し言葉を交わす。

打ち合わせが終わったところで、開始の合図である笛が鳴らされ、曳き手が一気に夜高を押して走ってくる。ガツン、という重量感のある音と共に、二台の夜高が組み合い、そのまま押し合いに移行する。再び笛が鳴らされると、夜高同士を離し、後ろに下がる。通常、1 回の対戦で、これを 2 回繰り返す。だが、今年の太郎丸対春日町の突合せでは、春日町の裁許の提案により、1 回の対戦のなかで、このやりとりを 4 回行った。これは今までにはないことであり、突き合わせの高揚によって得ることができた貴重な機会だったと言える。



写真 9.南町対春日町の突合せの様子



写真 10.太郎丸対春日町の突合せの様子

「手締め」

全ての突合せを終えた後、14基の夜高は、「東」「西」「南北」の陣営に分かれて、「手締め」を行うことで、夜高祭を無事に終えることができたことを祝う。町によっては、手締めに「シャンシャン」と呼ぶこともある。春日町は、東五町の手締めに参加した。

東五町では、五つの町の裁許の代表として「当番裁許」というものが定められているが、手締めでは今年の当番裁許から来年の当番裁許への引継ぎが行われる。さらに、各町の裁許と来年の裁許が、全員で円になって、引継ぎの意も込め、一人一曲ずつ、夜高節を歌う。

最後に、円になった裁許と副裁許、それを囲む各町の関係者や夜高の曳き手が、一緒に手拍子を打ち、夜高祭りの幕は下ろされた。

7.春日町住民の語り

ここまで、春日町における夜高祭の大まかな流れについて述べてきた。次からは、私が行った調査の過程で、春日町の住民から得られた語りを紹介しながら、春日町の住民が夜高を通してどのような思いを抱いているのかを考える。

7-1.夜高祭に参加するようになったきっかけ

先に述べたように、マンションが建設されてから、春日町の夜高に関わる場面に、マンション住民が参加するようになった。そういったマンション住民は、幼いころから夜高祭を身近に感じてきた古くからの住民と違い、入居した時点では夜高祭にあまり馴染みが無かったという人が多い。こういったきっかけを受けて、本来馴染みのなかった夜高祭に参加しようと思ったのか、マンション住民に聞き取り調査を行った。「夜高には、子どもが参加したがつたことをきっかけに参加した」と語るのは、頻繁に作業場に訪れていた30代の女性である。また、夜高制作から突き合わせまで、一貫して夜高祭に参加していた30代の男性は「子どもが夜高につながりたいと言ったので、子どもが参加するからには、(自分も)制作に出なくては……」と思って参加したのがきっかけ」と語る。

これらの語りから、マンション住民が夜高祭に関わるようになったきっかけとして、自分の子どもを夜高につながらせてやるために、自分も夜高制作に携わったり、曳き手として夜高祭に参加したりするようになったという経緯が多いことがうかがえる。

一方で、昔から春日町に暮らしている住民であっても、昔は突き合わせにしか参加せず、年齢を重ねてから、制作に参加するようになったという人もいる。サラリーマン時代には制作には全く関わらず、突き合わせにだけ参加していたという50代

の男性に話を聞いたところ、「(年を重ねてから) 祭に参加するからには、突き合わせだけではなく、前から途中、最後まで、全部したいと思うようになって、(制作に) 参加するようになった」という話を聞いた。

これらの語りから、話を聞かせてくれた住民は、マンション住民や古くからの住民といった違いはありながらも、何かしらのきっかけを受け、夜高祭に関わるようになり、そこから深く夜高祭に参加になったということがわかる。

7-2.春日町住民が夜高祭りに感じる魅力

毎年夜高祭に参加したり、頻繁に制作現場を訪れる住民は、春日町の夜高祭にどのような魅力を感じて、継続的な参加をするのだろうか。マンションに暮らす 30 代の女性は「夜高の良い所は、参加すれば、町内の人に顔を覚えてもらえるところ。マンションの新しい住民でも、受け入れてもらえる。夜高制作に対しては、あまり苦労は感じない」と話す。また、マンション以外の住民では、60 代の男性の「夜高をやらなかつたら知り合えなかつたはずの人とも、知り合える」という語りや、40 代の男性の「(夜高制作は) やっぱり楽しい。色んな人と話せるし。夜高作りがなかつたら、この人(自分より年配の男性を指して) と話すこともなかつたと思う。新しいマンションに引っ越してきた人も、他の地域に引っ越していった人とも一緒に作ることができるのがいい」という語りが得られた。

これらの語りから、春日町の夜高に参加する人々は、夜高祭に関する作業を通して、同じ地域に暮らす他の住民とコミュニケーションを取り、関係を築くことができるという点に、夜高祭の魅力を感じているということがうかがえる。

前述したように、実際の制作の現場でも、性別や年代、職業の異なる住民同士が、作業を通して気さくに声をかけあっており、夜高制作の場での交流が住民たちのやりがいになっているような印象を受けた。

7-3.マンション住民と春日町夜高の関わり

語りの紹介のなかで、マンション住民が夜高に対して感じる思いについても述べてきたが、ここではマンション住民が春日町の夜高祭において、どのような役割を担っているかについて考えたい。昔から春日町の夜高につながってきたという 30 代の男性に、春日町の夜高とマンション住民の関わりについて尋ねたところ、「マンションができる前と、できた後の違いとしては、やっぱり若い人が中心となって夜高を作るようになった。現状として、20 人ほどいる青年会の中心メンバーのうち、3 分の 1 くらいはマンションの住民で、子どもに至っては半分がマンションの住民だから、実際のところ、マンション住民がいないと、春日町の夜高は成り立たない」という回答が得られた。この語りから、現状として、春日町の夜高を継続させるためには、マンション住民の参加が不可欠になっているということが分かる。だが、

マンション住民の参加が、春日町の夜高にとって重要な要素とみなされており、マンション住民側も、夜高祭に参加することに、地域住民との交流という価値を見出している一方で、マンション住民に対して、春日町は必ずしも開かれているわけではないという語りもある。ある 30 代の男性は、当初、春日町に馴染むのに時間がかかったという自分の経験を通して「マンション住民が町内と馴染むためのきっかけが必要だと思う」と話す。祭りのような、住民同士が密接に関わって共同作業を行う場では、同様の問題が生じやすいと思われるが、春日町でも、以前から交流してきた住民同士で、関係ができあがっており、新しい住民が入りにくく感じることや、夜高作りに敷居の高さを感じてしまい、遠慮してしまう場合があるようだ。だが、男性は「そういうのは、個人の意識の問題だから、春日町全体の問題だとは思わないけど」と続けており、マンション住民が新しいコミュニティに馴染むためには、彼らが積極的に旧住民と接しようとする姿勢を持つことや、旧住民側がマンション住民の馴染みやすい雰囲気を作ることなど、住民それぞれの個人的な働きかけが必要だと考えられる。

8.まとめと考察

前述したように、1999 年にマンションが建築されたことにより、春日町の人口は大幅に増加した。このことで、専門的な技術を用いて行ってきた春日町の夜高制作に、大きな変化がもたらされた。春日町では、マンション住民や彼らの子どもたちが、夜高制作の現場に加わることを受け入れた。その結果として、子どもたちが夜高祭に直接的に参加できるように、踊り子を導入し、さらに専門知識のない人でも制作に参加できるように、制作する夜高のデザインの簡略化が行われた。つまり、夜高制作に関する春日町の伝統が、新たな要素に適応するかのようになり、変容しているのである。

また、こうした変化や特徴は、春日町の夜高制作の場が、マンション住民や古くからの住民の区別無く、春日町に暮らす住民同士の交流の場として成り立っていることから、生まれたと言える。住民は制作現場で、性別や世代、マンション住まいかどうかに関わらず、他の住民とコミュニケーションを交わし、親密な関係を築くことに、夜高祭のやりがいを見出している。彼らにとって夜高祭は、単なる行事以上の、生活に深く根付いたものである。

一方で、前章で報告した太郎丸の参加者たちは、夜高を作ること、見せることに加えて、他の町と競うことに祭りの楽しさを見出しており、こういった点でも各町の個性が見出せる。それに比べると春日町は、それほど他の町に対する競争心は見られず、どちらかというと夜高制作を通して町民同士が関わり合うことを重視しているような印象を受けた。

さらに、祭りを通して構築された人間関係は、日常生活においても継続されてい

る。調査を通し、町内での祭り以外のイベントでも、夜高制作の場で見られたような、マンション住民と旧住民が交流する光景を目にすることができた。

これらの調査結果から考えると、春日町では、夜高祭がきっかけとなり、昔から春日町に住んでいる住民のみで構成されていたコミュニティが、マンション住民を受け入れ、マンション住民と古くからの住民の合わさった、春日町の新たなコミュニティとして再構築しつつあるということがうかがえる。

もちろん、春日町のすべての住民が、こうした交流の枠に取りこまれているわけではなく、マンション住民には夜高祭に参加せず、近所付き合いもまったくしないという人もいる。だが、マンション住民が夜高制作のコアメンバーになっているという事実は、春日町に新しく編入してきた住民を受け入れる装置があるということを示していると言える。結局のところ、住民が新たなコミュニティに参加するには、「参加してみよう」という個人の意識を伴った何かしらのきっかけが必要となると考えられる。

今後、マンション住民の居住年数が増えるにつれ、新たに自分の子どもや、今現在夜高制作に参加している人を通して、夜高制作に参加するマンション住民が増えるということが考えられる。だが、一方で、現在夜高祭に参加している子どもたちが成長し、地域を離れた際に、後継者不足や製作者の高齢化といった、新たな問題が浮上してくる可能性もある。そうした問題に対応し、時代の変化に合わせながら春日町のコミュニティを維持するためには、春日町に暮らす住民ひとりひとりが、問題に対して積極的に取り組む姿勢を持つことが必要不可欠となってくるだろう。

9. 謝辞

行燈制作に参加させていただいた裁許の渡辺様をはじめ、春日町の皆様。突然の訪問にも関わらず、貴重なお話を聞かせてくださった、出町夜高関係者の皆様。夜高祭りに参加するきっかけを作ってくくださった夜行会の亀岡様。皆様のご協力によって、今回報告書を完成させることができました。

たくさんの皆様のおかげで調査をおこなうことができたことだけでなく、夜高祭に参加するという得難い体験を得ることができました。

ほんとうに、ありがとうございました。

第4章 祭礼の魅力と存続—砺波夜高祭木舟町の例を中心に—

萱岡 雅光

1. はじめに

1-1. テーマ

現在、古くからあったものが急激に姿を消している。しかし、時代の変化にも関わらず存続し続けている伝統も確かにある。それどころか、中にはむしろ活性化したものや、見事に復活した伝統もある。現代において、伝統的な祭りは、なぜ、また、どのようにして存続していくのだろうか。「祭りはなぜ続くのか」。これがこの報告のテーマである。

1-2. 調査地選定の理由

木舟町の夜高祭は現在、参加している人間の半分以上が新住民、すなわち木舟町の出身ではない者と、外部からの参加者である。木舟町がユニークなのは、人数不足のためしばらく途絶えていたこの町の夜高祭が、数年前に特に意欲的な数名の旧住民（以下コアメンバーと呼ぶ。後述する「第1期」を支えた人達）の手によって復活したということである。復活当初は参加人数も少なく、大変な苦労があったが、参加人数は徐所に増え、マンションからの参加者（以下新住民と呼ぶ）や外部参加者現れ始めたというわけである。

従来の祭りのイメージといえば、同じ町の間が祭りへの参加を通して、「町内」の紐帯意識を強化する、というものである。それに対して木舟町の夜高祭は、「町内」に縛られることのない、外部にも開かれた現代の祭りであり、「新しい民俗」であるといえるであろう。変わりゆく社会の中で形を変えて生き残ってゆく祭りの姿と、それを支える、祭りに対する強いなんらかの思い、祭りが持つ、人々を魅了する何かが、ここに見出されるのではないかと考え、伝統文化存続と伝承の仕組みという、テーマを追求するのには、木舟町が最も適していると判断した。

1-3. 報告について

この報告では、まず木舟町における夜高祭りの概要を紹介し、その中で夜高祭りの楽しみとは何かを抽出する。その次に、その夜高の楽しさが次の世代にどのように伝達されているかを、子どもと夜高の関係を論じる中で示す。その上で、木舟町の「担い手を集める」システムと、参加者を惹きつける夜高祭の「魅力」を明らかにして、「祭りはどうして続くのか」を考察する。

2. 調査地概要

2-1. 人口

木舟町の人口は、平成 22 年度 9 月の時点では、男 81 名、女 95 名、計 176 名、世帯数は 77 世帯である。平成 18 年度は、人口 108、世帯数が 30 前後だったのが、平成 19 年には人口 163、64 世帯となり、世帯数に関してはほぼ倍に跳ね上がっている。それ以降も世帯数は増え続けている。これは、平成 19 年に木舟町にマンションができ、外部から多くの新しい世帯が入居してきたことによる。しかし、先に報告があった町と比べると、春日町が 143 世帯、太郎丸が 1544 世帯であるので、非常に小規模な町であるということが分かる。

2-2. 地形および経済

木舟町は、砺波駅の北側に、徒歩五分ほどのすぐそばに位置している。元からあった世帯数は 30 前後と少なかったが、面積も非常に小さい町で、大きな公民館を作るスペースもないので、木舟公園で足場を組んで夜高の製作を行う。小さい町ではあるが、飲食店や美容院、商店などが多くある。

3. 夜高祭を運営する組織

夜高を取り仕切るのは、木舟町の木和会という組織である。木和会は、元は木舟町青年部といい、1955 年に誕生した。木舟町では、夜高だけではなく、納涼祭などの町内イベントのほとんどを、この木和会が運営する。機能としては、一般的にいわれる青年会のそれではあるが、年齢制限は明確にはない。1998 年に、若者不足の問題から、後継者が育つまで年齢制限をなくそうということで、「青年部」を「木和会」と改名した。「木舟の和の会」という意味と、「気が若い（年齢関係なく誰でも入れる）」という意味がかけてあるという。また、商工会主催の「となみ伝承やぐら大祭」では、木和会で「よたカレー」を作り、売り出している。木舟町では、木和会の会長が、夜高の製作会長になるという慣わしがある。そして、次の年に、もしそれまでにその人が一度でも副裁許を経験したことがあれば、裁許を担う。また、会計係は、これら全ての役職担った経験がない者しか担当することが許されない。これは、製作全体を見渡し、予算案に無理がないかどうかを判断する技能が求められるからである。

4. 木舟町の夜高の歴史

木舟町の夜高は、過去に何度か断絶し、復活している。1953年、東京から帰省した後の青年部の中心人物となる人が、東町で一年間夜高の制作に携わった。その翌年に、「自分の町でも、夜高を出したい」という強い思いから、町内の経験者に教えてもらいながら、大きな苦労の上に、断絶していた木舟町の夜高を復活させたという。夜高祭が復活した翌年には青年部が誕生し、夜高祭の運営は組織化されていった。以来、大行燈を出さない年もあったものの、青年部を「木和会」にするなどして人員を確保し、続けていった。しかし、人員の不足により、1995年より6年間途絶えていたが、2001年に復活した。本報告では、1954年から、1995年までの期間を「第1期」、復活してから10年目となる2010年現在までの期間を、「第2期」と呼ぶことにする。

5. 夜高の構造

5-1. 行燈

第1期の初年のダシは、福野の小倉町のものを借りてきたものであった。木舟町は過去には人型のダシを出すことが比較的多かったようで、ダシを弁慶のデザインにした1988年には、2つの賞を取っている。今年は、ダシのデザインを新しくした。竜に、大きな舟が加わった。ツリモンは、竜と、小判、小槌などの縁起物であった。



写真 1. 完成直前のダシ

5-2. ダイ

木舟町のダイは、1982年に新調されている。新調されたダイは、以前のダイに比べ一回り大きく、高さが160センチ以上あり、突き合わせの際には、上から煽る戦

法をとる。ネリボウの長さは約 8 メートルで、(シンギを中央として) 前が 4.5、後ろが 3.5 メートルである。ヨコノギの長さは 250 センチ程度、直径は約 20 センチ。ネリボウの直径はヨコノギより少し太く、25 センチであった。材質はケヤキで、油が塗ってある。過去には、ズリの部分に楔金具（おそらくガッチャのこと）が取り付けられたこともあったようだ。木舟町のダイが四輪になったのも、この新調に伴ってのことであるという。また、木舟町の車輪は、他の町に比べると小さいとされている。

6. 祭の経過

6-1. 一日目

町内の曳きまわし

木和会の男性達が夕方に集まり、町内を曳きまわす。集合時間前にはたくさんの人が公園に集まっている。縄巻きの時にだけきた、かつて第 1 期を支えた人たちも、今年の夜高はどうなったか気になるようで、夜高を見上げながら談笑している。子どもはハッピーを着て、太鼓をたたいている。皆、気分が高揚しているようである。曳き子たちは、髪を立てたり、茶髪に染めたり、非日常的な装いをしようとする傾向があるようである。大きな掛け声共に、曳き回しがスタート。デンガクの中からマイクを持った人（マイク係）が音頭をとり、「頭を右に、ヨイヤサ！」などと声をかけ、方向などを指示する。裁許と副裁許はダイから離れて進行を指揮する。制作では一度も見なかった人も、繋がっていた。児童会の子どもたちも加わる。



写真.2 曳きまわしの様子

まずは、参加者一同が木舟神社前でお神酒をまわし飲みして、祓いを受ける。夜高の後ろには、太鼓台が続き、太鼓台には、飲み物や、児童会の子どもの母親たちが握ったおにぎりなどが入っており、曳き子が休憩中に飲み食いする。太鼓は各休憩場所や曳きまわし中に子どもだけでなく、大人も太鼓をたたく。町内を曳きまわしながら出町神明宮に参拝する。道脇には見物人が多くいる。町中の曳きまわしを見物しているのは観光客よりも、町内の人間の方（旧住民）が多いようである。途中でマンション前も通るが、マンションからも多くの人（新住民）が窓から顔を出して見物している。所定の場所で子どもたちが練習した夜高節を披露する。休憩では、楔（突き合わせに使うものではない）を車輪に挟む。ドアストッパーのようなもので、車輪を固定する。出発時には外す。これは、太鼓台の中に入っている。休憩中は、各々酒を飲んだり、食べ物をつまんだり、他町内の人と話たりしている。他の町内の人間（特に裁許、副裁許）と気軽に喋ることを快く思わない町もあるが、木舟町はそういう感じではなさそうであった。夕方から夜にかけて陽が落ちてくると行燈に明りが灯り、夜闇に美しく浮かび上がる。



写真.3 明かりが灯った夜高

コンクール

本町通りに、全町の夜高が集合する。大行燈が一行に並ぶ様は壮観である。ここからコンクール終了までは、ある程度自由な時間になる。他の町の夜高を見て回ったり、他の町の知り合いと話をしたりする者がいる。観光客は大通り沿いに多くいる。木舟町は、夜高節を歌ったりするなどして、盛り上がっていた。若者はダイの上に登る。筆者もダイの上にらせてもらい、大変楽しませてもらった。隣の町と威勢勝負するなどもある。ただし、相手の夜高や町を中傷するようなことはなく、互いを尊重しあっている。例えば、前の町、又はすれ違う町がA町とするなら、「A町の夜高ヨイヤサ！」というように音頭をとる。コンクールが始まると、パフォーマンス

をする町がある。しかし木舟町は今年はおとなしくしよう、という方針であったため、特に何もすることはなかった。

コンクールが終わると、各町に戻る。その際に、軽くダイぶつけあう、交差点で激しく大行燈を回転させる、などのパフォーマンスを行う町もある。パフォーマンス、というよりは、自分たちで祭を楽しんでいるというべきなのかもしれない。観客からは歓声があがる。公園に戻ると、製作所 A の中で飲み食いをする。豚汁などの料理を、女性が準備していて、振舞う。夜遅くまで宴は続く。

6-2. 二日目

突き合わせ前

夜高は昼の内に、喧嘩ロープなどをつけておき、突合せ仕様になる。突合せのため、所定の位置へ向かう。一日目と同じように途中まで子どもが繋がる。木舟神社前では、お神酒は飲まず、ダイの上に塩をまく。神明宮には参拝しない。初日よりも繋がっている人が多いように思える。木舟町は 2 回とも富山第一銀行前にて突き合わせを行う。所定待機場所に着くと、集合時間が知らされ、解散となる。その間は、他の突き合わせをみるなり、助っ人として参加（ただし、東陣営側以外の町にいく時は法被を脱いでいく）したりする。解散前に、もう一度突き合わせの際の位置確認をする。

突合せ

自分の町の突合せの時間が近づくと、ダイの前輪をはずす。前輪を止めていた番線を切り、後輪だけにする。スタートの位置について、スタートの笛が鳴るまで、盛り上げる。人数の関係上。突き合せ時には、たくさんの助っ人が来る。突き合せスタート前には、たくさんの人が一体となり、興奮状態となる。突き合せ開始の笛がなると、勇ましい掛け声とともに、走りだし、大きな音を立てて夜高がぶつかり、観客からは声があがる。縄と人同士が交錯し、揉み合う。初心者には、縄に挟まれて危なくなったら、すぐに逃げろ（縄を離せ）と指導があった。一度離しても、またチャンスを見て繋がることのできる。タイミングが見つからなくても、胴縄に繋がればよい。助っ人の人で初めての人は胴縄に繋がる人が多いらしい。最初の突き合わせは太郎丸で、2 戦目は新富町であったが、皆、笛が鳴るまで我を忘れ、日常を忘れ、大きな興奮に包まれていた。

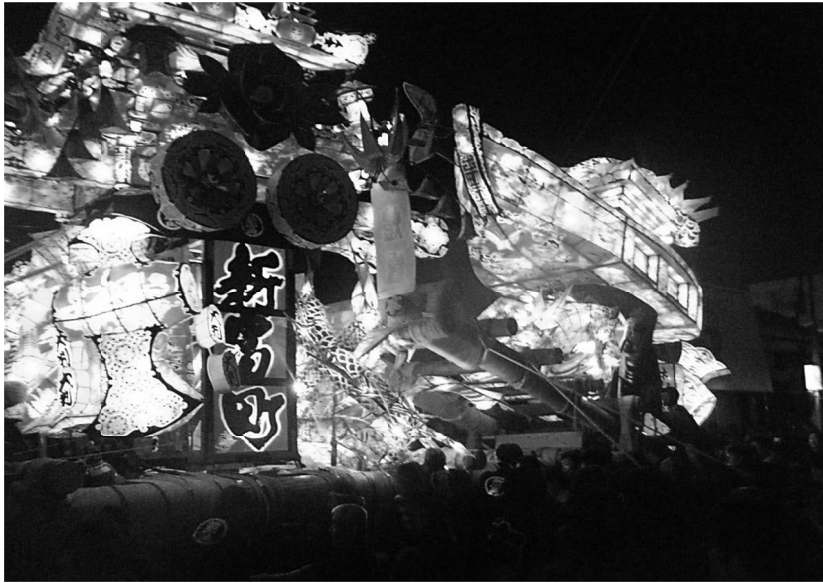


写真.4 突き合わせの様子

トりの新富町对新町の突き合わせは、各陣営からたくさん的人がつながり、総力戦となる。二戦の突き合わせで突き合せに慣れてきた筆者も、調査を忘れて、繋がりについて。それほどまで、突き合わせは興奮を巻き起こすものである。

突き合わせの後

全ての突合せが終わったら、東 5 町が集まり、手締め、シャンシャンが行われる。これはいわゆる、閉会式のようなものである。各町の裁許、副裁許が前に出て、酒を回しのみし、夜高節を歌う。各町でも回しのみが行われる。シャンシャンが終わ



写真.5 打ち上げの様子

ると、公園に帰り、宴会が行われる。ビールかけなども行う。公園には、祭りを見たのか、観光客も少数訪れているようだった。最後の宴会は、非常に盛り上がる。宴会でもシャンシャンと同じような酒の回しのみと歌の回しが行われる。空が白むまで宴は続き、夜明けとともに人が帰ってゆく。しばらく仮眠をとり、風呂に入るなどして休んでから、すぐに解体作業に入る。

6-3. 解体

木舟町の場合は、解体は三日目の朝に行われる。これは、助っ人に先に飲んで楽しんでもらって、辛い解体作業は自町内の人間だけで行おうという配慮による。

7. 製作、準備の様子

7-1. 制作場所

概要でも述べたが、夜高の制作は木舟公園で行われる。制作所は三つある。そのうちの二つは足場を組んで、東町と同じようなプレハブの制作所の A と制作所 B、もうひとつは、個人宅のガレージを制作所にした制作所 C である。制作の中心となるのは制作所 A であり、ここではダシが作られる。制作所 B ではツリモンが制作され、制作所 C では、下絵描きや蠟引きなどがコアメンバーによって行われる。台締めが終わった台は、ブルーシートをかけられて公園におかれる。組み立てた後は、夜高は制作所 B に収納される。

7-2. 制作所の雰囲気

制作は、大体午後 7 時から 8 時あたりに人が集まってくる。製作の追い込み期に入ると、昼間から来ている人もいるという。大抵の人は、制作所に来て、まずは冷蔵庫に向かい、飲み物を手に取る。大人は酒、未成年はジュースの缶を手に、雑談をしながら作業を進める。製作所にはラジオが常に流れている。初心者にもダメ出ししたりすることはない、和やかな雰囲気であった。

7-3. 色塗り

色塗りも、誰でも気軽に参加することができる。色を指定した紙があり、それを参考に色を選んで色をつける。色は番号で管理されており、色指定をするのは、主にコアメンバーである。色は、染料などを使う。いくつかの基本の色を混ぜ合わせてたくさんの色を作っており、その調合法は町同士で秘密にしている所もあるということである。この作業にはある程度の繊細さが必要になり、女性の参加も多く見られる。その中には、高岡から来ている 20 代の若い女性が二人おり、作業していた（写真 6）。



写真.6 色塗りの様子（右）と、色作り（左）

7-4. 紙貼り

紙貼りは、比較的簡単な作業なので、新住民や外部参加者、女性など、夜高経験の浅い人でも気軽に参加することができるようである。多少失敗してしまうことがあっても、他の人が貼りなおしたりすることはなく緊張した雰囲気ではない。酒やジュースなどを飲み、喋ったりしながら作業を進める。

7-5. 蠟引き

蠟引きは非常に繊細さが必要になる。新住民は参加しないこともないが、製作所Cのコアメンバー（写真7左）や、ある程度熟練した人が作業する傾向にあるようである。女性で、蠟引きが非常にうまい人がいて、周りから一目置かれていた。（写真7右）



写真.7 蠟引き

7-6. ダイ締め・縄巻き

ダイ締め・縄巻には、男手が必要になるので、普段は製作に参加していない木和会のメンバーや、引退した中高年の人も参加する。休みの日に、午前中から作業する。昼食はみんなで取る。子どもも手伝いにくる。



写真.8 昼食の様子と子ども

縄巻では、宮大工の人が、台に突き合わせ用の補強を施すなどしていた。ヨコノギとネリボウの固定部、つまりバンセンを隠すのが、ドウマキ、ネリボウの見える部分を縄で締めるのがケショウ（化粧）と呼ばれる。その他作業の細かい工程は他の町とさほど変わらないと思われるので、ここでは割愛する。

8. 「作る」ということ

夜高祭の特異性は、「作ること」である。行燈部を、毎年自分たちの手で作りあげる、という事において、他の祭にはない、夜高だけの特徴があると思われる。それでは、「作る」ことに関して関係者はどのように考えているのであろうか。

ある10代の男性は、夜高の制作について、「作ることそのものが、純粹に楽しい。皆で、一つのものを作りあげていくのは一体感がある。他の祭にはないと思う。次の年はどんなものを作ろうか、と考えたり、話あったりするのも楽しい」と語った。他のコアメンバーの一人は「制作はだやい（面倒くさい）」と言った後で、「でもそのだやいのを頑張るといのが大切なんだよ」と話してくれた。木舟町には、春日町とは違い婦人会はないものの、制作には多くの女性が参加する。40代の女性は「本番は参加できないけど、制作には力になれるので、なるべく参加したい」と話してくれた。女性の中には、高岡市から制作を手伝いに来ている20代の女性2人の姿もあった。彼女たちに制作はどうかと聞いたところ「制作は楽しい。普段なかなかできる体験じゃないから」とのことであった。

前節でもみたように、制作の各過程には様々な種類の人間が関わる。先ほどみた語りから、女性や、コアメンバー以外の制作経験が浅い人間でも、何かしらの制作には関わることができ、また彼らもそれを楽しんでいるということが分かる。夜高の制作過程には様々なパートがあり、求められる技能もバラバラであるので、たくさんの種類の人間が制作に積極的に参加することが可能になるのである。また、夜高を毎年新しく作りなおすということに、非常に大きな意味があるようである。新しいものを作ることによって、様々な工夫が生まれ、マンネリ化することがなく、新鮮さが出る。新規参加者でも、コアメンバーでも、同じように楽しむことができる。制作者、観客両方のリピーターを増やす効果ももっているのではないかと思われる。

9. 夜高とコミュニティ、人のつながり

ここまでみてきたように、夜高祭は、製作期間が長く、多くの人に関わる。そのため、前節でもまとめたように、性別を越えた、複世代間による集まりが形成される。制作者の間でも、コミュニティ、または人とのつながりを意識した語りが多く見られた。

9-1. 住民同士のつながり

まず、制作に関わる人々に夜高の魅力について尋ねてみた。すると、多くの人々が、コミュニティや人の繋がりに関する答が返ってきた。例えば60代のあるコアメンバーは、夜高祭の魅力を一言で、「集まることだ」と言い切った。どういうことかと尋ねると、その男性は続けて「普段顔を合わせないような人、或いは祭りを通じて出会ったばかりの人ともワーワーと、馬鹿なことを言って飲めるのはすごくいいことだよ。君（筆者）に会えたように、（夜高）祭りがなかったら、一生会えなかった人も沢山いるよね。そういうことだよ」と説明してくれた。他に夜高祭の「集まる」ことに関する語りは「世代間コミュニケーションができる」、「夜高を通じて、他の町の人間にも知り合いができるし、夜高によって、色んな人の輪が繋がって町内の仲がよくなる」、等沢山あった。その中でも、新住民と旧住民の関係を表す語りもあった。例えば、ある新住民の女性は「この町に来て町のことが全然わからなかったけど、夜高を通じて地域に溶け込むことができた」と嬉しそうに語った。一方で旧住民の女性も「どこ家の嫁さんか分からない人も、分かるようになる。嫁に来た人、新しく来た人も、人の名前、雰囲気を知ることができ、仲良くなれる」と語った。また、小さな子どもを持つ新住民のある母親は「夜高を通じて、親同士も交流できる。子育ての悩みとかを相談できるし、児童会以外にもこういう場があると町にも溶け込みやすくてありがたい」と話した。

9-2. 「助っ人」との繋がり

木舟町は突き合わせ当日は、人数が少ないため、外部から「助っ人」を呼ぶ。昔から木舟に助っ人にきている人や、今年初めて夜高に繋がる、という人もいる。その人々にも夜高祭に参加したことの感想を聞いてみた。ある 30 代の男性は、「○○さん（コアメンバー）と同じ会社で、誘われて数年参加している。本当にいい祭だと思う。突き合わせも楽しかったけど、こうやって初めて会った人たちと酒を酌み交わすのも楽しい」と語った他の町にも繋がったことのある助っ人に他の町と木舟町の違いを訪ねたところ、「木舟は、なんと言ってもオープンな所がいい。繋がるなら、この町が一番！」と答えてくれた。また、今年初めて助っ人として参加した 20 代男性は「前から突き合わせを見ていて、やってみたいとは思っていた。今回、友達に誘われて参加してみたら、思っていた以上に面白かった。新しい人間繋がりができた。こういうのは社会でもどこかで生きてくるからね。知り合いに祭り好きがいるから、来年はそいつも誘って一緒に来るよ」

9-3. 「参加しやすい雰囲気」とは

木舟町は「参加しやすい雰囲気」とあるという語りを多く聞いた。具体的には、どういうことなのだろうか。新潟から仕事の関係で数年前にマンションに引っ越してきて今年で夜高参加三年目になる新住民の男性は、「こっちに来てから夜高を知った。初めて見た時は、綺麗で、夜遅くまでよくやるなー、と思って見ていたけど、突き合わせは面白そうだと思っていた。で、誘われて参加してみたら、今ではすごくはまった」と語った。「入りやすかったか」という質問に対しては「入りにくい、ということは全くなかった。みな、最初からノリがよかったし、よくしてもらえた。よそ者なんて雰囲気は全くなかったし、何より、いろんな種類の人がいるから、入りやすい」とした上で、「夜高、木和会を通じて、町内の人と仲良くなれた」と語った。

9-4. 小括

以上でみたように、夜高祭を通じて、世代、性別、地域がバラバラの、通常は出会えない種類の人同士が出会い、人のつながりが生まれているということがいえる。地方の祭りでは、その土地の生まれの人間のみしか参加できないという祭りも多い。女人禁制で、婿に來た人間でも「よそ者」として参加させてもらえない、という祭りもある。砺波夜高の町内でも、広上、新富町は女性の参加を許していない。その中で、性別関係なく、高校生などの若者も多く参加し、新住民を受け入れ、かつ外部参加者まで受け入れている木舟町は、非常に外に対して開放的であるということが出来る。様々な世代、性別の人間が参加していることにより、新規に参加しようとする人間も安心して参加することができ、良い循環が生まれている。

10. 夜高祭の楽しみ

ここまでの報告で、夜高祭に参加する楽しさがどういうものかが浮かび上がってくる。

10-1.参加者の楽しみ

春日町や太郎丸のように、木舟町の夜高祭りも、性、世代、を越えて誰でも制作に主体者として参加することができる。さらに木舟町の場合は地域を越えて外に対して開かれている。各々が制作に携わることで夜高制作を皆が楽しむことができ、制作と祭りを通じて様々なコミュニケーションが生まれる。また多くの参加者は夜高に対して非日常的魅力を感じているようである。これらから見えてくる夜高の楽しさと魅力とは、世代、性別、空間を越えたコミュニケーションができること、作業そのものの面白さ、その表現性、非日常性である。

ここまでは、基本的に、祭りを「スル」側の楽しみについて考えてきた。ここで、一度「ミル」側の楽しさについても考えてみたい。夜高の制作に関係することなく、夜高祭りを見に来た人間に話を聞いた。あるアメリカ人の女性は「面白い。アメリカにはこんな祭りはない」といい、ある2人組の富山市のサラリーマンは「夜高は毎年見に来る。綺麗で、見ていて面白い。いい酒の肴になる。特に突き合わせが面白い。迫力がある」と語った。ある女性は「わくわくする。お祭りはやはりいつもとは違う気分になるわ」と楽しげに語った。ミル側は、夜高祭に非日常性、珍しさ、迫力、行灯の美しさに、楽しさを見出しているということが求めていることが分かる。

これまでの報告でもふれられてきたが、夜高祭は、見せる（魅せる）要素の強い祭りである。暗黙のうちにであれ、自分たちの夜高が見られているという意識が、時には他の町との競争心を生み、祭りに活気を与え、スル側のモチベーションの継続の一因になっていると思われる。そしてその盛り上がり、またミル側も楽しむのである。

11. 子どもと夜高

ところで、木舟町で調査をしている中で「なぜ夜高を続けているのか」という質問をしたところ、「子ども」を意識した語りが多く返ってきた。ここまでの報告では、現在の参加者にとっての夜高祭の楽しさ、ついてまとめてきた。では、次世代の参加者になるであろう子どもは、夜高祭りのことをどう思い、どのような楽しみを見出しているのだろうか。

11-1. 児童会による歌、太鼓の練習

木舟町には児童会が存在するが、婦人会はない。また、木舟町には小行燈もないので、何かできることはないかと、子どもたちが夜高節と太鼓を、出発前と休憩場所で披露する。しかし、審査対象になるわけでもなく、あくまで自主的にやりたいから、やっているということであった。今年は 2 回目の縄巻の日に、児童会で夜高節と太鼓の練習を木舟公園で行っていた。子どもたちは、自分の好きな絵を和紙に描いて、当日出る太鼓台に貼る。年長の子どもが、下級生の手本となり、太鼓を教える。子どもたちは最初は太鼓に興味になさそうであったが、叩いてみるごとにだんだん楽しくなってきたのか、嬉しそうにバチを振っていた。主に本番では力強くたたける中高生男子がたたくことが多いらしい。筆者も練習させていただいたが、確かに、結構な重労働であった。とはいえ、男の子も女の子も、母親も、皆楽しそうに練習をしていた。夜高節は歌いやすく分かりやすい唄をいくつか選んで、その中からさらに選んだものを歌う。途中で同じ公園内で縄巻の作業をしている大人たちもやってきて一緒に歌ったり、太鼓のたたき方の見本を見せたりしていた。



写真.9 児童会の子どもたち

11-2. 子どもに関する、大人の語り

ある男性の新住民は、「子どもに見せるためにやっている。子どもがやりたがるから、一緒についてきて制作にかかわり始める人も多いよ。僕もそうだったんだけど」と語った。また、コアメンバーは自分が子どもの頃の夜高の経験を話す人が多かった。例えば、「自分は、子どもの頃に夜高の（ダイの）上に乗せてもらって、本当に楽しかった。その経験があったからこそ、今こうして夜高をやっている」といった語りや、「自分が子どもの頃に、夜高祭が本当に楽しかった。なので自分の子どもたちにも楽しんでもらいたい。それに、夜高が（木舟町で）出せない年があって、その年は寂しい思いをした。なので子ども達も、自分の町に夜高がないのは寂しいと感じるだろう。だから、そのためにも夜高祭を続けたい」という語りがあった。そして男性に多かった語りが、「自分の子どもに、夜高に繋がる自分（父親）の姿をみせてやりたい」という語りであった。

11-3. 大行灯を出さなかった年

上述したように木舟町は 1978 年、役員に許可が出ず、また 1986 年は木舟神社新築のため、大行灯を出さなかった。その際、1978 年は、「子どもだけでも」と、親達が費用を工面して小行灯を作成した。子ども達は喜んだが、木舟町の大行灯が突き合わせに参加できなかったことを祭の翌日に学校で他の町の子どもの馬鹿にされて、悔しい思いをした。こういう話を聞いた親たちが、非常に残念に思ったのだという。また 1986 年は、「子どもが寂しがるのは」と、津沢の上町の中行灯を借りてきて、子どもに曳かせた。

11-4. 自分の子どもに関する児童会の親の語り

では、子どもが夜高祭に参加することを、親達はどのように思っているのだろうか。

児童会の母親に、「自分の子どもが夜高祭に関わることをどう思うか」と聞いたところ、ある人は「子どもは、社会に出るまでに、限られた大人としか関わらない。でも、夜高の制作に参加すれば、幅広い世代のいろんな価値観を持った人に関わることができる。子どもには、大人の人との交流をしてもらって、社会勉強をしてほしい」と語った。「昔から続いてきたことだから、子どもには受け継いでいってほしい」と話す母親もいた。

11-5. 大人の取り組み



出町幼稚園では、子どもたちが夜高を曳きまわす行事がある。今年は、6 月 8 日に行われた。この行事は、1980 年に始まったもので、砺波の伝統文化を知ってもらおうとする教育目的がある。高さは 3.5 メートルで、骨組みは代々受け継がれているもの。絵は、子どもが好きなものを書く。今年は 81 人の園児が参加した。

写真.10 子ども夜高

また、幼稚園では、段ボールを使った「夜高ごっこ」が行われる。段ボールを夜高に見立てて、突き合わせのようなことをするという。授業参観の時にするが、今年は別のレクリエーションが行われていた。幼稚園にお邪魔したが、園児の中には、

商工会で出している夜高 T シャツを着ている子もあり、「ヨイヤサー、ヨヤサー」と元気に声を出して跳ねまわっていた。教室には、ひらがなで書かれた夜高節が貼りだされている。またレゴブロックで夜高を作って遊ぶ子どももいるという。

園長先生に、「子ども夜高、夜高遊びをやる意義」について質問したところ、「夜高祭には、裁許、副裁許といった、沢山の役割があります。それらを、子ども達は、ごっこ遊びの中で各役割を真似ることによって、社会性を学ぶことができます。それが狙いです。それに、伝統文化に触れることで、地域に愛着をもつことができるし、愛着が持てれば地域貢献にも繋がります。親御さんの評判もいいですし、これからも続けていきたいと思います」と話してくれた。

11-6. 子ども（木舟町児童会）の語り

以上のように、大人達は子どもに対して様々な思いを持って夜高祭に参加したり、子どもを参加させたりしているが、子ども達本人は夜高祭をどう思っているのだろうか。

「夜高祭のことをどう思う？」という質問に対し、児童会、および出町幼稚園の子ども達は、「夜高はカッコいい。僕も早くやりたい（繋がりたい）。作るのも楽しそう」、「〇〇町に（突き合わせで？）勝つんだ」、「夜高祭の日が楽しみ。早くこないかな」、「夜高を持っている（繋がっているという意味であろう）お父さんはカッコいい！」などと語った。幼稚園で話を聞いた子は、「夜高祭は楽しい。早く大きな夜高（大行灯のことだろう）をやりたい（繋がりたい）。スティッチ（アニメのキャラクターの夜高）を作りたい」と嬉しそうに話してくれた。また、夜高の話をすると、とても嬉しそうにはしゃぎながら、以前自分がレゴブロックで作った夜高の話しをしてくれる子もいた。また、新住民の、小さい頃に夜高を知らなかった子どもは、「初めて見た時、カッコいいと思った。迫力。乗ってみたい。竜がお気に入り。」と語った。この子は今では夜高祭が大好きなんですよ、とその子の母親が横から話してくれた。

11-7. 小括

以上で見たように、木舟町の（ただし幼稚園は木舟だけではない）現住民は、非常に子どもを意識し、大事にしているということが分かる。子どものために、夜高を作るという考えが多く、子ども達に夜高祭りの楽しさを教える取り組みもしている。子ども達も、大人と同じように、夜高遊びや、夜高を観客として見る中で、夜高祭の、非日常性や創造性といった楽しさを感じているように思える。

また、コアメンバーのほとんどが、自分が子どもの頃に夜高のダイの上に乗せてもらうなどして楽しませてもらった思い出があり、それを原動力に、「自分の町でも

夜高を」と木舟の夜高を復活させた、という点が重要なポイントであるように思える。ここに祭が続いていく一つの型を見ることができるからである。

12. まとめと考察

12-1. 祭が続いていくということ

祭が存続していくには、人（参加者と後継者）が不可欠である。祭に限らずどんな物事でもそうであろうが、多人数で何かを実現させるにはエネルギーが必要である。時間と労力をかけてもいいと思えるほどの何かが必要になる。特に夜高祭は、準備期間も長く、作業も多い。「正直だやい（めんどくさい）」という語りも多くある一方で、「夜高は楽しい」という語りもある。そして事実夜高祭は続いている。それは、夜高祭の楽しさが、夜高祭の「だやさ」を上回っているからであろう。それでは木舟の夜高祭はどのような求心力を備えているのだろうか。

また、求心力によって集まった人を受け入れるシステムも必要である。次章で表紙口が報告する新町のように、求心力はあっても、来た人を受け入れる体制がなければ、存続は難しくなる。では木舟町における人材確保の仕組みとはどのようなものなのだろうか。ここからは、この 2 点について、これまでのデータを見ながら考えていく。

12-2. 木舟町における、人材確保の仕組み

コミュニティ、参加者の分類

まずは、木舟町の夜高に参加する「人」は、次の 4 つのカテゴリーに分類することができる。すなわち、(1) 旧住民、(2) 旧住民の中でも特に夜高祭における高い技術をもち、他人に祭りを教えることができる「コアメンバー」、(3) マンションに引っ越してきた新住民、(4) 助っ人や、高岡の女性などの外部参加者である。以下では、この区分をもとに、木舟町夜高祭の人材確保のシステムについて考えていく。

人材の確保、受け入れる体制

舟町のあるコアメンバーは、「祭りの人材は、人財。人が基本で、大切」とであるという。祭りの担い手を絶やさないためには、どのようなことが必要なのかについて、掘り下げてみたい。担い手を数世代にわたって絶やさないためには、「新規人員の獲得」、「メンバーの参加の継続」、この 2 つが必要になる。これらについて、木舟町はどのような方法、体制を取っているのだろうか。これまで見てきた記述をまとめながら、見てみよう。

「新規人員の獲得」については、まずは子どもを、引き入れるという方法が考えられる。8 節で紹介した、10 代の参加者がこれにあたる。また、人が人を誘い、人員を獲得していく方法もある。助っ人や、旧住民に誘われて参加するようになった新住民がこれにあたる。そしてさらに、夜高祭は、「見せる」要素が強いということをも 10 節で述べたが、この要素により、夜高祭に魅力を感じ、参加する外部参加者もいる。高岡から作りにくる女性などがこれにあたる。

「メンバーの参加の継続」を実現させるための木舟町の対策としては、経験のあるものが上手くリードして新規メンバーを楽しませる工夫が、第一に挙げられる。つまり制作を誰でも参加できるようにすることで、制作を楽しんでもらい、また、それにより責任を分かち合うことで一体感、仲間意識が生まれ、コミュニケーションが盛り上がる。「参加しやすい雰囲気」を皆で生み出すことによって、新規参加者が疎外感を感じさせることもなくす。一方、制作に参加しない助っ人に対しては、6 節で述べたような、楽しんでもらう配慮をするのである。

以上の方法、体制によって、木舟町は、旧住民の数が非常に少ないにも関わらず、担い手を絶やすことなく祭りを続けているのである。また、新町の実情を見てみるとよく分かるが、これらの受け入れ体制に加え、3 つの制作所があり、人員のキャパシティが大きいことも重要なポイントであろう。

コアメンバーがいなくなる仕組み

木舟町における、担い手確保の方法を見たが、実は新しい人を呼び込んで受け入れるだけでは祭りは続かない。人々の中にどんなに祭りをやりたいという願望があり、新しい担い手が増えても、新しい担い手に仕事を教え、祭りを運営するノウハウをもつ人間（コアメンバー）がいなくては、祭りはたちゆかない。つまり、祭りが続くには、担い手の確保に加えコアメンバーを絶やさないシステムが必要になる。木舟町のそれを考えてみたい。

潜在的なコアメンバーとして想定できるのは、旧住民である。どの住民も、経験をさらに積むことにより、コアメンバーになることができる。また、新住民も時間の経過と共に、旧住民と同化していく、あるいは両者の区分が曖昧になっていくであろう。春日町の報告をふまえると、新住民が祭りにおいてコアメンバーとしての役割を獲得することも、可能であるように思える。また、子どもに夜高祭を楽しませようという大人達の思いと試み(第 11 章)が、子ども達を夜高祭に慣れ親しませ、楽しみを見出した子ども達が、祭りに参加するようになり、将来的に彼らがコアメンバーに成長してゆくという可能性も、大いにあり得ると考えられる。

12-3. 総括—なぜ木舟町の夜高祭は続くのか—

最後に、木舟町の事例から、砺波の夜高祭はなぜ、どのようにして続いていくのかについて、「求心力」と「柔軟性」に着目してまとめる。

夜高祭の求心力

まずは、砺波夜高祭がもつ「求心力」についてである。夜高祭は、皆で夜高行灯を作る祭りである。様々な工程があり、どんな人も制作に参加でき、楽しめる。そしてそれは毎年行われ、新鮮味と創造性があるため、飽きない。「次はこういうのを作りたい」というように、モチベーションが再生成され続ける。夜高を見る側も、作り直されることにより、また見に来る。そして見に来る人、他の町を意識することで、一段と夜高は盛り上がり、非日常性が増し、見る側、する側双方が楽しむことができ、満たされる。そんな祭り自体の面白さの他に、様々な人と人との出会いや親密化を求め、担い手が集まってくる。これらの夜高の楽しさ、求心力は、以下のよう分類することができる。

- ①地縁的繋がり「強化」・・・現住民同士の繋がりが強化され、再確認される
- ②人とのつながりが「生まれる」・・・旧住民と新住民、あるいは外部参加者や他の町の人間との関係が新しく生まれる
- ③作業自体の面白さ・・・夜高行燈の制作作業は、参加者にとって純粋に面白い
- ④表現性と創造性・・・夜高行燈を毎年作り直すことで、「次は何を作ろう」、「他の町は今年はどうかな」といった楽しみが生じる
- ⑤見るものを喜ばせること、見られること・・・町の人間や観客、そしてとくに「子ども」を喜ばせる
- ⑥非日常性・・・酒宴の雰囲気、および、競争を前提とした突き合わせが盛り上がりを生む

このなかで、①と②は一見似てはいるが、根本的に異なっている。というのも、現在の木舟町における夜高を通じた人間関係の「生成」には、地縁的つながりに限定されていないからである。すなわち、②は伝統的な農村の、外部には開かれていない祭りにも当てはまるのに対し、①は木舟の夜高が外部の人々にも開かれていることを指している。そんな集まる楽しみの他にも作業そのもの、突き合わせそのものの楽しみ（③）もある。そして行燈は毎年作り直され、新鮮味と創造性（④）があるため、飽きない。「次はこういうのを作りたい」というようにモチベーションが再生成され続ける。夜高を見る側も、作り直されることにより、また見に来る。そして見に来る人、他の町を意識することで、一段と夜高は盛り上がり（⑤）、その中で非日常的時間と空間が生まれ（⑥）、見る側、する側双方が楽しめる。そして、

「来年も参加したい」、「来年も観にきたい」あるいは「来年からは参加してみたい」という思いを各人が持つことになるのである。

夜高祭の柔軟性

もう一つは、砺波夜高祭が備えている「柔軟性」である。これまでも何度か触れてきたように、砺波の夜高祭は見られることをある程度前提としている。また外部参加者にも開かれているという点において、都市的、イベント的な側面をもっているといえる。ここで、ひとつの町内（もしくは集落内）で完結した、伝統的な祭りを理念モデルとして考えると、砺波の夜高祭は伝統的な祭りとしての性質とイベント的な性質が、ほどよく混じり合っているということがわかる。これは、夜高祭りが時代の変化、人々価値観の変化合わせてしたたかに変化してきている、ということである。その中で子どもは楽しませてもらうことにより、次の世代に続けていこうという気持ちを持つことになる。仮にこれから担い手が不足し、断絶せざるを得なくなったとしても、子どもたちが後に復活させてコアメンバーとなり、再び人が増えて、祭りが再生して続いていくという可能性が残されている。

このように、祭り自体にある程度の「柔軟性」があることで、参加者を引きつけられるだけの「求心力」が保たれている。これが、砺波の夜高における伝承を基礎づけているのではないだろうか。

13. おわりに

13-1. 今後の課題

この報告を通じて、「伝承」について考えてきた。今後の課題としては、夜高祭りの伝播について考えてみたい。夜高祭りは、福野、砺波、津沢、庄川の大きな夜高の他にも、各農村で行灯を制作し、引き回し、突き合わせのようなことをしているものが沢山ある。また、トッペ行灯を手にとって家を回るものも数えると、その数はかなりの数に上る。砺波平においてこれほどまでに多くの夜高があるにも関わらず、実はどのくらいの数が、どのように分布しているかを整理した研究はない。さらに、夜高祭りのような行灯の祭りは実は全国的に見ても珍しく、能登のキリコ、夜高祭、東北のねぶた系の祭りしか存在しない。これらをもう一度、整理しなおすと共に、今回行ったような伝承システムについても考え併せることによって、平面的（伝播・分布）な行灯祭り像を、立体的なものとしてとらえなおすことができるのではないだろうか。

13-2.あとがきと謝辞

最後に、主観的な感想とお世話になった方々への感謝の意を書き記したい。

多くの祭りが姿を消している。その中で、見事に時代に合わせて変化している祭り、復活を遂げている祭りもある。三郎丸の夜高祭りは、復活してさらに規模を拡大した例である。木舟町の調査の折、ひよんなことから案内していただけることになりお邪魔させてもらった。三郎丸は復活しただけでなく、今年から大行灯を曳きまわすようになった。それも、途絶える前よりも復活した今の方がむしろ活気に満ちているという。三郎丸は出町の夜高のように他の町と競ったり、突き合わせをしたりすることなく、あくまで純粋な村の田祭りとしての夜高である。その分、氏神と向き合う姿勢が強く、私には新鮮だった。祭りはどうやったら続くと思いますか」の問いに対して、口を揃えて「いや、続きます」と言い切った参加者の顔が印象に残った。また、今回の報告には書けなかったが、出町子ども歌舞伎曳山も見学させて頂いた。子ども達は嫌々ではなく、本当に楽しそうに練習をしていたし、ずっとやってみたいと思っていた、という。彼らを見守る大人達のまなざしも温かい。自分が昔演じていた頃を思い出している人もいた。

こういった人々の姿を見ていると、「民俗の危機」なんて言葉が嘘のように思えてくる。祭りというものは、ただ観るだけではなく、準備まで関わって始めて理解できるものである。どんな祭りにも、それを実行する人達の様々な思いと苦労がある。今回いくつかの祭りの準備に関わらせて頂いて、その中で時代を越えて引き継がれていく「心意」（あるコアメンバーはそれを魂と呼んでいた）というものが確かにどこかに存在していると思えた。

人々の脳裏に行灯の美しい光が残っている限り、夜高は何度でも復活するであろう。そしてまた再び多くの人々の脳裏に行灯の光を焼き付け、次の世代に続いていくのである。人々が「非日常性」、「人と繋がることの喜び」を求める限り、時代と共に形態は変わろうとも、行灯の光が絶やされることはないのではないだろうか。

今回は、木舟町の多くの人の御好意と、素晴らしい出会いによって、稚拙ながらなんとか報告を完成させることができた。その他にも、亀岡氏をはじめとする夜行会の方々、いきなりお邪魔したのにも関わらず、親切にお話を聞かせてくださったさまざまな町の方々、これらの多くの方々に対して、この場を借りて、心から感謝の意を示したい。

本当に、お世話になりました。ありがとうございました。

参考文献

木舟町 1974 『木舟』

第 5 章 新町における砺波夜高祭りの存続

表紙口 翔子

1. はじめに

この砺波夜高祭では、県や市からほぼ補助がない状況の中で「資金・制作・運営」の全てを各町内で賄っている。そこで、こういった自主運営によって成り立っている祭りでは、「資金・制作・運営」の中で、資金調達や制作者の確保の面で多くの問題が生まれているのではないかと考えた。そして問題の実態、対策に興味を持ち、新町を対象に調査を行った。新町は町自体や制作人数も小規模であるということが事前調査で分かっていたので、特徴的なデータが得られるのではないかと考え、この町を調査地を選んだ。本報告書では、新町における夜高制作や祭り本番の様子、さらに住民の語りを通し、現在新町が抱えている問題と、新町における祭りの存続について考えていきたい。

2. 新町の概要

新町は、砺波駅の北側に、徒歩 10 分ほどの場所に位置している。出町の中では、春日町、木舟町、桜木町、東町を合わせた、夜高祭区分の「東五町」に属している。夜高祭りについてのこれまでの報告の中で、人口規模も、地域面積ももともと小さい。先の報告で取り上げられた木舟町は人口 176 名、世帯数が 77 世帯であるが、新町の人口は 95 名、世帯数は 42 世帯である。

2-1. 新町における祭りの組織

新町には児童会、青年会、婦人会の組織がある。夜高祭りに際しては、祭りの裁量を全て許されている裁許、裁許に次いで取り仕切る副裁許、会計、そして町内会長という役職がある。新町は東五町に属しているため、東五町裁許会という突き合わせの際の人員協力などを要請し合う寄り合いに必然的に参加する。東五町には、その年の当番裁許という、東五町の手締めの際に取り仕切る役職がある。当番裁許は五町内を順番に回り、その年の担当の町の裁許が務める。平成 22 年は新町が当番町であった。

また、新町は出町子ども歌舞伎曳山に参加している。子ども歌舞伎には中町・東町・西町という夜高祭りとは別の区分があり、その 3 つの町の中で毎年担当町を回す。新町は曳山区分の東町に属しており、今年の担当が中町であった。また出町で

は他に、木舟町、東町が出町子ども歌舞伎曳山に参加している。

3. 新町の夜高制作

新町の人々は、60 平米に満たない面積の公民館で夜高制作の作業をしている。1 階ではダシの制作、2 階ではツリモンの部分を制作している（写真 1、2）。制作場所の規模としては大行燈を出している 14 町内で最も狭く高さも限られているため、必然的に夜高の大きさも他の町に比べて小さめになっている。

3-1. 制作に携わる人々

制作の主体は青年会を中心とした男性だが、普段から制作に出向く人数は、多い日でも 7 人程度である。女性や子どもの参加は、強制や募集に基づくのではなく、あくまでも個々人の自主性に任せられている。祭りの開催が差し迫ってくると、婦人会の方々が日替わりで日中に紙貼りなどを手伝いに来たり、裁許の母親は自主的に紙貼り・色塗りを手伝いに来たりしており、作業にも忙しさと緊張感が漂う。しかし、普段は男性を中心にお酒を飲みながらの和気藹々とした雰囲気の中で作業が行われている。制作者の中には、4 月いっぱいまで行われる出町子ども歌舞伎曳山に関わる人の割合が多いため、本格的に準備を始めるのはその後である。他町は早ければ 3 月から、遅くても 4 月には準備が始まっているが、新町は加えて制作人数も少ないため、進度は他町より遅れ気味になる。このように子ども歌舞伎をやっている町では、夜高祭までの準備・制作期間を合わせると約半年間、一家の男が行事に関わり家庭から抜けるという状況になることから、家に残された妻は「祭り未亡人」と呼ばれる。

新町では地区の外部から祭りに関与する人たちがいる。例えば、新町の人の子会社の部下などが、制作の手伝いから本番の突き合わせまで参加することがある。夜高の魅力を知った彼らは、1 度きりでなくその後もまた関わり続けるということになる。また学校の教員を通じて、中学生や高校生も制作段階から参加している。その学生たちは勧められた訳ではなく、自ら夜高祭に興味を持ち志願し、祭りの前の 1 週間程度だが手伝いに来ているのだという。もちろん、彼らの全員が当日も曳き回しや突き合わせに参加している。

3-2. 制作中の雰囲気

新町では夜高制作中は、公民館の 1 階、2 階の両方で J-POP の CD を流している。5 月末までは、制作者たちはビールを片手に賑やかな雰囲気の中会話を弾ませながら作業を行っていたが、祭り当日が近づくにつれ、制作者たちの表情や作業場の雰囲気は確実に変わっていった。夜高への愛情が多く伝わってきた 5 月中旬の頃の姿とは大きく異なり、切迫した状況の中、終始真剣な表情で作業に集中する制作者たち

の姿からは、新町の夜高制作の厳しさがうかがえた。



写真 1. ダシ制作中の様子



写真 2. ツリモン制作中の様子

3-3. 夜高完成まで

夜高完成までの流れは、次の通りである。各々の作業については、以下で説明する。

4 月中旬	骨組み作成開始
5 月上旬	山車部分紙貼り開始
23 日	東五町裁許会、芯木
30 日	台締め
6 月 6 日	縄巻き
8 日	山車ほぼ完成、組み立て
10 日	吊りもん完成
11 日	祭当日 1 日目
12 日	祭当日 2 日目

台締め

台締めは、午前 8 時より新町公民館前の広い通りで行われる（写真 3）。人数を要する作業であるので、近年では砺波市から離れて住んでいる新町出身者や OB も手伝いに来る。今年は総勢 25 名程度で作業を行った。この日は普段作業している男性陣の母親や奥さんが、ツリモンの紙貼りを手伝いに来ていた。作業は午前中でほぼ終了し、昼食は新町内の料亭が用意したお弁当を、公民館横の工房の駐車場で食べる。また台締めと並行して、組み立てた台の置き場として公民館の前にプレハブを作る。男性 5、6 人が、公民館の屋根の高さから、鉄板、鉄の棒、そしてブルーシートを使って作る。これ以降夜高はこの中で徐々に組み立てられ、保管されることに

なる。



写真 3. 台締めの様子

縄巻き

台締めの 1 週間後、縄で台を巻き締める「縄巻き」という作業を行う（写真 4）。台締め同様多くの人が手伝いに来る。隣の工房の駐車場で、昼食にラーメン、おやつにおでんを食べる。縄巻きが終わると、普段の制作メンバーでダシとツリモン制作の作業にとりかかる。また縄巻きと並行して、子どもたちのトッペ（田楽）行燈の制作が行われる。ブルーシートの中で夜高と同じ染料を並べたテーブルを置き、家でデザインを描いたトッペ行燈を持ってやってくる子どもたちを迎える。まず親が蠟引きをし、その後子ども自ら色を塗る（写真 5）。側面には名前や町を書く。このトッペ行燈は当日持ち歩くことはなく、集合写真を撮る時に並べる程度である。



写真 4. 縄巻きの様子



写真 5. トッペ行燈を作る子どもたち

組み立て

次に組み立てを行う。台に乗せたレンガクの上に、ダシをレッカーを使って乗せるのである。（写真 6）その際レンガクの上に人が乗り、組み立ての補助をする。昨年まではダシの底がくぼんでいて人が抜けられるスペースがあったが、今年はダシ

の構造上そのスペースを確保できなかったため、作業は大変な危険であった。組み



立て当日までに色塗りが全て終わらなかったため、組み立て後も高い位置でダシの色塗りが続けられた。

写真 6. 夜高を組み立てている様子

3-4. 新町の夜高

メインストリートの近くの町は、道が広く電線も少ないため比較的大きな夜高を作る。しかし先にも述べたように、新町公民館は面積も狭く天井も低いため、行燈自体が他の町と比べ小さめになる。また小さい町であるがゆえに以前から町曳き子の人数も少なく、そのため台も低い。これらのことから、新町の夜高は他の町と比べて全体的に小さい。

ダシの部分は裁許の意向で去年（平成 21 年）から一新され、舟がモチーフとなっている。舟をモデルにしたダシは以前から多くの町で作られており、平成 22 年は木舟町もダシの形が舟である。舟正面の帆にはビールのチラシのデザインを模した神



と天女が描かれており、その両脇に「天手力雄神」と書かれている。帆の裏側は細かい花の模様で、船体の側面にはぼかしを使用した花や鯉、後ろには麒麟が描かれている。夜高の前側のは多くの小判を抱えた竜、後ろには虎のツリモンがあり、これらは電気が通っており上下または左右に動くようになっている。

写真 7. 新町の夜高（ツリモンの部分が動く）

3-5. 参加者たちの夜高制作に対する思い

2 ヶ月以上に及ぶ夜高制作には、多くの労力と時間が要求される。デザインを描いている男性（30 代）の、「やっぱ人が少ないしね、仕事の休みをとってまで制作に時間を費やしとる人もおる。近場で働いとる人は昼休みに公民館来たりするからね」

という語りから、作業人数の少なさが、制作状況をさらに厳しいものにしていることが分かる。しかし、会計をしている男性（20 代）からは、「制作の期間中は絶対毎年来たくなくなる時があるわ。しんどいもん。やめようと思えばいつでもやめれるけど、それでも続いとるのはやっぱ意地やね。それに、夜高の制作やとったら、社会に出て必要なこと全部学べる。いろんな世代の人と一緒に仕事できるし、ノルマもある訳やから、そこはすごいと思うわ」という語りが聞かれた。また、今年裁許をする男性（30 代）は、「うちらはプロを雇う訳じゃなくて、自分らで全部制作しとるからね。スポンサーとか報酬もないから苦労するししんどいけど、その分当日楽しいし町内で団結力も出る。町内の人と話す機会も増えて、コミュニケーションにもなるしね」と語る。また、紙貼りの手伝いに来る女性（60 代）は、「祭りは大変ですけど、この公民館がひとつの社交場になりますしねえ。普段会う機会無いような人でも、夜高制作の時に公民館で一緒に作業したら、コミュニケーションがとれるわけですし」と話す。

これらの語りから、制作場所である公民館が町民たちにとってひとつの社交場であり、さらに社会勉強の場となっていることがわかる。また、自主制作でやり遂げるからこそ生まれる団結力や誇りがあるなど、大変な作業の中にも得られるものが多くあるようだ。楔の男性（40 代）の、「しんどいけど、制作しとる間は毎日祭りみたいなもんや。皆で 2 ヶ月間も祭に関われとるなんて幸せや。制作しとる時は早く終わってほしいと思う時もあるけど、終わったら愛想ないもん。もうしんどいのも毎年当たり前みたいになっとる」という語りからは、祭りに対する愛着がうかがえる。

4. 祭の役職と祭の進行

4-1. 1 日目（6 月 11 日）の流れ

午後 3 時頃から公民館付近には町民が少しずつ集まり始める。制作にかかわった人々はもちろんのこと、近所の老人や子ども、その親等が公民館の前の通りに集まる。当日公民館にはブルーシートが引かれ、曳き回しに参加する町民の待機場所となっていた。曳き回しをする男性はみなパッチの上にハッピを着用し、足袋を履いていた。

曳き回し

午後 6 時 15 分、ブルーシートから出した夜高を道の中央まで運び、何度か煽り夜高を斜めに固定した後、制作者と曳き子、町内の子どもたちによる写真撮影が行われる。その後曳き始めるとすぐに、副裁許が夜鷹の周りを回りながら縄に塩を巻き、台に酒をかける。

「よいやさ！」「新町夜高よいやさ！」の掛け声とともに曳き回しが始まる。夜高の台に結ばれた長いロープに子ども達が繋がり、夜高の前を歩く。最初に向かうのは中央町内にある砺波総合病院である。以前に曳き回しの途中で訪問したところ評判が良く、それ以来続いているというが、今年も病院の玄関や外のベンチから多くの患者が拍手で出迎えていた。その後同じく毎年病院訪問を続けている東町の夜高が到着し、駐車場に夜高を2基並べると、軽い突き合わせが行われた。本来東五町の町同士で突き合わせが行われることはないので、町民のためのパフォーマンスという形で軽くぶつける程度である。ドーンという音で突き合わせると、患者たちからは大きな歓声と拍手が起こった（写真8）。その後新町と東町の子どもたちによる唄の披露が行われてから、夜高は病院を後にした。その後の曳き回しのルートは東五町内を回るというもので、それが終わると東町にある出町神明宮前で夜高を前後に大きく揺らして煽る。それが終わってから、21時前にはコンクールの審査のためメインストリートで待機する。

夜高を曳き回しているその少し後ろでは、OBの男性達が台車に乗せた太鼓を曳いている。台車には「新町児童会」と書いてあるが、太鼓をたたくのは子どもではなく男性陣の経験者やOBが多い。また、台車には太鼓だけではなくお酒やゴミ袋も積んである（写真9）。



写真 8. 病院前での突き合わせの様子

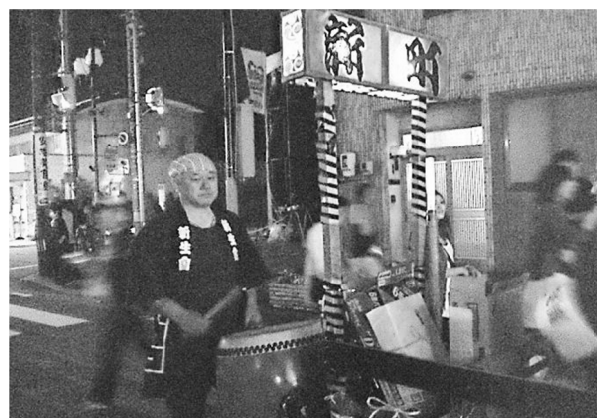


写真 9. 夜高の後ろを歩く太鼓

コンクールの後

コンクールの時に隣に並んでいた夜高が町内へ帰っていくと、新町の夜高は大通りを全速力で往復していた。この行為は客に見せるためというよりも、自分たちが楽しむために行っているように見えた。その後公民館に帰ると男性陣だけの簡単な慰労会が行われ、翌日に差し支えない程度に飲み騒いでいた。

4-2. 2 日目(6 月 12 日)の流れ

曳き回し

1 日目と同じ時間帯から人が集まり始め、公民館では突き合わせに備えておにぎりが振る舞われる。午後 6 時頃から町内での曳き回しが始まり、東五町内を曳き回した後メインストリート付近をうろつき、突き合わせまで脇道で待機する。その際、裁許や副裁許が太鼓をたたき、パフォーマンスをする。

突き合わせ

1 度目の突き合わせは午後 9 時 25 分から北陸銀行前で三島町と、2 度目の突き合わせは午後 11 時 5 分から富山第一銀行前で新富町と行われた。突き合わせ場所付近は厳戒な警備態勢が布かれており、広く張られたロープの内側は関係者以外進入禁止であった。対戦の時刻が近付くと、互いの町が数十メートルの間隔を空けて向かい合いスタンバイする。両町の裁許、副裁許が前に歩み寄り軽く挨拶を交わす。これは突き合わせ前の儀式である。その後、その対戦の審判の笛を合図とし、両町の夜高が長い助走をつけて勢いよくぶつかる。ドーンという音と共に、下から攻める町の夜高は前へ前へと相手の夜高を押し、上から攻める方の町は夜高を左右に動かし相手の夜高を揺さぶり、上下に煽ってツリモンを壊す。上から攻める新町は、比較的小振りな夜高であるにも関わらず、押されながらも上下左右に動き大奮闘していた(写真 10)。1 つの対戦につき数回の突き合わせが行われ、裁許の笛で対戦が終わると両町それぞれで健闘を称え盛り上がり、観客からは大きな拍手が送られた。

また、夜高の動きと共に飛び交う「ヨイヤサ!」という男気溢れる掛け声も非常に迫力のあるものだった。新町の夜高においては、夜高の台に乗った男性の、自分の町や対戦町へのマイクパフォーマンスも十分に突き合わせの醍醐味であると感じた。先にも述べたが東五町内では突き合わせの際の人員協力があり、特に大トリの対新富町戦では他の 4 町から多くの助っ人が駆け付け、一緒に夜高につながっていた。



写真 10. 突き合わせの様子

つながる場所が無く、掛け声だけで参戦していた助っ人も見られた。突き合わせの迫力に加え周りを埋め尽くした観客の歓声で、商店街は大きな熱気に包まれていた。

1 度目と 2 度目の突き合わせの間、曳き子は脇道で休憩し、そこでも婦人会からおにぎりが振る舞われた。

東五町の手締め

全ての突き合わせを終えた後、東五町の夜高が交差点に集まり、手締め式が行わ



れる。各町内裁許 1 人副裁許 2 人の計 15 人が中央に集まり、その年の当番裁許が取り仕切る（写真 11）。当番裁許の挨拶の後、酒を回し飲みし、当番裁許から順に一人ずつ、東五町の夜高節を歌っていく。最後に当番町（裁許）の受け渡しを行い各町がばらばらに夜高節を唄って盛り上がり、いつの間にかひとつずつ夜高が消えていく。

写真 11. 手締めの様子

慰労会

手締めの後夜高を曳いて公民館に戻るとプレハブの中にもブルーシートが引かれており、女性陣も混ざった夜高関係者全員での慰労会が始まった。まず裁許が、これまで夜高制作に尽力し協力してきた関係者へ感謝の言葉を挨拶として述べ、その後宴会となった。日が変わるころには女性や年輩の人は帰っていき、残った制作の中心メンバーは、午前四時頃まで唄い、騒いでいた。

5. 参加者たちの語り

祭りの参加者たちは祭り当日へ向けて、数ヶ月間もの間準備に労力と時間を費やす。それでは新町の祭り参加者は、砺波夜高祭、またそのメインである突き合わせに対して、どのような思いを持っているのだろうか。参加者たちの語りから見ていきたい。

5-1. 祭りに対する参加者たちの思い

裁許をする男性（30 代）は砺波夜高祭に対して、「物心ついた時から夜高大好きやったね。小さい時から突き合わせに参加したいと思っと思った。小 4 くらいから夜高の上乗れるんやけど、みんな乗りたいから（希望者の）倍率が高くて、乗れん時は悔しかったわ。毎年祭楽しみで仕方なくて、祭近くなったら、雨の日とか公民館の前のプレハブ（※台締めの項を参照）の夜高の台の下で寝とったもん」と話し、会計をする男性（20 代）は、「ほんっとに小さい頃から夜高に繋がりがたくて繋がりがたくて...夜高のことばかり考えとった。今も夜高を中心に 1 年回っとるもん」と

話す。これらの語りから、夜高祭は制作者たちにとって幼少の頃から根付いた一種の憧れのようなものであり、生活の一部となっているものであることが分かる。さらに楔役の男性（40 代）の、「夜高を出すのが伝統って思ったことはないわ。福野とは歴史が違うしね」という語りからは、伝統だから続けなければならないという義務からではなく、まさに自分たちの意志で新町の夜高を作り、祭りに出続けていることがうかがえる。また、祭当日 2 週間前から助っ人として金沢から来ていた男性（20 代）は、「会社の上司に連れられて去年初めて来たんやけど、夜高みんな綺麗で突き合わせも面白いと思った。制作も難しいけど面白いし、何より当日が楽しい。来年もまた来たいって思う」と語っていた。この語りから、短期間で魅了されてしまうほどの夜高に対する担い手たちの情熱と、祭りの魅力が感じられる。

5-2. 突き合わせに対する参加者たちの思い

祭りのメインとも言える突き合わせに対して、会計をしている男性（20 代）は、「突き合わせはほんまに楽しい。熱気がもうすごい。当日の突き合わせのために、皆制作頑張るんや」と語り、紙貼りを手伝う女性（60 代）は、「突き合わせは本当に危険ですからねえ、死人はいないけど、怪我はする可能性があるから...当日女性陣はハラハラなんです。でも砺波の突き合わせは面白いと思いますよ。夜高同士が上から下から攻めて、煽って。ツリモンが壊れるのは勿体ないですけど、それも祭りですしね」と語る。これらの語りから、曳き子たちが危険や夜高が壊れることもすべて含め、『突き合わせ』『祭り』として楽しんでいることが分かる。楔役の男性（40 代）の、「自分の町の突き合わせでは（楔をやっているから）夜高につながれんけど、やっぱりつながりたいから東五町のほかの町の突き合わせの時につながるんや」という語りからは、突き合わせが曳き子の中でいかに大きく重要な存在であり、また憧れの存在であるかということがうかがえる。また、裁許をしている男性（30 代）は、「新町の夜高は小さいけど自信持ってぶつかってくよ。めちゃくちゃ煽って夜高を左右に動かすと気持ち良いし、小さい分やってやろうって気持ちになる」と、他の町の夜高に引け目を感じることなく、自分たちの夜高に自信を持って突き合わせに臨んでいることを語っている。更に別の男性（40 代）の、「マイクパフォーマンスも突き合わせの醍醐味。観客も盛り上がる」という語りからは、自分たちだけでなく祭り全体を盛り上げようという気持ちが感じられる。

5-3. 新町における問題

先にも述べたが、新町は他の町に比べ公民館や町自体の規模が小さい。では、新町の夜高において現在どのような問題があるのか、ここでは参加者の語りから見ていきたい。

デザインを描いている男性（30 代）は、「夜高を出すにはかなりのお金がかかる。

砺波夜高は市からの助成金がないから、ご祝儀とか町内の方の負担金に頼らんなんけど、全ての家から出してもらえる訳じゃないし、しかも新町は世帯数自体が少ないから資金集めるのは大変やね」と話す。一方で裁許をしている男性（30代）は、「資金の面では何とかやってきとるけど、担い手不足になったらどうしようもないし、夜高出せんようになるかもしれんね。でも一度夜高が途絶えたらまた復活させるエネルギーがすごくいるし、突き合わせのこともあるから簡単にはやめられない」と、資金不足も問題ではあるが、現在は制作者不足の方が深刻であることが分かる。この問題について、紙貼りを手伝いに来る女性（60代）は、「新町は働き手の世代の男の人の人数が少ないので、毎晩制作が大変なんです。まあもっと人数がいても、公民館も狭いし入れないんですけどねえ」と語る。更に副裁許する男性（40代）は、「制作人数が足りん中で他から手伝いに来てくれるんやったら嬉しいけど、皆自分のことで手一杯やから制作のマニュアルを作ってあげれんし、結局意味がないんやね。その前に公民館のキャパシティ超えてしまうし、今のところ他に公民館立てれる土地もお金もないからね」と、現在のところ新町における制作者不足に講じる策はないことを語った。

6. 祭りの存続

以上に、新町における夜高制作、祭り本番の様子を、参加者の語りを交え紹介してきた。それでは、冒頭に述べた夜高祭の問題点は、新町においては具体的にどのように表れていて、新町の人々はそれに対してどのように対処しているのだろうか。本節では、それらを具体的に示したうえで、新町の祭りの存続について考察する。

6-1. 新町における祭りの参加者の確保

先の報告で見たように、春日町や木舟町では、旧住民の人口減少による祭りの担い手の減少を、祭りに積極的に参与するコアメンバーたちが中心となって、夜高の制作過程にマンション住民や地域外の住民を参加させる工夫をおこなっている。また、これらの町では、夜高の制作の場が、参加者たちの交流の場となっている。新町においても、制作の場が、参加者の交流や連帯の場になっていることは、「町内の人と話す機会も増えて、コミュニケーションにもなる」、「公民館がひとつの社交場になっている」などの参加者の語りからうかがえる。

しかし、新町では、木舟町の報告で見たような、地域外の人々の参加を得て、祭りを存続させていくという方法がうまくとれていない。そうした状況にあって、副裁許の男性（40代）は、「10年後には世帯数が半減し、東五町内で合併の話が出てくるかもしれない」と語る。これまで報告された3町と比べてもっとも面積が狭く人口が少ない新町は、他の町以上に地域内外の多くの参加者を確保しなければなら

ない。しかし、逆説的ではあるが、町の規模の小ささが多くの参加者の確保を妨げているのである。

この理由は、次のようなものである。第一に、新町には夜高の制作場所としては数人が作業できるだけのごく小さな公民館しか無く、建て替える土地も費用もない。次に、人口が少ないため、祭りの中心となり、地域内外から参加者を集めて制作のノウハウを教えることができるコアメンバーが7人ほどしかいない。これは、春日町や木舟町のコアメンバーの数が、どちらも約20人だということを考慮すると、非常に少ない。仮に大きな作業場を確保することができたとしても、コアメンバーの1人の「制作人数が足りん中で他から手伝いに来てくれるんやったら嬉しいけど、皆自分のことで手一杯やから制作のマニュアルを作ってあげれんし、結局意味が無いんやね」という語りからわかるように、コアメンバーが少ないために新規の参加者に制作のノウハウを教えたり、制作過程をマニュアル化したりすることが困難な状況になるのである。

6-2.行政の補助とその限界

このような新町が抱えている問題を解決する方途の一つとして、行政の補助という可能性が考えられる。しかし、砺波市役所観光振興戦略室で祭りの存続と行政の関わりについて尋ねたところ、「出町と観光客の仲人のような存在として、全国に夜高祭りを広めていきたい」と語りながらも、「(夜高祭りは)住民が主体となっておこなうものであり、行政が介入するよりも住民たちのエネルギーで支えるものだ」という回答が返ってきた。また、夜高祭りをおこなう出町地区の住民たちは、「行燈の希少価値を利用してPRした方がいい」や、「散居村やチューリップフェアと連携させてPRすればいい」、と祭りの宣伝効果による参加者増を期待している。しかし現在のところ、たとえば砺波夜高祭と福野夜高祭、庄川観光祭、津沢夜高祭の4つの夜高祭りを一つのポスターにまとめて配布していることなどを見ると、現時点で行政が積極的に夜高祭りの宣伝に乗り出すつもりはないらしいことがうかがえる。また、出町の住民の中には、宣伝による観光化に対して、「これは自分たちの祭りだから、外部の目を気にしすぎるのも良くない」や、「観光客の事ばかり考えていたら祭の人間味が失われるのではないか」と否定的な見解を持っている人たちもいる。つまり、行政の補助が得られる見込みが薄いというだけでなく、仮にあったとしても、行政側と制作者側が協調してひとつの課題に取り組むことは、容易に実現しようにはないのである。

6-3.新町における祭りの存続の可能性

新町が抱えている問題の根本的な原因は、人口が少ないために、町の内外からの参加者を支える役割を果たすコアメンバーがわずかしかいないという点である。

したがって、宣伝効果によって町の外から祭りの参加者が集まったり、観光化によって町に経費が配分されるようになったりしたとしても、また、観光化にとらわれずに、住民により町の独自性や特徴を保った夜高を制作する環境が整ったとしても、今後、祭りを存続させていくことは難しいと考えられる。本報告書で報告した他の3町の事例も合わせると、他町の協力を得て広い夜高の制作場所を持つことや、新町の夜高の特徴を十分に理解している人たちをコア・メンバーに加えることが、有効な策だと考えられる。新町のような小規模な町が、砺波夜高祭のように競争性が高く、「見せる／魅せる」要素の強い祭りに参加しつづけるためには、町を超えた組織的な連帯と協力が必要なのではないだろうか。

おわりに ー調査を終えて

最後に調査を通じた感じたことを記したい。

今回新町を対象に調査を行い、毎年限られた時間や環境の中で夜高を制作し、祭りに出すということが、いかに困難で、また意義のあることであるかがわかった。厳しい状況の中、真剣に制作に取り組む人々に姿は実にいきいきとしていて、やりがい、情熱、そして意地が強く伝わってきた。

今回の調査により、新町は祭りを維持していくにあたって複雑な問題を抱えていることがわかった。また、大行燈を出しているその他の町に対しても調査を行った結果、現時点で問題を抱えている町が多くあることもわかっている。それらの問題は、今後も砺波夜高祭を続けていく上で早急に解決したいものだと思われるが、逆に、現在の砺波夜高祭の魅力を成す重要な要素になっているとも考えられる。各町で「資金・制作・運営」をしていくことは決して簡単なことではない。しかしその決して楽でない状況で制作していく中で、各町内で知恵を出し合い創意工夫を凝らし、多大な労力を費やした結果が、各町の夜高の特徴となっており、さらに砺波夜高祭のレベルアップに繋がっているように感じる。

新町は現在解決が厳しい問題を抱えているが、団結力や誇り、社会勉強の機会など、夜高制作から得られるものが多くある。これらは制作状況が簡単でないからこそ得られるものなのではないだろうかとは私は考える。しかし、新町における問題をこのまま放置しておいては、いつか新町が夜高を出せなくなる年が来てしまうだろう。今回、準備段階から新町住民の祭りに対する思いを肌で感じてきた身としては、砺波夜高祭から新町の夜高の光が消えてしまうことはとても心苦しい。そうならないためにも、新町の抱えている問題を砺波夜高祭全体の問題として捉え、新町の夜高が途絶えることのないよう適切な対策がとられることが望ましい。また、砺波内外における夜高祭の知名度の向上も、そういった各町の祭りの問題解決の足掛かりとなるのではないだろうか。そのためには、行政による働きかけがこれまで以上に必

要であることは明白であり、祭り関係者とうまく連携のとれた効果的な PR を期待したい。そして、地域の祭り、自分たちの祭りであるとともに、観る人を引き付ける大きな魅力を持つこの砺波夜高祭が、今後も存続、発展していくことを心から願う。

謝辞

今回砺波夜高祭の調査を行うにあたって、新町をはじめ各町の制作者の方々、砺波市商工会議所の方々、砺波市役所の方々、夜行会の皆様、亀岡様、その他多くの出町の方々に、大変お世話になりました。

また新町の皆様には、急なお願いにも関わらず調査を快諾していただき、準備段階から祭り当日まで、参与・観察、聞き取りを含め大変貴重な体験をさせていただきました。裁許の水木努様、副裁許の高畠文夫様をはじめとした新町の皆様、ご多忙にもかかわらず調査にご協力いただき、誠にありがとうございました。

第6章 鷹栖の地域コミュニティの現況 —地域行事や祭礼との関連から—

杉田 大和

1.はじめに

稲作を主な生業として発展してきた砺波平野は、「散居」という家と家が離れた居住形態で有名である。今回調査地とした鷹栖^{たかのす}という地域も、かつては水田が広がる農村地帯であった。しかし、近年団地や新興住宅が増加して都市化が進んだ。こうした社会構造の変化に伴い、地域コミュニティはどのように変化したのだろうか。通常コミュニティとは「場所などの物理的な位置関係のなかで生活を共にし、一体感を共有することで共属意識を抱く人々の集団」と定義される。しかしこの報告ではコミュニティを「何かしらの共通の経験を持ち相互に支え合う人々によって形成され、かつ人々がそれに対し帰属意識を持った集団」と考える。こう定義することで、どのような人々が、何に共同性を見出して結合しその集団へと帰属しているのかについてより深く考察できるのではないだろうか。そのうえで伝統的農村社会と現代的農村社会それぞれにみられる地域コミュニティの違いを、「何を共通の経験として形成されているのか」「その共通の経験はどういった特徴を持つのか」「帰属意識はどこから生まれているのか」の三つの点に注目して考察していく。

2.調査地概要

鷹栖^{たかのす}は、砺波市西部にある庄川扇状地のほぼ中央に位置する。面積は 522 ヘクタール、海拔は 50 メートルである。土地の表土は浅く、20 センチメートルから 50 センチメートルであり、その下は礫土^{れきど}（小石を多く含んだ土壌）となっている。一方、地下水位は低く、18 メートル程であるが、地区西部のあたりは比較的浅く 7~8 メートル程となっている。この一帯は平野で、かつては加賀藩の統治のもと稲作で栄えた歴史をもち、1727 年には 3,654 石の加賀藩統治下で第一の大村となった。

鷹栖は、1183 年（永寿 2 年）の倶利伽羅の合戦において木曾義仲^{きそよしなか}に敗れた平家の兵士、小倉六右衛門^{おぐらろくゑもん}が、白羽の鷹を追ってこの地に至り土着して郷土となったことが始まりとされている。その鷹が巣籠った場所が現在の八幡宮であり、1907 年（明治 40 年）に境内の杉の古株に「村名発祥の地の石碑」（写真 1 を参照）を建てた。

当初「たかのす」を「鷹の巣」と表記していたが、1670年（寛文10年）、加賀藩主前田利常まさだとしつねの時に現在の「鷹栖」の字をあてるようになった。長らく独立を保ってきたが、1955年（昭和30年）1月1日をもって砺波市に編入された。



写真 1. 村名発祥の石碑

地域内の組織は区単位で分かれており、現在1区から16区、住宅団地の17区、鷹栖東町と鷹栖台町の合わせて19の区から構成されている。昭和43年に鷹栖東町に住宅団地が完成し、さらに1978年（昭和53年）には鷹栖新台と鷹栖17区が誕生した事によって現在の区分けになったのだが、それに伴って世帯数と人口が増加した。鷹栖の世帯数は873世帯であり、人口は3061人である（うち男性が1472人、女性が1589人）。最も人口が多いのは2区で、296人であり（うち男性156人、女性140人）、また、世帯数もトップの85世帯である（平成22年9月30日現在）。少し古いデータになるが、2005年（平成17年）の国勢調査によると、世帯のタイプ別の数は、持家が721世帯（2701人）、公営・公社・借家が74世帯（223人）、民営住宅が15世帯（31人）、給与社宅が11世帯（21人）、間借りが3世帯（11人）という結果であった。



写真 2. 第3区希望が丘団地

近年では2006年（平成18年）から2010年（平成22年）までの4年間で、全19区のうち13の区の人口が減少しているが、中には増えているところもある。特に、5年前に「希望が丘」という団地（写真2参照）が出来た3区は、平成18年と比べ人口・世帯数ともに1.35倍ほどに増えており、一番の増加率である。

3.伝統的農村社会の地域コミュニティ

まず、伝統的な農村社会における地域コミュニティはどのように形成されていたのか、また、人々がそれをどう捉えていたのかについて、考察していく。

3-1.農業を通して

「昔は（田おこしから田植え、収穫まで）みんなで一緒にやとった」という 80 代の女性の語りや、「（稲作の時期になると）親戚とか、近所の人とかが集まって手伝いながらやってたわ」という 80 代の男性の語りから、伝統的農村社会では農作業が共通の経験となっていたことが分かる。また、80 代の男性は「今みたいに機械でやとったわけじゃないから、みんなでやらんとできんかった」という。同じく 80 代の女性の「人がおらんとできんことやから」という語りや、「なんでもそうだけど、（ばらばらじゃなくて）まとまっとらんとできんからね」という語りから、近隣住民との協力がなくてはならないものだった様子がわかる。実際加賀藩による土地開発が始まったころ、人々は「シマ」とよばれる集団を形成していた。「シマ」という呼び名の起源には、洲の間、「洲間（スマ）」が発音しやすいように「シマ」へと変化したというものや、平野に点在する散居の様子が海上に浮かぶ島のようにみえたからだというものもある。その「シマ」の形成は 17 世紀中頃に一通り完成するのだが、人々は「シマ」の内部の他の住民と協力し、農作業を行っていたとされている。

こうした「シマ」内部での住民同士の共同作業は、一回だけで済むものではない。「その年だけじゃないからね。次の年もまた次もって、ずっと一緒に（農作業を）やらないといけなかったから（自然と連帯感が生まれてくる）」という語りからもわかるとおり、住民同士の協力は幾度となく繰り返されてきた。また、「シマ」を構成するメンバーが頻繁に入れ替わるということもなかったため、同じメンバーと長い期間、共に協力して暮らしていたのである。ずっと一緒に暮らしているうちに親しくなり、「一緒に（農作業を）やとった人と温泉とかに行ったこともあったよ」という語りもあった。このように、伝統的農村社会の住民にとってコミュニティ内のメンバーは、同じ土地を耕して同じ畑でできたものを食べ、時には仕事を離れて一緒に楽しむ、まさしく苦楽を共にする仲間だったのである。そうした生活を送るなかで自分たちは強く結びついた集団なのだと実感し、その集団へ帰属意識を持っていたといえるだろう。

3-2.伝統モデルの変化と現況

散居という居住形態は、自宅周辺に水田を集約させ日常生活と生産活動を一体化させていた。そのため「生活の完結体」と称されていた（金田章裕／藤井正（編）

2004『散村・小都市群地域の動態と構造』京都大学学術出版)。散居というコミュニティでは、他の場所ではなく「その地域であること」が大きな意味を持っていた。しかし、生産の基盤が地域の外に移るにつれて生活が地域の内部で完結しなくなった。現在の鷹栖では農業が大幅に衰退してしまったが、その原因も都市化に伴って会社勤めが中心になったからだというものである。また、住民の流出が農業の後継者不足を招き、かつて農業を行っていた人々も作業を業者に委託し自分では農業を行わなくなった。個人で農業を続けている農家もわずかながら残っているが、作業は機械でできてしまうため近隣住民の協力を必要としていない。鷹栖に住んでいれば誰もが農業に携わり、自然と地域コミュニティに組み込まれていくという図式は崩壊したのである。

また、概要でもふれたとおり現在の鷹栖は区単位となっておりかつてあった「シマ」とよばれる集団は残っていない。高齢住民のごく一部の間には、かつて同じ「シマ」の仲間だったという意識が残っている場合もあるが、それ以外の住民となるとただ過去に「シマ」と呼ばれる集団があったことを知識として知っているにすぎない。まして新住民はそもそも「シマ」というものを知らないというのが現況である。現在住民たちは、自分たちがどういう集団なのかをはっきりと認識していないか、もしくは認識するのが困難な状況におかれているのである。

3-3.小括

伝統的農村社会においては、農業が生活を支えており、住民は誰もが自然と農業を行っていた。それ以外の選択肢は意識されてさえいなかっただろう。そのため意図的に特別な共通の経験を作らなくても、住民は当然のようにまとまり互いに協力することができたのである。「意識されることなく自然と形成される」という点と「住民が帰属すべき唯一の集団であった」という二点が、伝統的農村社会における地域コミュニティの特徴であるといえるだろう。

しかしそれは、農業が誰もが必ず携わるものとして、住民全員が等しく共有できる経験として不動の地位にあったからに他ならない。現代ではどこで何を生業としてどのように生活するかが自由に選択できるようになった。そのため、伝統的農村社会では日々の生活を共にしていた近隣住民の存在もほとんど関わりを持たない存在へと変化していった。それに伴って人々の意識も「自分たちはいったいどういう集団なのか」「そもそも自分たちは集団と呼べるのか」「たまたま近くに集まって住んでいるだけではないのか」といったように変化していった。「自分はこの集団の一員だ」という帰属意識をどこに向けていいのかがわからなくなり、次第に薄れていったのであろう。このように、農業が共通の経験として機能しなくなったため、新たな別の共通の経験を意図的に設けなければ人々がまとまった集団を形成することは難しくなった。また、帰属先の集団の存在自体が曖昧になり、帰属意識も

はっきりと認識される度合いが下がったのである。

4. イベント・学校と地域社会

鷹栖では地域全体のものから各区独自のものまで様々な行事が行われている。そういったイベントに参加し活動を共にすることで近隣住民との交流を深めてもらい、鷹栖という地域への帰属意識を持ってもらおうとしている。以下ではそのような各種のイベントについて考察していく。

4-1. 球技大会

地域イベントの中でも代表的なものが、各区対抗で行われる球技大会だ。行われる種目は男性がソフトボール、女性がビーチバレーである。聞き取り調査をしていると、多くの住民が住民同士の関わり合いの場としてこの球技大会を挙げた。例えば50代の女性は「今まで弱かったチームに、団地の人とかが入ってきて強くなったりとすると、（簡単には）勝てなくなる。だからもっと自分たちも、例えば3区には負けんぞみたいな感じでまとまろうとしたりして、自分の所属してる地域を意識するようになる」と語った。また、参加した事のある住民に話を聞くと、30代の男性は「社会人になると運動ってあんまりしなくなるけど、たまにこういうの（球技大会）があるといいよね」という。30代女性は「一応順位とか勝ち負けもあるけど、まあ、一緒に体動かしたりとか、おしゃべりしたりとか、楽しくできればいいかなあって感じで参加している」と語った。こうした語りからもわかるように、大会という場で他と競争することで自分はどこに所属しているのかということを確認に意識するようになる。また、一緒に体を動かしたり話をしたりするという活動をとおり、そういった経験が共有できる仲間として交流を深めていくのである。

4-2. お楽しみ会

鷹栖では球技大会の他にも、区ごとにバーベキューなどのお楽しみ会などが実施されている。イベントには年齢などの制限が無く誰でも参加できる。体力的な問題のために高齢者の参加はやや少ないらしいが、それでも「若い人も古いもんも、いろんな人が集まって楽しくやってるよ」と、60代の女性が語った。子どもたちは「学校の友達に会えるから楽しい」といっていた。大人たちも近所の人同士集まってお酒を飲み、仕事の事や子どもの事など様々な話をし、楽しいひと時を過ごすのだという。40代の男性も「仕事の疲れとか、こういうところで集まって酒飲んでしゃべるとなくなっちゃうね。やっぱり楽しいから」と話してくれた。新住民の人にとってはこれらのイベントが地域の住民と親交を深める機会になるようだ。加えて、「地域の事とか全然知らなかったけど、もとの住民、特に高齢者と話してるとだんだんわかるようになってくる。分からん事がわかるようになる」という30代の

男性の語りや、「地域の事とかもそうだし、ちょっとした噂話とか、そういう事とかも聞けて、結構参加して楽しい面もあるし、ためになる部分もある」という 30 代の女性の語りもある。地域のイベントがかつての共同の農作業に代わり、住民同士の交流を深め、新住民が地域へと組み込まれていく一つの入り口となっている様子が感じられた。

しかし、球技大会も含め地域のイベントには全く参加しないという住民も少なからずいる。「歳をとったからね、今では全然参加しなくなった」と語る高齢者も多かったが、若い世代の住民のなかには「やっぱり仕事が忙しいから行けない」という声や、「正直めんどくさい。休みの日とかは自分の好きな事をしたい」という語りがあった。基本的にイベントは土日を使って行われるため、休日出勤がある仕事に就いている人や毎日遠方まで働きに出ていて土日しかゆっくりできない人などは参加率が下がるようである。また、子どものいない若い夫婦や、反対にある程度子どもが成長した家庭の場合は親の自由度が高く、個人の娯楽優先となっている場合もあるだろう。

4-3.学校教育

地域イベントの多さに加えて鷹栖に特徴的なのは、一村一校が可能となっているという事実である。砺波市の中心街から決して離れているわけではないが、砺波市に合併する際の条件の一つとして校区の独立を主張したからだ。こういったところから地域へのこだわりの強さを感じる。

さて、この一村一校という特徴もまた住民と地域の密着性を高める要因だと考える住民が多い。住んでいる地域内に学校があるため地元を離れる事が無いという地理的な面もあるが、それよりももっと他の事もあるという。

まず、鷹栖全域の児童が一つの学校に通うという点が挙げられる。「学校でしか会わないってわけじゃないからね。学校の友達、地域の友達でもあるし、友達がいるからこういうの（各種イベント）にも参加しようとするし」という 30 代の男性の語りにもあるように、地域の人との関わり合いが促進されるという面がある。それは児童だけに限らず親世代にも同様の事がいえる。「PTA とか学校行事とかの関係で一緒になる事が多いと、PTA で一緒の近所の〇〇さんがいるからとか、そんな感じで新しい人も溶け込みやすくなる」と語る 30 代の男性や、「知らない人ばかりよりも、知ってる人がいた方がいいからね。やっぱ、そういうの（一村一校）って大きいと思うよ」と語る同年代の男性もいる。同じく女性も「子どもがいて、子どもを通して親同士関わり合ったりする事があるので、一緒にイベント参加したりする」と語っていた。「子どもができると変わるね」と語る 30 代の男性もいた。「子どものためにも、自分も地域の行事などに参加して、地域の事を好きになろう、地域の人と楽しくやっていこうってなるね」ということであつた。

さらに、学校を通したつながりというのは同世代のあいだだけに留まらない。「何年も上の先輩もそうやし、下の子どもたちもそうやし、同じ学校を出とるっていうのは、大袈裟な言い方だけど時間を超えて人生の一部を共有してるわけやからね。それだけでみんな一緒だね」と80代の男性は語る。また「同じ学校の後輩とか、部活のOBとかって、歳が離れててもそれだけで何か特別かわいがったりとかするじゃない。それと同じ様な感じよ」と語る40代の男性もいた。

一村一校の特徴をさらに挙げるなら、大会などで学校が挙げた成果が直接地域の成果になるという点である。児童やPTAのメンバーが地域の住民と一致するからこその特徴だ。

しかし、社会人になってから鷹栖に引っ越してきた住民は鷹栖の学校を卒業したわけではない。そのため古くからの先輩後輩の関係の中に入っていくことは難しく、「自分がどのへんに位置するのかわからなくて、居心地が悪いなあって感じる時がある」と語る30代の男性がいた。また、子どもがいない若い夫婦や高齢者にとっては教育関係の行事などはあまり実感のわからないものだという声もあった。

4-4.住民どうしの互いの意識

まず旧住民、とくに高齢者の間にどのような意識があるのかをみていく。聞き取り調査を進めていると多くの高齢の住民から「地域の人がおるから安心して生活が出来る」「みんなでまとまっとった方が防災にもなるし、そういうところはここ（鷹栖）の良い所やね」という語りが得られた。また「そういう人たち（一緒に住んでいて、互いに助け合う人たち）がおって地域っていうのができていくからね。反対に、鷹栖っていう土地柄が住んでる人を作っていくっていうのもあるし」と語る80代の女性もいた。若い世代の住民の間にも「昔から知ってるもんばかりだから、変に他人行儀にならなくて、気楽に過ごせるね。もちろん、ちゃんとせんといかん時はちゃんとするけどね」という語りがあった。

一方新住民の人々はどうかという。「はじめ、知らない人ばかりだったので入っていきにくかった」という30代の女性や、「やっぱ古くからの住民からすれば、私たちはどうせ新参者だからって見られてるだろうからね」と語る同年代の女性がいた。相手のことを知らないし、相手から見れば自分たちはよそ者だからということで身構えてしまうこともある。その一方で旧住民側は割と気軽に深いかかわりを求めてくる場合もあり、そういう面に煩わしさや息苦しさを感じる人もいる。「行事とかが多いし、まとまりが強いとこだなあとは思ってるけど、まあ、めんどくさいって言えめんどくさいですね」という語りもあった。

4-5.小括

現在は農業に代わり、地域のイベントや学校行事を通して集団が形成されている。

人々を集めまとめるものとして農業とイベントが似たような機能を果たしているようである。しかし、農業と違いイベントは住民どうしの結束を強めるために意図的につくったもので、参加者がある程度仲間意識や集団に対する帰属意識を持てるようにできている。特に新住民に対しては帰属するべき集団をあらかじめ提示しているともいえるだろう。集団を形成する過程で帰属意識を持つようになるというよりは、イベントを通して楽しみを共有し、「よそ者」となってしまったことで宙づりになった帰属意識をその集団に落ち着かせているといった方が適切なのかもしれない。最初からどこかに帰属する事を求めている人が集まり形成された集団で、非常に限定的なコミュニティであるといえるだろう。

ただし、学校関連の組織に関していえば鷹栖に住んでいれば自動的に組み込まれるため、参加までの過程という点だけみればイベントのそれよりも農業のそれに近い。けれども、果たして同じ学校に通ったという共通の経験を核とした集団をイメージし、自分もその一員だと考えるかどうかは人それぞれだ。まして大人になってから引っ越してきた住民はその集団そのものに関わっていない。こちらもまた、地域全体に及ぶ包括的なものではなく、小規模なコミュニティしか生み出すことはできないのである。

5. 祭と地域社会

それでは、伝統的な祭事と地域社会との関係はいかなるものであろうか。地域の伝統的な祭りは単なるイベントとは違って祭に参加することや、もしくは祭りそのものに特別な意味があるのが特徴である。それを踏まえたうえで本節では夜高祭と東部獅子舞の様子を記述し、祭事に見られる集まりの特徴を考察していく。

5-1. よたかまつり 夜高祭の概要

鷹栖の夜高祭は、第2部1章の砺波夜高祭とは別の祭りである。観光用として外部の人に見せるということを目的としておらず、突き合わせも行われたい。あくまで地域の人たちが地域の人のために行っている内側に向けられた祭りである。

夜高祭は別名「ヤスゴト」とも呼ばれ、例年6月10日と11日の両日に田植えを終えた祝い事として行われており、五穀豊穰・商売繁盛・家内安全が祈願される。以前は集落ごとに小さな夜高行燈を作り火を灯して歌いながら地域をまわっていたが、1955年代（昭和30年代）に中止された。その後1969年（昭和44年）に夜高の火を灯すことで青年団の存在を地域住民に理解してもらおうと、青年団（25歳までの住民）中心で復活させた。園児や児童にも夜高を引かせることによって伝統文化を理解してもらおうということで、住民からは大変喜ばれていたが、少子化に伴

い 2001 年（平成 13 年）に途絶えた。

夜高は途絶えたが、伝統文化を残す目的で小学校と PTA が連携し、4 年生以上の児童が田楽行燈を作り地域内を東西のコースに分かれてまわるという行事は続けられていた。その甲斐もあって昨年（2009 年）、8 年ぶりに鷹栖夜高保存会を中心に夜高が復活した（写真 3 参照）。夜高本体はゴールデンウィーク明けから 1 カ月かけて制作された。鷹栖は地域の中を北陸自動車道が通っており、その高架下をくぐらなければならないため高さは約 3 メートルという制限が新たにできたが、色鮮やかな夜高は祭りに華を添える。

今年の夜高祭は実施日が変わり、6 月 4 日（金）と 5 日（土）に行われた。日程が変わった背景には、主な祭りの担い手が社会人であるため平日だとなかなか休むことができないということがある。また、砺波夜高祭が毎年 6 月の第 2 金曜日、土曜日に行われており、同日開催だと助人に行く人が参加できなくなるし、見に行きたい人もいだろうということも理由にある。そこで昨年鷹栖の夜高を復活する際に検討し、参加者の確保を考慮して日程を 6 月の第 1 金曜日と土曜日に変更したのである。

祭りは太鼓と笛の囃子（写真 4 および写真 5 を参照）が先導し、その後ろに夜高が続く。夜高を押し歩くのは鷹栖夜高保存会の会員だ。女人禁制のため女性が夜高に繋がることはないが、囃子の中には中学生の女の子がいた。幹部や OB の方は無線を使ったりマイクを使ったりなどし、相互に連絡を取り合いながら交通整理を行う。夜高本体にロープをつないで小学生以下の子どもがそのロープを曳く。ロープの長さは 50 メートルほどで先頭から順に保育園児が繋がり、夜高本体に近づくにつれて学年が上がっていくという並びだ（写真 6 参照）。また、未就学児には保護者がともに繋がることも可能で、ここでは女兒や女性が参加することもできた。

当日の流れとしては、18 時に鷹栖公民館を出発し指定のコースをまわる。一日で地域全体をまわることはできないため、西と東に分けてまわる。今年是一日目が東まわり、二日目が西まわりのコースであった。

曳きまわしの最中祝儀をもらうとその場で止まり、口上を述べたのちに夜高本体を揺らす動作でお礼の意を表す。見学者からは「すごい！」とか、「綺麗！」などの歓声も上がり、拍手も起こる。夜高見物を目的に外に出てくる住民もあり、中にはしばらく一緒についてまわっている人もみられた。



写真 3. 鷹栖の夜高



写真 4. 囃子の小学生



写真 5. 囃子の小学生



写真 6. 夜高を曳く子どもたち

住民には事前に夜高のまわるコースの書かれた地図が配られ、何時ごろにどこに来るのかも大体の目安の時間が表記されている。そのため、あらかじめ公民館などに集まって夜高が来るのを待っている住民もたくさんいた。自宅の目の前に来ると、二階の窓を開けて見学したり手を振ったりする子どもの姿も見られた。沿道で見学する高齢所の方からは「ごくろうさま」「ありがとう」などの声援が送られ、そのひと言ひと言に必ず軽く会釈をして同じように「ありがとうございます」などのお礼で応える。お互いの存在を大切にしている様子うかがえる。

曳きまわしは所々で休憩をはさみながら行われるが、その休憩の場にも人が集まってきて話をしたり夜高の写真を撮ったりしている。19時半に指定の場所で小学生以下の子どもと別れ、それ以降は大人のみで夜高を曳きまわす。22時半ごろ再び鷹栖公民館に戻ってきて、23 時ごろに解散する。一日に約 5 時間かけて 10 キロ程度を練り歩く。

参加人数は子どもが 100～120 人程度で、大人も合わせると 150～160 人程度になると思われる。ただし 2 日に分けて東西のコースを順番にまわるので、参加者ののべ人数はおよそ倍くらいになるだろう。

5-2. 東部獅子舞

鷹栖東部の獅子舞は、鷹栖東部獅子方保存会という 42 歳までの男性によって構成される組織が中心となっていて行っている。東部というだけあって鷹栖全土ではなく、1 区から 7 区と 13 区の合計 8 つの区からなる。毎年 2 つずつ、1 区と 4 区、2 区と 5 区、3 区と 6 区、7 区と 13 区という組み合わせで担当の区が順番に入れ替わる。近年、団地や新興住宅ができた事により、若い世代が増加し、それに伴い保存会の会員数も増えた。

獅子舞自体は、80 年ほど前に富山県南砺市井波の高瀬という地域から伝わったものが起源とされている。複数の人によって演じられる百足獅子である。また、頭は角のない雌獅子であるため、原則女人禁制となっている。

頭の重さは 13.2 キログラムと、地方でも最大級の大きさであったが、近年漆を新たに塗りなおした事によりさらに加重され、現在は 14 キログラムを超えるという（写真 7 参照）。演じ手は、獅子頭が 1 人、胴幕の先頭両側に 1 人ずつ、胴幕内に 4 人、そして、最後尾で尾を持つ人 1 人の計 8 人である（写真 8 参照）。胴幕内は竹で骨組みが組まれており、胴幕内の人、両手を広げその骨組みを持つ。「獅子取り」と呼ばれる志氏の泰司役の子どもは小学生 4 人が行い、原則長男がその役を行う。それぞれ棒、長刀、太刀、鎖鎌といった武器や手ぬぐいを持ち、「サンバソウ」「テヌグイ」「ボウ」と呼ばれる舞を舞う。舞は「獅子殺し」ともいわれる。「獅子取り」が武器を持って形式的に獅子を倒すというものである。

獅子舞は毎年 8 月 19 日に実施される。朝のうちに地元の寺の一つである正安寺に奉納の舞をしたのち、該当区の各家庭をまわる。夕方に神社に舞を奉納した後、再び各家庭をまわる。

こうした地域の祭り以外にも、東部の獅子舞、地域のお寺である正安寺や常照寺、了章寺の落慶法要などの祝い事の際にも行われている。1973 年（昭和 48 年）には親鸞聖人の 700 回忌の際都合により休止していた獅子舞が再び行われた。それがきっかけとなって戦前は砂田敏二方で保存されていた獅子が正安寺で保存されるようになり、練習も同寺の境内で行われるようになった。2002 年（平成 14 年）には、正安寺本堂の横に小屋が立てられ、現在獅子はその小屋に保存されている。

更にこの東部の獅子舞は、1997 年（平成 9 年）にカナダのオタワ市で行われたカナディアン・チューリップ・フェスティバルに参加したり、2003 年（平成 15 年）に北海道札幌市で行われた全国獅子舞シンポジウムにも参加したりしており、獅子舞文化の全国への普及に貢献している。



写真 7. 獅子頭



写真 8. 獅子の全体像

東部獅子舞の当日、人々は 6 時 50 分に正安寺に集合し、それぞれの衣装に着替える(写真 9,10)。経験者が教えたり、獅子取りの小学生は母親が手伝っていたりする。



写真 9. 当事者が着るそろいの T シャツ



写真 10. 獅子取りの衣装

7 時 30 分ごろに祝儀の紹介と奉納の舞をした後、8 時ごろに出発する。今年は 2 区と 5 区が担当の区であったため、その 2 つの区をまわった。移動は基本的に徒歩だが、長距離を移動する際はトラックの荷台に乗って移動する。真夏に行われるという事もあり、トラックの荷台にはクーラーボックスが積まれ、冷たい飲み物が用意される。そうしたトラックの運転や運営の支援は、東部獅子方保存会の OB の方が行う。

各家の前まで来ると住民が祝儀を渡してくれ、幹部役員が受け取り、そこで紹介したのち舞を披露して玄関の中まで獅子頭が立ち入る。なかには居間の引き戸を外して板を設け、家の中まで獅子が入ってこられるようにして出迎えてくれる家庭もあり、当事者も住民も盛り上がる(写真 11 参照)。



写真. 11 引き戸を外し板を設けた家庭

昼食を 12 時ごろに食べるが、その際には住民がテントを張り、机を並べブルーシートを敷くなどして様々な面で協力をする。1 時間ほどの休憩の後、再び該当地区の各家庭をまわる。その他保育園や病院などにも出向く。保育園児の中には泣き出す子どももいたが、獅子舞に興味津々だった。病院では人々が正面玄関前で獅子舞を出迎え、拍手などで歓迎している様子だった。

その後、17 時 30 分ごろに公民館裏の神明社での奉納の舞を行う。多くの住民が集まり写真を撮るなどする。ここでは鷹栖のもう一つの獅子、14 区の宮木島獅子も披露される。東部の獅子舞よりは小型で動きも激しく、見学者から歓声があがることもある。

奉納の舞が終了してから全員で夕食を食べ、再び練り歩きに向かう。終盤には「特別興行」というものが組まれている。特別興行は新しく家を建てた人や、結婚した人を手荒く歓迎するというものである。例年は、まずその人の家まで獅子がまわって来た際に、家を建てた、または結婚した男性本人が獅子頭を持って舞う。その後、花火に火をつけたり、爆竹が投げられたり、舞を終えた男性に水をかけたりするといったことがなされる。今年は、舞の最中に花火が上がり、舞を披露した後男性を羽交い絞めにしてシャンプーをかけたあと、バケツで水をかけるという事がされた。

こうして 1 日かけて該当の区をまわり、23 時近くに再び出発地点であった正安寺に戻ってくる。最後にそこで舞を披露したあと、各自着替えて境内で打ち上げが始まる。OB や獅子取りの小学生は途中で帰宅したが、他の人たちは遅くまで飲み続ける。片付けは翌日朝から昼ごろまでかけて行われる。

5-3.住民どうしをつなぐ祭りの機能

休止されていた夜高をなぜ復活させたのかを鷹栖夜高保存会の会長に尋ねてみると、「子どもたちに鷹栖の伝統的な祭について知ってほしかったから」との事であった。その他、30 代の男性は「子どもの楽しむ顔が見たいという思いもある」という。

その思いは新住民にも向けられており、鷹栖に住んでいるからにはその伝統文化について知ってほしいし、祭りにも参加して一緒に楽しく過ごしたいという願いがあるのだという。同様の考えは獅子舞の方でもあった。「外部から見れば祭りは特別なものかもしれないけど、僕らにとってはあたりまえのものだね」と30代の男性は言う。だから、祭りの参加者の間には特別なことをしているという意識はない。「それが当たり前。これが自然の姿なんじゃないかな」という30代の男性の語りがよい例だろう。特に獅子舞は本番に向けて1カ月ほど前から平日毎晩練習が行われる。遠方まで仕事に行っているが、それでも仕事を終えて鷹栖に帰ってきて、それから練習に参加している人もいる。それはとても大変なことだし、特別なことのように思える。けれども30代の男性は、「新しい人も、鷹栖に住んでる者にとっては当然のことなんだと思うようになってくれば、それが一番うれしい」と語った。また、「実際参加している人の中にも祭りの歴史や意義を知らない人もいる。それにも関わらず新住民を含めみな積極的に参加しているのか、どういう目的で参加しているのか正直自分たちでもわからない」と語る30代の男性もいた。

祭りに携わっている住民たちは、祭りに参加するのは当然という意識に基づいて参加しているとのことであつたが、祭りを通して近隣住民とのつながりが強化されたと感じているという。祭りに向けての準備や練習には、10代から40代までと幅広い年代の人が携わる。「会社とかならまだしも、地域の中でこんないろんな年代の人と関わることはあってないでしょ。それができるのが祭りのいいところだね」と30代の男性は語った。その場では祭りのことはもちろん、仕事のことや家庭のこと、その他昔話をしたりなどいろいろな話をする。「みんなで酒を飲みながらしゃべったりするのが楽しいね。なんだかんだ大変だけど、生活の一部になっちゃってるって感じかな」と語る男性もいた。新しい住民の方に話を伺うと、石川県から4年前に鷹栖にやってきた男性は、当初出町にするか鷹栖にするかで迷ったらしい。周りからは鷹栖は色々近所づきあいが多くて大変だと言われたが、出町と比べ鷹栖の方が土地が安かったから鷹栖に決めたのだという。ちょうど引っ越してきた年に自分の区に獅子の担当が回ってきて、声をかけられ参加したのだという。「そうやって周りから誘ってもらえたのはありがたかった」と語った。おかげでこういう場に参加して、色んな人と知り合い、一緒に楽しめるということはとてもいいことだと感じているのだそうだ。「祭りに参加しててもまだ覚えきれていない人もいるけどさ、参加しなかったらもっとわかんなかった」という40代の男性の語りや、「参加すればいろんな人に顔を覚えてもらえるし、そうすれば他の場所で会っても話しかけてもらえるし、気にもかけてもらえる」という20代男性の語りからも、参加者の人の輪を広げる機能を祭りが持っていることが分かる。また、住民同士のつながりは祭りの場だけにとどまるものではないということもわかった。獅子取りの母親も「大人に混ざっていろんなことを学べるので、いい経験をさせてもらっているなあと思う」との

事であった。また、「マチの方ではこういう祭りがなくなっているなか、ここは残ってていいなあって思う。大切にしていってほしい」という語りもあった。なかには子どもたちも最初は嫌がっていたが、次第に「早く行こう」と親の方が急かされるようになったという語りもあった。全体的に祭りに参加することが楽しい、もしくは楽しいから参加しているといった語りが多かったのが印象的だった。

5-4.変化する祭り

さて、ここまで祭りに祭りが参加者に与える影響や、祭りを通して参加者が得ているものをみてきたが、そもそも祭りにはどういった人が参加しているのかを以下からみていく。

夜高も獅子舞も女人禁制の風潮がいまだ残っており、女性が直接祭りを運営する側に立つということはない。夜高の場合囃子の中には中学生の女子の姿もあったが、獅子舞では雌獅子であるため女性が頭を持つことも囃子をすることもなかった。以前は練習すら見学禁止であった。しかし、現在ではだいぶオープンになってきた。獅子取りを行う小学生の母親などが練習を見に来るし、練習後個人のお宅でお酒を飲んだりする場合も、その家の女性の方が料理を作ってくれたりなど、女性も祭りに関わるようになりつつある。実際練習を見学していると、女性の姿も見かけられた。「祭りは自分たちだけじゃできない。祝儀を出してくれる人、子どもの送り迎えをしてくれる人、当日見に来てくれる人や外から盛り上げてくれる人など、いろんな人がいてこそできる」と東部獅子方保存会会長の30代男性は語った。

さらに、新興住宅や団地ができ、新住民の祭りへの参加という事も問題となった。「かつては団地の人間には頭を持たせるのはだめだと言われた」とのことであったが、現在はそのようなことはない。40代の男性は「確かに伝統は伝統として残していくべきだが、それでも、社会の変化に合わせて変化していかなければならない部分もある」という。だんだんとオープンになってきた背景には、そういう考え方もあるようだ。いくら伝統を残していきたいからと言っても、支えてくれる人がいなければ存続していく事はできない。「変えてしまったら伝統ではなくなっちゃうという人もいるけど、そもそも伝統というものは変わっていくものである。今みたいなグローバル社会だからこそ、自分たちだけではできなくなってきた。外部の人とも関わりながらやっていかなければいけなくなった。そんな時に、変化していく事、どんどん周りを取り込んでいくというのは、決して悪いことではないし、これからの新しい形なのではないかと僕は思うよ」と語った。実際夜高は新旧の住民が一緒になって曳きまわす。また、獅子舞は当日頭を持つ持たないにかかわらず、全員に一度は頭を持ってもらおうと言う声があった。「(獅子頭の)あの重さを体験してもらって、ああ、こういうもんなんだってみんなに知ってもらおうよ」という30代の男性の語りなど、これらは先の男性の意見の好例だろう。地域の伝統文化と

ということで地縁を強く意識している傾向があり、住民全員を巻き込んでいこうとする姿勢が見受けられた。

だが、実際祭りに携わっていない人も少なくない。仕事が忙しくて参加できないという人もいるが、「仕事の都合でたまたま住むことになっただけって人も結構いるから、もとからの人みたいに地域密着型にはならないんじゃないかな」と語る30代の女性もいた。祭り当日も見学者の中には観光客の様な雰囲気が漂っているところもあり、「見ていて楽しい」という声は多かったが、「自分もやってみたい」という語りがあまりなかった。これらは特に女性に多い語りであったが、男性の中にもあった。加えて、高齢の住民の間にも新住民を含めた若い住民の祭りへの参加を喜ぶ一方、快く思っていない人もみられた。「今祭りをやってるのは祭りの歴史とか意義とかを知らんひとたちだから」との事であったが、私はここに一部の住民の間に新旧の意識が垣間見えたような気がした。

5-5.小括

伝統文化に基づく祭りというのは、その土地で行われてこそ意味があるものである。なぜなら、まず夜高のデザインや地方最大級の獅子頭は鷹栖を象徴するものであるからだ。そして、本来伝統的な祭りというものは五穀豊穡や地域安泰など、住民や地域そのもののためになることを祈願して行われていたからだ。人々は祭りに参加することで地域の象徴に触れ、地域の繁栄のために努めることで地域住民の一員としての実感を持ち帰属意識を芽生えさせていったのである。直接祭りを運営していない女性や高齢の住民も、同じ象徴のもとに集い祭りを通して等しく地域の繁栄を願うことで、同じく地域住民の一員としての務めを果たしていたといえるだろう。現在でも、「祭りは自分たちだけのものではない。あいさつされたら元気よくあいさつを返す。お礼をいわれたらしっかりこちらからもお礼をする」と徹底されており、お互いがお互いの存在を大切にしている様子が見える。こういったところから、集団への帰属意識が生まれてくるのだろう。

しかし、農業を行わなくなった今、祭りをを行う事によって豊作を祈ったり家内安全を祈ったりといっても実感を持ちにくい。次第に神事としての祭りの機能は薄れ、どちらかというとなんか楽しさを共有することの方が前面に押し出されるようになった。「祭りに参加して地域の人と交流を深めましょう」「一緒に騒いだりお酒を飲んだりして楽しみましょう」というが、祭りにそれを求める人は一部の人間である。誘われたため、近所づきあいも考え仕方がなく参加しているという人もいるだろうし、住民のなかには祭りが単純に集まって楽しむだけの場になる傾向をよくは思っていない人もいる。もちろん、祭りが本来の機能を完全に失ってしまっているわけではない。けれども、現在は集団に対し帰属意識を持てるかどうかの分かれ目が、その集団のなかで楽しいと思えるかどうかという点に大きく左右されるようになって

たのである。

6.まとめと考察

最後に、イベントと祭りにみられる集まりの特徴を対比させながら、現代的農村社会における地域コミュニティについて考察していく。

6-1.祭りとイベント

イベントと伝統的な祭りの違いは、参加者に対する強制力の有無だといえる。本来伝統的な祭というのは、その土地に住んでいる者なら何かしらの形で関わるのが当然とされていた。参加に関する義務が明文化されていたわけではないが、ある種の慣習として地域内の常識となっていたのである。つまり、人々はその常識に従い住民としての義務をまっとうすることで集団の一員としての帰属意識を持つことができたのである。実際祭りの最中の聞き取り調査の中でも「なんとかみんなには参加してほしい。と言うより、出ないと村八分だね」と語る 40 代男性や、「就職するときは、はじめにちゃんと、8 月 19 日は地域の祭りがあるから休みをくださいって言わんならんね」という 30 代の男性がいた。現在祭りに参加していない住民が実際に地域から排除されるという事実はないが、そういった語りの背後には、来たい人だけではなく鷹栖に住む住民全員に等しく地域の行事や人の集りの大切さを感じてほしいという思いがうかがえた。鷹栖の獅子舞は、天候不良であろうと平日であろうと、毎年必ず 8 月 19 日に行われると決まっている。それはまさしく「仕事などの他の事より、何よりも地域の行事を優先してこそ鷹栖民だ」「鷹栖の人間なら平日だろうが、雨だろうが関係なく参加するものだ」という、希望や理想のあらわれだろう。なぜなら、それこそが集団へ帰属しているといえる条件のようなものだったからである。もちろん儀礼としての神聖さや長きにわたる伝統を守るという意味もあるだろうが、先のような想いを感じさせる語りの方が多かった。

一方、球技大会やお楽しみ会などのイベントへの参加は自由である。そのため住民としての義務を果たしているという実感は薄く、「やらなくてはならないからやる」という感覚ではなく、「やりたいからやる」という感覚に基づいている。イベント参加者が持つ集団への帰属意識は、義務感や使命感によって支えられていたものではなく、楽しみを感じることに由来する集団への愛着や欲求によって支えられたものである。そのため個人の趣味趣向の影響を大きく受けるようになり、集団を形成するメンバーが限定されるようになったのである。

ただし、現在では義務としてではなく単純に楽しいから祭りに参加している人がいるように、祭りとイベントの境界は曖昧になっている。けれども、本質的には両者の間にこれまで述べたように違いがあるのだと思う。

6-2.現代における地域コミュニティ

現代において、地域住民が当たり前のようにまとまることはめったにみられなくなった。そうってしまった理由として考えられるのは社会構造の変化である。現代は伝統的農村社会のように、地域のなかだけで生活が成り立っているわけではない。また、農民は農民同士、商売人は商売人同士集まって暮らしているというわけでもない。実に多種多様な人が隣接しあって暮らすようになったのである。30代の若い夫婦に子どもが一人いる会社勤めの家庭の隣が、自営業の高齢者家庭ということもありえる。それは鷹栖だけに限らずどこでもそうなのだが、異なる性質や特性を持った人々が集合し、形だけの地域というものの構成しているのである。

このように、現代は地域に暮らしている人の生活の仕方や価値観が多様化し、個別化した。だから、だれもが共通して「これをすれば鷹栖の住民だといえる」とか、「こうなったら地域の一員として他の住民と同化できたといえる」というものが明確に提示できなくなったのである。それはつまり、地域社会のなかでその人が果たすべき役割や義務が消滅し、何に価値を見出して何を選びとるかが自由に選択できる社会になったといえるだろう。だから人々は、対話を通し人為的に「○○な関係」というものをつくり、その集合体としてコミュニティを形成していったのである。その際人々のなかには「その集団の一員として、自分も○○したい」という欲求があり、それが満たせる集団へ帰属するようになった。つまり現代の地域コミュニティとは、そこに参加することに人々がある種の憧れを抱いている集団で、その目的を果たすために形成された目的型コミュニティといえるかもしれない。特に鷹栖では「自分もそこに入って楽しみたい」と思える集団が選ばれる傾向が強いように感じた。そのためスポーツやアウトドアなど、娯楽的要素の高い活動を中心にしたコミュニティがつくられているようであった。地域全体としてオープンな雰囲気があるのもイベントがたくさんあるのも、まさしく近隣住民との「○○な関係」をつくりやすい地域にしようという想いのあらわれではないだろうか。このような、人々の傾向に合わせて新しいコミュニティをつくっていこうという動きが一部の住民のあいだでみられる。一人でも多くの人に参加してもらえるようにポスターで呼び掛けを行ったり、祭りの参加に関する規制を緩和したりもしている。こうしてもっと多くの住民が、互いに触れ合う機会を増やしていこうとしているのである。未だその効果が十分に発揮されているとはいえないが、イベントなどの集まりをきっかけに、住民同士の日常的な関わり合いは確かに生まれている。それを重ねることで、いずれは「自分は鷹栖の人間だ」「第二の故郷は鷹栖だ」といえるようになってもらい、限られた人だけではなく地域住民全体が関わるかつてのような地域コミュニティの形を取り戻そうという動きが出始めたというのは、新しい傾向といえるだろう。

6-3.おわりに

私自身も山間の小さな村の出身であるため、近所の人同士の仲が良く、住民が一体感を持っているということは、私にとっては当たり前の経験であった。しかし、現代社会の中ではむしろそれは珍しいものである。私が鷹栖という地域で驚いたのは、住民の方々がみな温かかったことである。「暑い中大変やね。家で休んでいきなよ」と声をかけていただいたり、突然おじやましたにも関わらず祭りに参加させていただいたり、泊めていただいたりもした。こういった住民の方々の、他人に対する気遣いやおおらかな雰囲気であててくれる姿勢に、古くからの、住民同士の深いつながりを感じることができた。

現在鷹栖もどんどん外部から新住民がやってきて、今までのようなまとまりを維持してくということとは、なかなか難しいかもしれない。しかし、地域の方々に協力をいただき、鷹栖の住民になった気分て調査を進めていく中で、いつまでもこういう雰囲気が残っていてほしい、残していかなければならないという個人的な感想を持った。この報告書を書こうと思ったのは、そのために少しでも役に立つことができたらと考えたからである。事実にそぐわない記述などもあるかもしれないが、一つの資料として今後の参考にしていただけたら幸いである。末筆ながら、鷹栖地区の今後のますますの発展を心よりお祈りし、お礼の言葉とさせていただきます。

参考文献・ホームページ

- 鷹栖村史編纂委員会（編） 2008 『鷹栖の歴史 戦後 60 年の歩み』
鷹栖自治振興会
- 林宏（著） 2005 『鷹栖古老聴書』 鷹栖自治振興会
- 金田章裕／藤井正（編） 2004 『散村・小都市群地域の動態と構造』
京都大学学術出版
- 祖父江孝男／米山俊直／野口武徳（編） 1987 『改訂文化人類学事典』
株式会社ぎょうせい
- 日本文化人類学会（編） 2009 『文化人類学事典』 丸善株式会社
- 砺波市ホームページ <http://www.city.tonami.toyama.jp/>

第7章 観光イベントに対する市民と行政の認識 —チューリップフェアの事例から

川端 勇生

1. はじめに

チューリップフェアは 500 品種 100 万本のチューリップが展示され、期間中は人口約 5 万人の砺波市に約 30 万人の観光客がやってくる。規模としては約 25 万人の観光客を集める越中おわら風の盆と並び、富山県を中心となる観光行事である。フェアでは、チューリップの展示（写真 1 参照）が主であるが、チューリップの販売、砺波散居村ミュージアムと連携した砺波散居村の紹介、地元高校吹奏楽部の演奏などの催し物、砺波の伝統芸能の子ども出町歌舞伎などが行われ、砺波を紹介する場として位置づけられている。開催場所は砺波チューリップ公園であり、今年は 4 月 22 日から 5 月 5 日の間に開かれた。毎年 2 週間ほどの期間で行われる。

私は、この砺波市が行う大規模なチューリップ観光のあり方について、行政と市民の双方に、フェアに対する意識についての聞き取り調査を行った。下ではその報告に、文化人類学的考察を含め述べたいと思う。



写真 1. チューリップフェアの会場

2. 概要

2-1. 砺波におけるチューリップの歴史

チューリップが日本に初めてやってきたのは 1863 年である。その後、関東で栽培を試まれたが、失敗に終わっている。しかし、1919 年頃日本海側、新潟でチューリップの栽培が成功した。その頃、砺波でも写真 2 のように球根栽培が始まっている。

砺波で先覚者といわれているのは水野豊造氏（写真 3 参照）である。彼は稲作の前後で何か作れないか、と考えチューリップの栽培を取り入れた。砺波の湿度、気温なども適していたことから、植え込んだ球根の大きさが購入した球根より優れていることを発見し、チューリップの栽培に成功した。その後、球根組合が誕生し生

産数は膨大に増え、1940年にはアメリカなど世界中にチューリップを輸出するようになる。直後の太平洋戦争によりチューリップの生産はストップするが、戦争終結から3年後の1948年には輸出が再開され、1964には2000万球の輸出に成功し、砺波は現在までに日本屈指のチューリップ産地として知られるようになった。

2-2. チューリップフェアの歴史

チューリップフェアは1952年に第一回が開催された。20万本のチューリップが展示されたというが、現在のような整備された展示というより、園芸分場としての展示であった。その後、テレビで取り上げられるなどして、第21回（1972年）には近年に匹敵する30万人の入場者数を突破した。同年にはチューリップタワーが完成し、展示場の面積の拡大も進み現在に至る。

フェアでは毎年様々なテーマがあり、フェアでの結婚式や、駐日オランダ大使の開会など、年により多少のイベントの変化がみられる。

3. 観光客の語り

2010年のチューリップフェアは、冬から春にかけての気温が例年より低かったことにより、初めの4日間程はチューリップがあまり咲いていなかった。過去にもこのような年はあったという。フェアの期間中の客層を見てみると、お年寄り中心の団体や、中高生の団体、家族連れで来た人が多くを占めるという印象である。海外から来る観光客では主に台湾、韓国、中国などが多い。海外や日本のツアー客の多くは立山や黒部などの他の観光地とセットとして回ってくるのがほとんどである。

金沢から車で来た40代女性は「せっかく来たのにチューリップが咲いてなくて残念」と語っていた。こういった話は初めの4日間に調査した時に多くの人から聞かれた。友達と来たという60代女性は、「毎年来る。チューリップの数とか種類が多いので見ていて楽しい」という。やはり、500品種100万本のチューリップが展示されるフェアではチューリップの数や種類に魅力を感じる人は多かった。家族で来た30代女性は「子どもが楽しめるのでいい。けど、人多すぎるのが不満」で、ゆっくりと楽しみたいという。人が多いことへの不満は比較的よく聞かれた。また、観光用に整備されたチューリップよりも、チューリップ畑が見たいと話す人もいた。県外から来た人に調査すると砺波市のことはチューリップしか知らないという人が多く、フェアを見たらすぐに帰る、という人も多かった。砺波市はチューリップのイメージが強く、日帰りの観光客が多いとわかる。

4. 行政の考えるチューリップフェア

砺波市でチューリップフェア運営の中心となる施設が、チューリップ四季彩館で

ある。この施設ではチューリップの展示だけでなく、チューリップに関する様々な情報を紹介している。今回はチューリップ四季彩館と砺波市役所の観光課で話を聞いた。

4-1 観光戦略のなかのチューリップフェア

担当者にチューリップフェアの観光戦略を聞いてみたところ、チューリップフェアには県外や外国の観光客も多いという理由から「富山の他の観光地（立山、黒部、五箇山）との連携も考えなくてはならない」ということであった。観光客の大半はツアー客のため、連携はたいへん重要なのだという。また、「観光としては日帰りで帰ってしまう県外の方が多いため、日をまたぐようにフェアだけで終わらない観光を目指していきたい」というが、チューリップフェアに日帰りの観光客が多いことは、すでにみた通りである。宿泊客の増加は、砺波市の商業的発展につながるため、この上なく重要なのだ。砺波市についてはチューリップしか知らないという人が多いが、そうした現状を変えるためにチューリップフェアでも「夜高祭りや他の花祭りなどの広報を行い、観光客に他の行事のことも知ってもらいたい」という。

4-2 市民に対しての語り

担当者から話を聞いて驚いたことは、観光客についてよりも砺波市民についての意見が多かったことだ。「花の豊かさ、砺波市にはこのようなイベントがあるということをまず、市民に知ってもらいたい。そのため一番にフェアに来てほしいのは市民自身」また「チューリップをより身近なものに感じてほしい、自主的な参加によりチューリップフェアに来た観光客をもてなす心構えを市民にはもってほしい」という意見が聞かれた。砺波市には花による街づくりの構想（花を通して心を豊かにし、また、もっと花を身近に捉えてほしいという考え）があり、市民にフェアの積極的参加を唱えている。そのため、広報として各家庭に2枚ずつフェアの無料券を配布、小中学校の生徒へのフェアのボランティア活動の促進や、写真2のような



写真2. タピ・ドゥ・フルー

展示用の「タピ・ドゥ・フルー」と呼ばれるチューリップの切り絵の募集など行っている。これらのことから市民に対す「フェアに対する気持ちをもってほしい」という考えがわかる。また、「おもてなしの精神」というのは、市全体が観光客を迎えるという心構えを持つために、市民が自主的に参加加することを意味する。

5. 市民にとってのチューリップフェア

5-1. チューリップフェアに行く頻度

まずは、聞き取り調査で得られたフェアに行く頻度を紹介する。聞き取り調査は主にチューリップ公園と駅周辺の住宅訪問して行った。調査は約 50 軒行い、フェアに行く頻度を簡単にグラフ化した。図 1 に示したとおり、多くが 2、3 年に 1 回、毎年行く人は約 3 割ほどである。ほとんど行かないという人は少なかった。子どもがいる 40 代女性は「昔は子どものためによく行っていた。子どもが中学に入ってから、夫婦で数年に一度行くぐらい」と語ったが、他にも子どものために行くという家庭はとても多かった。フェアには、チューリップタワーやチューリップソフトなど、子どもが楽しめる工夫もある。また、友達や親戚が砺波に来た時に一緒に出かける人も多い。その年に行かない市民の人たちは無料券を知り合いの人に渡すという。

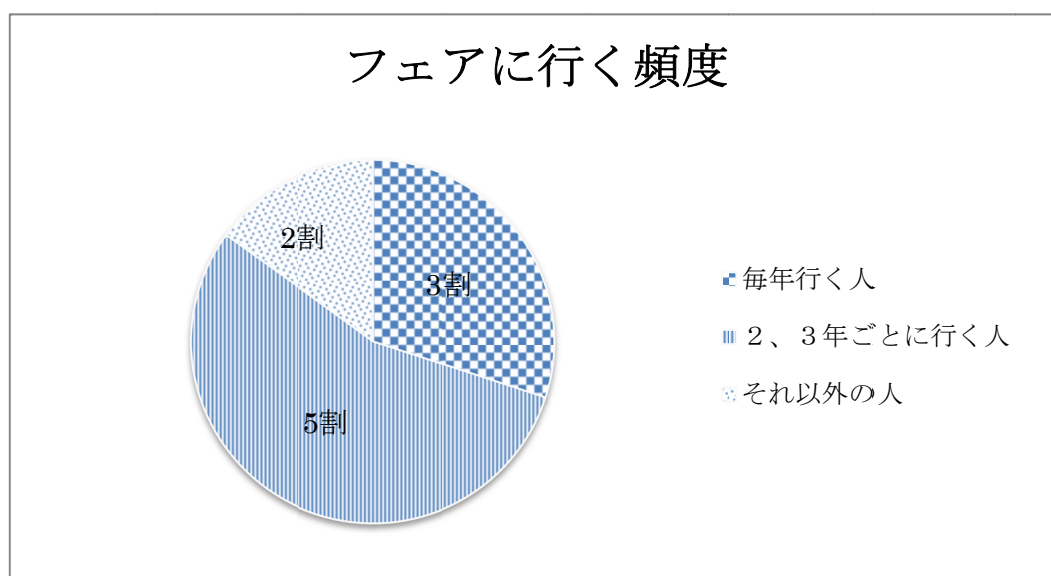


図 1. チューリップフェアに行く頻度を表したグラフ

5-2. フェアについての語り

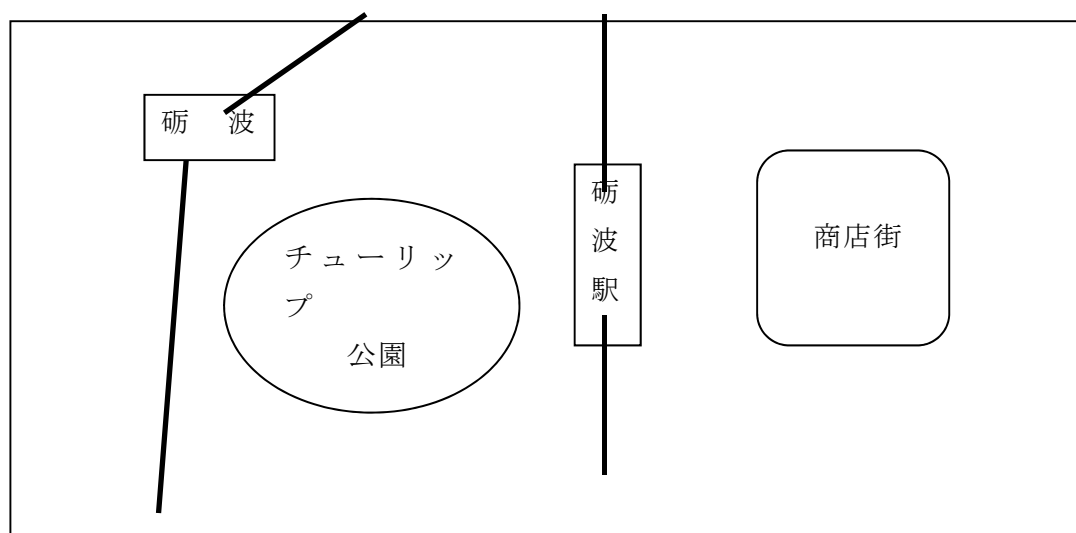
次に、フェアに対する住民の語りについてまとめる。毎年フェアに行くという 30 代女性は「多くの人に砺波に来てほしいし、これだけの人が来ることを誇りに思う。県外に出張した時に、砺波市出身と言うと、チューリップフェアのことを知っていてうれしかった」と語ったが、砺波のことが好きだという気持ちが伝わってきた。やはり誇りに思う、うれしいという語りは、他にもとても多く聞かれた。しかし、なかには「予定を空けてまでいかない、無料券があるから行く」という人もいて、無料券が配られないなら行かないという声も多く聞かれた。また、チューリップに

対してどう思うか尋ねたところ、特に愛着などないという表現が目立った。もちろんフェアやチューリップに愛着のある人はいるが、特に関心のない人もいるとわかる。また、フェアに5年行っていないという50代男性は「フェアの入場料(大人1000円・小中学生300円)が高すぎる。特設駐車場から公園までの距離が遠いので、県外から来る人に申し訳ない」と不満をもらしていた。このように入場料が高いという意見は多い。市民であれば無料のはずの入場料の高さを不満に思うのは、観光客の立場を考えての意見だと思われる。

5-3. 商店街とフェア

フェアの商業的効果を調査するために、砺波の中心地、砺波駅周辺の商店街での聞き取り調査を行った。結論からいうと、商店街で商売をする人たちからは行政に対する批判が多かった。つまり、観光客が商店街まで足を運ばず、帰ってしまう人が多いという批判である。これには地理的な要因がある。図2から分かるように、駅の西側に広がる商店街は、駅の東側のチューリップ公園とは反対に位置する。観光客が高速道路、電車を利用してチューリップフェアへ行くには、商店街を通らなくても行けてしまうのである。このため、観光客はわざわざ駅の「向こう側」商店街まで行かないのである。

つまり、チューリップフェアは農村部での開催であり、市街地の活性化に結びつきにくいといえる。商店街の会議の場ではこのことについて昔から話し合っており、行政にも対策を要望している。



5-4. 宿泊施設に関わる人々の語り

駅周辺の宿泊施設のフロント業務の女性に話を聞いた。その女性(60代)は、「昔の方がフェア期間中の宿泊数は多く、現在は低迷している」と話したが、これには、JR、高速道路などの開通がされたので簡単に日帰りできる影響が大きく響いている

という。さらに「今後、日帰りの方が増える可能性があるので新幹線の開通なども恐怖。」と語っていただいた。昔は平日でも満室状態が続いており、昔と比べフェア期間中の宿泊数が半減したという。宿泊施設では多く情報が得られなかったので、団体の客を多く獲得している宿泊施設もあるかも知れない。ただ、昔と比べるとこの宿泊施設も人数は減っていると考えられる。

6. チューリップフェアに携わっている人々の語り

6-1. 四季彩館が公募しているボランティアの人たち

四季彩館では、市民を対象に、チューリップ公園の整備やフェアの手伝いのボランティアを公募している。ボランティアは週 2 回ほどチューリップフェアの掃除、草刈りなどをし、フェアが近くなるとチューリップの展示を手伝ったりするそう。花の手入れのボランティアを見学すると 15 人ほど集まりついていて、比較的年配の方が多かった。多くが砺波市在住の方だったが中には氷見から来る人もいた。ボランティアをする理由を調査したところ、「友達がしていたから」「チューリップが好きだから」「小さいころからフェアをみて興味がわいた」など、聞くことができた。また、頻繁に参加するという 50 代女性は「新しい繋がりができることがいい。フェアに自分の植えたチューリップが展示されることが一番うれしい」と語ってくれた。ここでは花やフェアに興味がある人達が集まり、会話する場にもなっている。

6-2. コンクールに出品する人

フェアではチューリップ花壇のコンクールが行われていたが（写真 3 参照）、そのコンクールに参加している男性（50 代）に話を聞いた。その男性がコンクールに参加したきっかけは定年退職し、市がチューリップの講座を開いていることを知り、何気なく始めたという。コンクールはフェアにピークをもってくるため半年前から準備を始め、ほぼ毎日手入れをする時期もあるという。「手を抜く人たちもいるが、出展する身として、フェアで自分の花壇を多くの人に見てもらい、多くの人が砺波に興味をもってほしい」自分の生活の一部になっている様子がうかがえた。



写真 3. コンクールの出展者

7. 考察（砺波におけるチューリップの文化）

ここまでチューリップフェアの現状について、主に市民の考えと行政の考えを紹介してきた。調査で分かったことは次のことである。すなわち、チューリップフェアに対する行政と市民の考えを比較したときに浮かび上がる、住民にチューリップへの関心を持ってほしいと願う行政側と、比較的フェアに関心のない住民との間にある、ズレである。ここではチューリップフェアへの意識のズレを、『文化』としてのチューリップ」を考えてみる。「チューリップ文化」とは何かをいうのは難しいが、ここでは少し大雑把に「チューリップに関わる自主的な行動」としておこう。

7-1 チューリップ音頭

砺波でチューリップを生産されるようになった頃から、「チューリップの文化」として伝統的に行われていることがあるのか。住民に聞き取り調査をしたところ、「得にない」との答えが多く、多くの家庭で返ってきた。しかし、数少ないとはいえ「チューリップ音頭」という回答が出てきた。「チューリップ音頭」とは現在もチューリップフェアで行われている、チューリップの採取をイメージした簡単な踊りである。第5回頃からフェアで踊られるようになり、現在では100人以上の人が踊る、フェア中の大規模なイベントになった。各町の婦人会が主体的に活動し女性が主に踊るが、近年では婦人会が消滅する町もあり参加人数が減っているという。また、フェアの期間のみ踊り、音頭の練習も簡単な動作のため多くないという。

昔、踊っていた人によると、多くの人は観光地として多くの人に砺波を知ってもらいたいという気持ちで踊っていたという。しかし、中には婦人会としてしょうがなく踊っていたという人もいた。チューリップ音頭がフェアのPRとして行政の支援で作られたという成立の事情と、過去に踊っていた人々の話から、チューリップ音頭が観光目的であり、ここで言う『文化』には該当しないと判断できる。

7-2 砺波夜高祭との比較

次にフェアと砺波の夜高と比較して考える。第4章で萱岡は、夜高祭の魅力・需要として以下の6つを挙げている。この6つの魅力があることで、より自主的な夜高という文化が存在する。

- ① 人とのつながりが新しく「生まれる」
- ② 地縁的繋がり「強化」
- ③ 作業自体の面白さ・・・夜高は、制作作業が純粋に「面白い」
- ④ 非日常性・・・引き回し、突き合わせ、盛り上がり、酒宴
- ⑤ 表現性、創造性・・・作り直すことで、「次は何を作ろう」、「他の町は今年ど

うかな」といった楽しみが生じる

⑥ 見て喜んでももらえる・・・町の人間、とくに「子ども」を喜ばせる

まず、チューリップにより創造される文化としては、①人のつながりが新しく「生まれる」ことは可能であると思われる。例えば、チューリップ音頭であったり、自分の育てたチューリップを見せあう場では、同じ趣向の人たちが集まり、交流することが予想できる。ただ、②地縁的繋がり「強化」という部分では、砺波市の中の活動となり、更に細かい地域性は難しいかもしれない。それに比べ、夜高は町ごとに独自の夜高を出すので、町ごとのより狭い、より濃い地縁的つながりの強化ができる。③作業自体の面白さ、⑤表現性、創造性は、チューリップを栽培する楽しみとしてはもちろん存在するが、「花」という性格上、ゼロから作り様々な装飾ができる夜高と比べると多少限定されてしまうかもしれない。④非日常性については、引き回しや突き合わせ時の盛り上がり、いわゆる「どんちゃん騒ぎ」は祭独特のものでありチューリップフェアには希薄といえる。⑥見て喜んでももらえるということについては、もう少し具体的に考えてみる必要があると思うので、事項で別個に考察する。

7-3 チューリップを「つくり」「見せる」ということ

長年チューリップを栽培している男性から、市民とチューリップの関わりについて聞いた。その男性によると「チューリップは商業目的で砺波に入ってきたものであり、市民の生活に直接的には関わらない」「夜高などの祭りとは性質が異なるのではないか」という。つまり、チューリップは水野豊造氏が稲作の前後で何か作れないかと始めた、輸出産業にすぎないという認識である。では、チューリップは本当に、「商品」だからという理由で市民との関わりが比較的薄いのだろうか。

ここで注目すべきは、市民への聞き取り調査の際にチューリップを植えている家庭に話を伺ったところ、「フェアを見に来る観光客に見てほしい」という意見や、「砺波市の花なので植えている」という話が多かったことだ。このことから、チューリップは「単なる商品」ではなく、「見せるもの」として意識されていると分かる。ただし、傾向としては、栽培の趣味というよりは、砺波市の外部の人に見てもらうために植えているというのが多数と考えられる。市民との関わりが薄いというよりも、チューリップが花のひとつではなく「砺波市の象徴」として意識されるあまり、趣味としてのチューリップ栽培が特別に発達してこなかったということかもしれない。

くわえて、チューリップフェアは、ホストとゲストの区分がとても難しい。なぜなら、チューリップフェアの展示用チューリップの植え付けの大半は、業者に委託されているからである。つまり、住民がチューリップをフェアで「見せる」機会はわずかである。また、一般的に観光イベントでは住民もホストとして、ゲストを迎

えるという形がある。しかし、チューリップフェアは市民に入場料無料の券を配るなど、住民もゲストの一面をもつ。したがって、住民はホストとゲストの両面性をあわせもつといえる。このため「見せる」ことが主体の夜高と比較して、住民は自らをホストとして意識しにくい。つまり、市民が主体的に活動する場が少ないということも、チューリップフェアにおいて、住民の自主的参加が難しい原因なのかもしれない。

8. おわりに

最後に感想を書き記したい。

行政の担当者が「チューリップをより身近なものに感じてほしい、自主的な参加によりチューリップフェアに来た観光客をもてなす心構えを、市民にはもってほしい」と述べていたように、行政側は市民のフェアへの積極的な関わりを求めている。しかし、住民の中には「予定を空けてまでは、フェアにはいかない」、「無料券があるから行く」と述べる、フェアに無関心な人々がいることも事実である。また、チューリップの管区資源化が主に農村地帯の商品を扱ったものであり、商店街で商業を営む人々に対する恩恵が少ないことも、すでにみた。すなわち、行政と住民の考えの間にズレが生じているのである。

このズレは、チューリップが文化として発展してきたかが関連している。春の砺波ではチューリップをあちこちで見ることができる。チューリップを植えている家庭の人がチューリップを“砺波の象徴”と意識していることから、観光化に伴い、趣味として住民の間でチューリップの栽培が特別に発達してこなかったことも考えられる。これらのことが、チューリップに関心のない市民が多数いる原因と考えられる。

行政は市民に対するチューリップ関連の多くの働きかけを行っている。先に述べた、小中学校でのチューリップのボランティア、タピ・ドゥ・フルーの募集や、そして何といても特徴的な、フェアでの市民に対する入場料無料措置である。これらの取り組みはそれまで直接に花に関わりを持たなかった住民に対し、関わる機会を与えていると思われる。

「市民に自主的にフェアに関わってほしい」という語りが行政から聞けたが、仮にフェアのチューリップの多くを業者でなく市民に委託するようにすれば、市民がフェアをより身近な存在として考えるきっかけとなるかもしれない。なぜならば、フェアで自ら育てたチューリップを「見せる」とができる環境があれば、ホストとしての自覚が産まれると考えられるからだ。住民がホストとしての自覚をもつことになれば、行政が求めている「おもてなし精神」も産まれる可能性がある。

たしかに、現時点で興味のない住民が多いので、募集しても人が集まらないかもしれない。また、近年の地球温暖化でチューリップが咲く時期が遅くれている中、

業者に頼むほうが安定してチューリップを入手することができるという事情もある。しかし、毎年少しずつでも住民がチューリップを「見せる」機会を多くしてほしいと思う。無関心な人が多い一方で、行政の無料券配布などの施行により、チューリップに関心をもつようになった住民がいるのも事実だからである。「観光客に見て欲しい」とうれしそうに語ってくれた、家庭でチューリップを栽培する人々の様子を見た私には、それも不可能な道ではないと思われるのである。

参考文献

HP「砺波市役所」 <http://www.city.tonami.toyama.jp/>

東潔 1946 「砺波チューリップ成功の秘密」 分園社

アンナパヴォード 2001 「チューリップ ヨーロッパを狂わせた花の歴史」
大修館書店

第8章 砺波散居村地域の屋敷林の現況

平石 健太

1.はじめに

砺波市を流れる庄川流域に広がる砺波平野には、写真 1.のような散居村地帯が広がっている。散居村とは、耕地や平野一面に住居が散らばって点在する集落形態であり、島根県の簸川平野や岩手県の胆沢の扇状地、静岡県の大井川の扇状地、北海道の十勝平野など全国で見られる。特に、砺波平野の散居村地帯の広さは約 220 平方キロメートル、住居は約 7000 戸で日本最大級とされている。そして、各家は「カイニョ」と呼ばれる屋敷林に囲まれていて、田植え後の景観は、さながら田と田の間に浮かぶ島のようなのだという。



写真 1. 散居村地域遠景

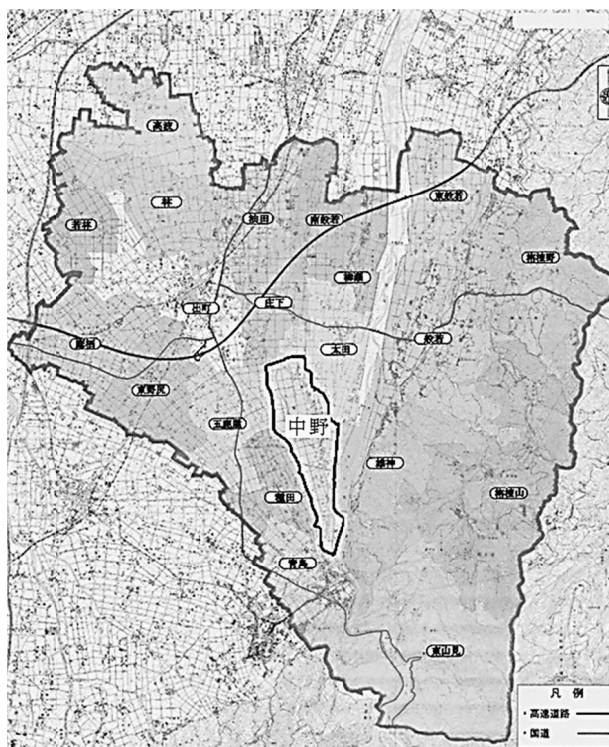
このような景観が成立したのは江戸時代の初めのころと言われていて、その時代からこの地域の人々はカイニョとともに生活してきた。そのため、各家にはカイニョを利用した自給自足の生活のための工夫が多く見られた。そんな地域だからこそ、「タカ（＝土地）は売っても、カイニョは売るな」という古い言葉がある。

しかし、詳しくは後述するが、便利な道具の普及による物質的に豊かな生活が広まったことによってカイニョを手放す家が増えた。また、少子高齢化の問題も、カ

この報告では、散居村地域の一つである砺波市の中野という地区を取り上げて、この地域に住む人々の生活の中で「カイニョ」が生活の中でどのような役割を果たしてきたのかについて文献や聞き取り調査をもとに紹介し、そのうえで、現在の住民の生活と「カイニョ」の関わりや「カイニョ」に対する住民の意識について聞き取りや観察の結果をもとに記述する。

2-1.地理・人口

中野の世帯数は平成 22 年 9 月 30 日現在では 472 世帯、人口は男性が 835 人で女性が 913 人の計 1743 人である。ここ数年の間に団地が設置され、世帯数は増加傾向にあるが、人口はほぼ横ばいである。



(<http://www.city.tonami.toyama.jp/map/chiku.pdf> をもとに作成)

2-2.中野を調査地にした理由

中野地区は上中野と中野にほぼ中央で南北に分かれていて、この調査ではおもに中野での調査をおこなった。中野には約 270 の世帯があり、そのうちおよそ半数にあたる約 130 の世帯が現在でもカイニョを所有している。この地区を調査地にしたのは、中野ではカイニョを所有している世帯と所有していない世帯が半々くらいであり、カイニョを所有している世帯と現在は所有していない世帯との両者の意識の違いを比較して調査しやすいと考えたためである。また、現在になって、団地が整備され新しく移動してきた世帯数が増えているとはいえ、それでも、昔から住んでいる住民の割合が 8 割以上と大きいためでもある。

3.カイニョの概要

3-1.カイニョの語源・成り立ち

屋敷林のことをこの地域ではカイニョと呼んでいる。江戸時代の文献では、住居と田畑の境界に屋敷林があることから「垣^{かい}根^ね」という言葉が使われている。また、垣のように饒^{めづ}らせた樹木ということで「垣饒^{かきによ}」と漢字で書く。カイニョとは、これらの言葉がなまったものと考えられている¹。



写真 2. カイニョ

砺波平野に見られる屋敷林の成立ははっきりとしていないが、平野を開拓するときに、原生林を残したという説が有力である。カイニョの主な役割の一つは防風林である。砺波平野は三方を山に囲まれていて、1 年を通じて南西からの風が吹く。4

¹ 砺波平野の屋敷林—散居に暮らした人々の自然との共生の証— 4 ページ

月初旬に八乙女山からの吹き下ろしである「井波風」と呼ばれる強い南風や、雪が多いため冬に吹雪から家を守るためである。また、暑い日の続く夏には、日除けとしての役割も持っている。そのため、カイニョは砺波平野で生活するには欠かせないものであった。また、江戸時代に加賀藩は、「七木^{しちぼく}の制^{せい}」という法律を作った。そして、樹木を無断で伐採することを禁じ、保護するように命じた。この法律も現在までカイニョが大切にされてきた理由の一つであるだろう。

3-2.木々の種類とその配置

図 2 はこの地域の典型的な家屋とカイニョの配置である。ここからは、風が吹き込んでくる南と西側に杉やケヤキなどの背の高い木を植えるという配置が良く分かる。図 2 の杉やケヤキは一重だが、大きな屋敷となると二重、三重に配置される。北西側には、農具や日用品の材料となるだけでなく、水分を吸収する性質を持っている竹を配置することが多いが、これは、母屋の北西側にある台所の配置と関係している。竹には、屋敷内の湿気を吸収するはたらきがあるのである。家の正面である東側には、庭木として松を配置したり、実や花をつける栗や柿、梅や椿を配置したりすることが多い。また、木々の間には、オオバコやドクダミといった薬用植物や、フキやセリといった食用植物も植えられていた。

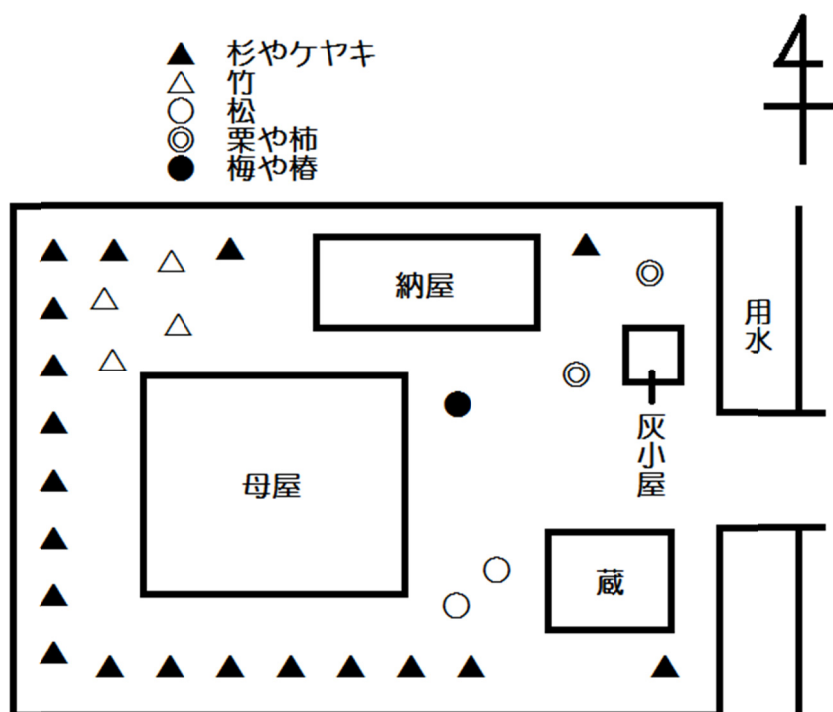


図 2.かつての住居の例（砺波郷土資料館編、1996.『砺波平野の屋敷林—散居に暮らした人々の自然と共生の証—』をもとに作成）

しかし、現在では図 2 のような住居形態はほとんど見られなくなった。竹や灰小屋（後述）はその役割が失われたことにより姿を消し、杉やケヤキの数も減った。聞き取り調査で得られた、木々の伐採の理由には、乗用車の普及による駐車スペースの確保や、台風などで木が折れた後、生育に時間がかかるということで新たな苗木を植えない、というものがあつた。

3-3. カイニョと庭木

富山県散村屋敷林研究会がおこなった、散村地域の住民を対象としておこなった意識調査によると、「屋敷林の景観面から見た印象は」という問いに、40 パーセント以上の人が「木のある庭」と回答している（富山県散村屋敷林研究会、1992）。この地域の人々にとって、カイニョと庭木とではどのような区別があるのだろうか。この地域の住む人々にとっても、大きなスギが 1 本でもあればいいのか、背の高い木ならばカイニョと呼べるのかなど、木の数や高さによる区別は曖昧である。だが、木の種類に関して、屋敷をぐるりと囲む杉やケヤキをカイニョとして、マツやモチの木、モミの木を庭木という、一定の区別の仕方があるようだ。しかし、先ほどの調査をまとめた報告書の中で「庭園風の屋敷林」という言葉が使われていることから、マツなどの種類の木々は、カイニョでもあり、庭木でもある存在といえそうだ。

4. カイニョと住民の関わり

それでは、中野地区の住民は、生活の中でカイニョとどのように関わってきたのか、語りをもとに、時代を追って見ていこう。

4-1. 過去のカイニョとの住民の関わり

4-1-1. カイニョの生活への利用

電気やガスがまだ普及していない時代、この地域では^{まめがら}豆殻や^{もみがら}籾殻に加え、カイニョのスンバ（＝杉の落ち葉）や枝も、日々の煮炊きや風呂の焚きつけや、冬場のいろりなどの燃料に利用されていた。ある 70 代の男性は「子どものころ夕飯の手伝いとして落ち葉拾いをしていた」と話していたが、スンバや枝も生活に欠かせないものであつた。また、スンバは藁などととともにニョー（＝藁や枝葉を積み重ねたもの）の状態にされて、アマ（屋根裏）に貯蔵し、十分に乾燥させてから使われていた。ニョーに関して 70 代の女性は「ニョーはお金の代わりとしても使っていた。だから、ニョーの数は家の格に関わる」と語っていた。また、杉の葉は燃やすと大量の灰が出るらしいのだが、この地域ではその灰を、雪を溶かすために利用したり肥料として畑に撒いたりしたので、各家に灰を貯蔵する灰小屋（もしくは灰納屋）があつた。

カイニヨは建築資材としても利用されていた。おもに自宅の改築・新築の際に利用するのだが、経済的理由からカイニヨを資材として売るということもあった。資材としてカイニヨを伐採した後には、その分を新たに植えなおすというのが普通だった。

4-1-2.遊び場としてのカイニヨ

カイニヨはまた、子どもの遊び場でもあった。男性を中心にもっとも多く聞かれたのが木登りで、どの年代の方からも聞くことができた。ある 60 代の男性は「高いところまで登りすぎて、親によく叱られた」と語った。その他には、虫取りやかくれんぼ、スンナメ（＝杉脂）をビー玉のようにして遊んだと話してくださった方が多かった。一方で、女の子は切り株を机に見立て、花や葉っぱでおままごとをして遊んでいたという。また、50 代の方を中心に、親に作ってもらうなどして鉄棒やブランコ、ターザンごっこ、ハンモックで昼寝、杉鉄砲・竹鉄砲など、カイニヨをさまざまな方法で利用し、多様な遊びをしたということが分かった。

4-1-3.カイニヨの衰退

カイニヨがある景観の変化についてお話を伺ってみると、「あまり、変わらない」と認識する人もいたが、多かったのは「(カイニヨは) だんだんと減少してきた」という語りだった。以下では、聞き取りの内容を整理したうえで、カイニヨの伐採が進んだ理由を時代順に並べて見る。

まず挙げられるのは、第二次大戦末期の杉の供出である²。戦争によって軍需用の木材が不足するようになったことで、1943 年（昭和 18 年）の春以降、直径一尺五寸（約 45 センチメートル）以上の杉が対象となり、写真 4.のように多くのカイニヨが伐採された。戦争の激化につれ、寺社の境内の杉や、直径が一回り小さい八寸（約 24 センチメートル）以上の杉も供出の対象となり、散居村の景観は一変したという。それまで、何十本ものカイニヨに囲まれた屋敷で生活してきたから、話者の多くは「カイニヨが無くなって、家を丸裸にされた」といった表現で当時のことを話してくれた。多くのカイニヨが伐採されたため、戦後、ほとんどの家では、新たに杉の植林をおこなったそう。現在この地域で見られるカイニヨの多くはこの時に植えられたものであるという。

²砺波平野の屋敷林—散居に暮らした人々の自然との共生の証— 6 ページ



写真 3. カイニョの供出の様子 （砺波郷土資料館編、1996. 『砺波平野の屋敷林—散居に暮らした人々の自然と共生の証—』6 ページより）

しかし、1962 年（昭和 37 年）から砺波ではじまった圃場整備（不整形な屋敷の整理やあぜに囲まれていた川の改修や農道の整備）の際に、カイニョが整地の邪魔とされたことや、用水のコンクリート舗装で根が枯れてきたなどとの理由でカイニョは再び伐採されていく。加えて、昭和 40 年代にはじまる電気やガスの普及により、スンバや枝を燃料として利用する機会が少なくなってきたため、カイニョの伐採がさらに進んだ。

そして、ごく最近の出来事であるためもっとも多く聞かれたのが、2004 年（平成 16 年）の台風の影響である。この台風では、1 年を通じて砺波平野で吹く南西方向の風とは逆の、北東方向から強風が吹きつけた。今までの風とは逆方向からの風であったため、根こそぎ倒れるカイニョも多くあり、木が住居に倒れてくるなどして被害が出たという家が少なかったという。この台風によって砺波平野全体でおよそ 20,000 本ものカイニョが倒れたという。ある女性によると「台風で木が倒れ、遠くに住む親戚が来た時（その親戚が家の場所がどこか）分からなかった」という。その親戚はカイニョを目印に家を探していたようで、カイニョが倒れ周辺の風景が一変していたことで分からなかったそうだ。この台風に関して「台風が来たとき（木が折れて被害が出たら）怖い」という語る人が多かった。また、何本ものカイニョが折れて、カイニョが少なくなったという実感を持つ人が増えたことも調査を通して分かった。

4-2.現在のカイニョとの住民の関わり

4-2-1.過去との比較

先述のとおり、電気やガスの普及によって、かつてのようにカイニョを生活へ利用とすることは少なくなった。今回の調査では、70代女性の「草もちを作る際の焚きつけに利用している」という語り以外には、スンバなどの生活への利用は聞くことができなかった。建築資材としての利用も、ある70代の男性が「外国から質の良い、安い資材が輸入されるようになり、利用することは無くなった」と話されたことから分かるように、ほとんど利用されていないようだ。しかし、カイニョは生活には利用されなくなっているが、聞き取り調査をしていると「○○さんのお宅のカイニョは立派だから、話を聞いてみられ」、「(台風で)○○さんとも何本か切ったみたい」といった語りがあり、現在でも人々はカイニョが話題の中心になるほどには何かしらの関心を持っているように思われる。

遊び場としては、ゲームの普及により子どもたちは外で遊ぶ機会が少なくなっているが、「今でも、木登りや虫取りをして(子どもたちは)遊んでいる」という話を聞くことができた。身近にある自然ということで、現在でも子どもたちの遊び場の一部であるようだ。

4-2-2.カイニョの手入れ

カイニョのスンバや枝は、毎日のように落ちるため、かつてのように燃料として利用しなくなった現代では、「掃除が大変」と思うようになったと、ほぼすべての方が語ってくれた。かつてであれば各家には焼却炉があり、自宅で焼却処分をおこなっていた。しかし1990年代にダイオキシンの問題が言われるようになると、ダイオキシンは焼却処分の際に発生するので、焼却炉を利用することが少なくなり、現在ではほとんどをゴミとして処分している。多くのカイニョを所有する家では1週間に30リットル用のゴミ袋5、6袋分になるという。

また、枝は伸びすぎると風に煽られ折れてしまうので、枝打ち(樹木の枝を切り落とすこと)をおこなう必要がある。かつてはおもに自分たちの手でおこなっていたものの、現在では小さいものを除いて、ほとんど業者に依頼するということが多い。枝打ちなどの手入れをおこなう頻度は毎年おこなうという人から、10年に1度という人、特に決めていないという人などさまざまな回答である。業者に依頼する際、市からの援助³があるが、それでも、数万円程度の費用がかかり、「手続きが面

³ 砺波市散居景観保全事業補助金交付要綱(2004年(平成16年)11月1日)によると、伐採にかかった費用の2分の1、もしくは15万円 のいずれかの低いほうの額を支給することが明示されている。ただし、前回の補助から5年以上が経過していることが条件。

倒」という理由で、利用しない人もいようである。ただ、70代の女性の「丁寧な手入れはカイニョも人も同じ」という語りがあったように、カイニョの手入れを一切おこなわないという回答は、今回の聞き取り調査の中では無かった。

4-2-3.カイニョの維持

中野の、およそ半数を占める、カイニョを所有している世帯に話を聞いてみると、「維持できる限りは維持したい」「(切ってしまうのは)さびしい気持ちがある」という回答だった。どのような理由で守っていきたいのか聞いてみると「先祖が遺してくれたもの、大切にしてきたものだから」という語りや「先祖代々のものだから、切ったら不幸になりそう」という語り、また「木を切るのは首を切るのと同じこと」ということを語られた。砺波市はカイニョの見られる散居景観の保存を目的として、「花と緑のまちづくり条例」や「散居景観を活かした地域づくり協定」を締結した。最近では国カイニョを維持していくつもりの世帯でも、ある50代の男性の「今後、カイニョの持っていた役割は失われていくだろう」という話があった一方、70代の男性の「実のなる木を植えれば、鳥が来て楽しい」という肯定的な語りを聞くことができた。多くの世帯でカイニョを維持していきたいという意向を持っていることが分かったが、「現在あるものを大事にしていく」という現状を維持していくという語りが多く、新たに植えるという人は少なかった。「成長に数十年必要で費用もかかるので、やはり面倒」といったことが理由としてあげられる。

4-2-4.カイニョの伐採

では、すでにカイニョを伐採してしまった世帯はどのように考えているのだろうか。まず、なぜ切ってしまったのですか、と聞いてみると「台風で木が折れて、家に倒れて来た。今後もこのようなことがあると怖いから」という語りや「住居を増改築する、新たに車庫を作る際にスペースが足りなかったから」という語り、また「維持費がかかるから」という語りだった。切ったことに対しては「時代の流れだから仕方がない」という語り「うっとうしいのが無くなった」という語り、また「頑丈な家が増えたので、無くても何とかなる」といった語りや「その時だけ後悔した、申し訳ないと思った」など、伐採を肯定する語りが多く聞かれた。ただ、少数だが「無いと思えばいい一方で、大事にしたほうがいい」(80代の女性)という意見もあった。



写真 4. カイニョ

5.まとめと考察

話者の親世代からカイニョの維持についてどのような会話があったかを聞いてみると、70代の男性から「親からはカイニョの枝打ちの方法など、手入れの話なら聞かされた」という語りはあったが、「カイニョを残してほしい」といった、維持についての会話は「ほとんどされなかった」という回答がもっとも多かった。これは、かつてであれば、カイニョは生活の一部であり、残していくことが当然という考えがあったということかもしれない。しかし、現在では、次の表に示すようにカイニョの持つ役割が失われつつあり、デメリットが目につくようになった。さらに、2004年（平成16年）の台風で木が倒れ住居に被害が出た。その結果人々の間ではカイニョが邪魔なもの、伐るのも仕方がない、という考えが、特に若い世代の人を中心に増えているようだ。時代の流れだとしてカイニョを切ってしまうのを、いちがいに悪とは言うことはできない。カイニョが無くなったとしても生活が不便になるということも無い。今後ますますカイニョの衰退は進んでいく要因はいくつもあるようだ。

表. カイニョの持つ役割の変化

	過去	現在
スンバ や枝	煮炊きや風呂焚き、いろりの 燃料として利用	電気やガスの普及により、 ゴミとして処理
枝打ち	おもに自分たちの手でおこな う	業者に依頼するため、 費用がかかる
日除け	夏の日差しを防ぎ 家を涼しく保つ	扇風機やクーラーなどがあり 必要なものとはいえない
風除け	防風林として機能していた	頑丈な住居が増えたため 必要無くなった
遊び場	子どもたちの遊びの中心だっ た	子どもたちの遊び場の一部

しかし、地域住民の間にカイニョを維持していきたいという意向があることは前述したとおりである。また、現在では地元の小学校でカイニョについて学ぶ機会があるようで、簡単な内容を勉強するそうだ。さらに、昔とは違い現在では、親から子へも、カイニョを残していったほしいという会話をしているという話があることも分かった。調査の中で、ある 50 代の男性も「(親は) カイニョを大切に手入れしているし、(親から) 残していったほしいとも言われた。防風林としての機能は失われてしまったが、今度は砺波の伝統として残していこうと思うようになった」と語ってくれた。このように、カイニョを次の世代に伝えていこうと取り組みも人々の間ではおこなわれている。

「丁寧な手入れはカイニョも人も同じ」という語りや「木を切るのは首を切ると同じこと」という語りからは、一部の人々にとって、カイニョがただのモノではないということがうかがえる。針供養や付喪神の例と同様に、カイニョにも、モノに人格や意思が重なるような意味が備わっているかのようである。また、「先祖が遺してくれたもの、大切にしてきたものだから」や「先祖代々のものだから」という語りに見出される、カイニョに先祖の霊を重ねるというアニミズム的な感受性は、カイニョが過去と現在をつないでいる存在であることがうかがえる。一方の行政は、カイニョのことを保存していくべき伝統的な景観としては考えているが、人々のこうした思いについてはあまり考えていないようである。市がおこなう景観保存の取り組みが思うように浸透しないのは、こうした住民の思いへの配慮が足りないからと考えることもできるのではないか。この地域の住民にとってカイニョは景観の一部、ただの防風林といったモノではなく、それを超えた特別な存在であると言える。だから、「その時だけ後悔した、申し訳ないと思った」という語りからも分かるよう

に、防風林としての機能が失われたとしても残していこうと思う人が多いのである。手入れや落ち葉の掃除といった不便さ以上の思いを、カイニョは人々に与えているのである。

参考文献

- 砺波郷土資料館編、1996.『砺波平野の屋敷林—散村に暮らした人々の自然との共生の証—』
- 新藤正夫、1988.「屋敷林に対する住民の意識調査」『砺波散村地域研究所研究紀要』第5号
- 富山県散村屋敷林研究会、1992.「富山平野の散村地域における屋敷林の現況と住民意識調査」『砺波散村地域研究所研究紀要』第9号

第9章 砺波散居村地域の食生活の変遷

柴草 朋美

1.はじめに

庄川流域に広がる扇状地である砺波平野には、豊富で良質の水が流れる。広大な水田が広がるなかに、散居村と呼ばれる村落形態が存在し、そのほとんどは農家である。散居村と呼ばれるこの風景は、水源が豊かで、どこでも容易に水を引くことができるために生まれたものである。また、このような村落形態は自分の家の周りに田をすることで、肥料運びや稲の管理がしやすいというメリットもある。

私がとりあげるのは、農業中心の砺波散居村の食文化についてである。これは、私自身が海の近くに住んでいることもあり、土地柄の違いから海と山の食文化にはどのような違いがあるのか関心をもったからである。調査は、散居村の形態が比較的維持されている中野地区を中心に行った。市役所の農業委員会事務局の資料によれば、中野は総面積が4.78平方キロメートル、うち耕作面積が292ヘクタールである。世帯数472のうち農家は兼業と専業を合わせると193世帯である（砺波市農業委員会、2010）。

この調査の目的は、砺波の人々の食生活の変遷について、散居村という村落形態とのかかわりから明らかにすることである。そのため、世代別に聞き取り調査をすることで、昔から現在に至る食生活の変遷について調べた。調査の過程で浮き彫りになったのは、時代の変化による食生活の変化である。自給自足の時代に限られた食材から生み出された独自の郷土料理は、いつしか家庭では作られなくなっていた。しかし、それは決して郷土料理が人々に食されていないことを意味しているわけではない。時代の変化は人々にどのような食の変化をもたらしたのだろうか。この報告では、中野で行った聞き取り調査で得られた資料を中心に、散居村地域における食生活の移り変わりを、戦前から現在にかけてまとめることにする。

2.砺波地方の郷土料理と成り立ち

砺波地方は、^{すいとうたんきく}水稲単作地帯が広がる散居村として有名である。また、冬場は雪に埋もれ、寒さも厳しく、農作物の生産も限られていた。このような環境下で、砺波の郷土料理は培われてきた。それらは、かつて飢えをしのぐための食事、神仏への祈りのための供え物、四季をめぐるための料理や親類縁者が集うときにふるまう料理などであった。ここからは、昔の郷土料理や、食生活の特徴について住民の語り

や文献をもとに紹介していく。

2-1.戦前から戦後の農家の食生活

砺波平野の生産物は、米が基幹作物で里芋が副産物その他季節野菜を栽培し生計を立てていた。戦前から戦後にかけて米の収量が少ないうえに、さらに大家族の家が多いなか、田畑産物の完全利用や一粒たりとも粗末にしない米の利用が徹底されていた。

(1) 米の利用

うるち米は以下のように分類されていた。

表 1.うるち米の分類

(富山県民生涯学習カレッジ砺波地区センター、2009『事例集 となみ野の食卓』に拠る)

一番米	最も上質な米（適正な水分、旨味、品種など）
二番米	くず米（一番米を除いた残りの中で質の良い米）
三番米	くず米（一番、二番米を除いた質の悪い米）
ミヨシ	不熟米、 ^{シイデ} 糲【もみ殻ばかりで実がない米】など殻ばかりで中身のない米
ゴバイ	はしかやもみ殻、土などの混じった米で、最も質の悪い米

戦前は報恩講^{ほうおんこう}や正月など、行事のあるときだけ一番米のご飯を食べていた。普段のご飯は二番米のご飯だけで炊いていた。1人当たり1日約2合で、一食は茶碗盛り1杯であった。重労働に耐えるご飯の量ではなく、舌触りの悪いご飯であった。さらに、ご飯の不足を補うために、三番米を粉（イリゴ）にし、ダゴ⁴に加工し毎食食べていたそうだ。ダゴは不味いので、美味しく食べるための工夫が多くあったようだ（富山県民生涯学習カレッジ砺波地区センター、2009）。

戦後は所得が増加したせいか、二番米を粉にひいて、だんごにしていた家庭もあった。だんごについては、ある70代の女性は「よく二番米を粉にひいて、だんごにして食べた」と語ってくれた。また、別の70代の女性は「米のくずでよくおはぎを作った。きなこは祖母が臼でひいてくれていた。それを（おはぎに）まぶして食べるとおいしい」と語った。60代男性は「昔はただ米（くず米）をごんだにしたりして、朝、昼、晩食べていた。もち米は高く売れるから、ただ米をよく使っていた」

⁴ 米や雑穀の粉を用いて作るだんごに対し、くず米に限って作られることから卑下してつけられた呼び名ではないかといわれている。

と話す。

米を使った加工品には以下のようなものがある。

よもぎもち（ヨモンダゴ）

草もちともいう。春の種まき盆などで、稲の苗が青々と生えてきますようにと願いをこめてつくる習慣があったようだ。よもぎだごをつくる家庭もあるが、よもぎもちの家も少なくない。60代女性は、「田植えのとき、田が青くなるようにと願って、よもぎもちを作った」と語る。

いもだご

里芋とご飯を混ぜ合わせた、だんごのようなものである。ご飯の上に里芋を入れて炊く。おはぎのようにつぶし、まるめていろりで焼く。70代の女性は、「学校から帰ってきておやつによく食べたよ。大家族だったから、そういうのは作りやすかった」と語ってくれた。

ごんだ

うるち米を混ぜた餅で、餅米を節約するために作る。ごんだは、うるち米が完全につぶれていないおはぎのような状態であり、もちともだごとも呼べず、だんごの逆のごんだになったという。

いもがいもち

秋のお彼岸の中日や稲の刈り上げが終わった時期に、いもがいもちを作る。いもがいもちとは、新しいうるち米ともち米を使って、今年も豊作でよかったという感謝の気持ちで作る（堀田、1989）。

（2）ヨゴシ

「ヨゴシ」とは、野菜をゆでて細かく切り、味噌で味付けして炒りつけた砺波地方独特の食べ物である。盛きりのご飯の上にこんもりとのせて食べる。「ヨゴシ」は収穫できるほとんどの野菜でつくる。主なものは、大根菜やにんじん葉、ふきたちなどの葉っぱ類の他に、なすび、いもじ（里芋の葉のことをいう）、ウドなどである。（堀田、1989）

（3）田畑産物の加工品

散居村である農家の冬の暮らしは非常に厳しく、道路は積雪で外出が困難になる

ことが少なくない。したがって、晩秋から早春までの約 4 カ月間の食料の確保は、大きな課題であった。長い間保存ができて食料として蓄えられる保存食は、そうした砺波地方の独特な食文化といえる。表 2 は、食品の保存についてまとめたものである。

表 2.主な保存方法と使われる野菜や山菜

(富山県民生涯学習カレッジ砺波地区センター、2009『事例集 となみ野の食卓』に拠る)

干す	ナスビ、里芋の茎や葉、大根（コンゴリ、ホンゴル）、ほうきんの実やしその実、よもぎなど
漬ける	大根、白菜、蕪 ^{カブ} 、たけのこ、ふき、ぜんまい、わらびなど（塩漬け、糖漬け、麴 ^{コウジ} 付け、味噌漬け、粕漬けなど）
（家の軒下や畑、床下の芋穴などに） 埋ける	大根、人参、ゴボウ、ねぎ、里芋、きゅうり、サツマイモなど

その他、聞き取り調査から得た保存食には、以下のようなものがあつた。

- ・たけのこの漬物（ゆでて塩漬けにして取り出し、おからでふたをするように漬けるという家庭もあつた）
- ・ヨシナ（カタハ）の漬物
- ・里芋の三杯酢漬け
- ・ラッキョウの酢漬け

保存食について調べたり、聞き取り調査を行っていくなかで気がついたのは、自家用として畑で栽培している野菜を保存食にする家庭がほとんどだということである。野菜の他にも、山菜を保存食として利用している家庭もあつた。その保存方法は家庭によって様々で、瓶に入れて塩漬けにしたり、ひらたけやまいたけを天日干しにしたりと、多種多様である。このように、各家庭にあつた保存食の作り方や特色といったものがあるように思える。70 代女性は「山菜は昔よく採りに行った。百姓は忙しくて、お昼の 2 時間が楽しみで、その時間によく山菜を採りに行ったわ」と語った。

（4）里芋の完全利用

砺波地方の農家では、どこの家庭でも米に続いて、里芋を多く栽培していた。里芋の種類としては、赤いも、八つ頭芋を栽培している家庭が多い。里芋 1 株は、頭（か

しら）芋、子芋、孫芋からなり、田楽（砺波地方では「レンガク」と呼ばれる）、いもだご、煮物にして食べられていた。葉は、干してヨゴシとして食され、茎は、皮をむき、干して白和えや味噌汁の具、かんぴょうの代わりにして食されていた。生の場合、酢ずいき（すずき）にして食べる。酢ずいきは、里芋のずいきを酢に漬けて炒り煮したものである。茎の保存方法として、「干す」ことが挙げられる。かつては、茎は皮をむいて藁に編み込んで干していた（写真 1）。現在は藁ではなく、ビニールひもを使っている家庭もある（写真 2）。



写真 1. 藁で編み込んである里芋の茎



写真 2. 干してある里芋の茎

（5）タンパク源となるもの

以前の農村の暮らしの特徴は、上述のような炭水化物中心の食生活であり、タンパク質は不足しがちであった。次に、伝統的な農村において、貴重なタンパク質がどのように摂取されていたかについて、説明する。

・大豆・・・田の全ての畦^{あぜ}に大豆や小豆が植えられており、自家用としては十分でまかなうことができた。その加工品として（2 年ねかせて 3 年目に食べる）一年分の味噌、煮豆、豆餅、煮物、呉汁^{ごじゅう}などが挙げられる。その他、油揚げ、おから、焼豆腐、生豆腐、などは豆腐屋で購入していた。（焼豆腐や生豆腐は祭り、報恩講など物事のあるときだけ）

・魚介類・・・海の魚は高価で贅沢な食べ物という意識が強かった。月に 2 回～3 回程度しか食べられず、特に刺し身は祭りや正月などの物事のあるときだけ食されていた。普段は、安価で日持ちのする干物と塩物が中心に食されていた。川の魚は、ドジョウ、フナ、ウナギ、アユなど多く捕れたが、宗教上食べない家も多かった。

⁵日本各地に伝わる郷土料理。大豆を水に浸しすり潰したペーストを呉といい、呉を味噌汁に入れたものを呉汁という。

それに、田んぼの肥やしとしてニシンの骨を利用していた。ニシンの身は昆布巻きとして多く食されていた。水田にはタニシがおり、食用として利用した（富山県民生涯学習カレッジ砺波地区センター、2009）。

（6）砺波地方にみられるその他の郷土料理

なすびとそうめんのおつけ

80 代女性は、「前の日に残ったものを今よりもよく食べていたよ。そうめんの残ったものを使って、そうめんとなすびのおつけをよく食べたわ。今はそんなふうには食べない」と語る。

なすびの辛子漬け

ほとんどの家庭が畑でなすびを栽培していた。それほど、夏の食材としては欠かせない野菜である。昔は、収穫時期になるとなすびを見ない日はない程、毎日のようになすびを使った料理が食卓に並んでいたという。80 代女性は、「昔は、なすびをよく食べたよ。なすびを使った料理が多く出た」と語る。

2-2.行事食

エベス（ユベシ、ユウベス）

寒天の煮こごりのことをいう。名前の由来は、石川県能登の輪島のユベシ（柚餅子）というお菓子に似ていることからだそう。エベスはその訛りであって、べっこうの色をしているため、ベッコーとも呼ばれている。

かぶら寿し

正月にはなくてはならぬ漬物である。暮れにたくさん漬け込んで、正月に口を開ける。魚とこうじとかぶらの味がなれ合って、おいしいので、古くからたくさん作られている。砺波地方では、かぶら寿しに使用する魚の種類が家庭によって違って、おもにぶりとさばの 2 種類がある。しかし、大半の家は「さば」であった。かぶら寿しは、お正月のおせち料理にはかかせない一品であり、家々によって使う具材や作り方が違うこともわかった。息子夫婦と暮らす 70 代女性は「かぶら寿しは大量に作る。さば 6 匹、かぶら大 10 個、桶を 4 つ使って作る」と語った。また、60 代男性は「正月に帰ってくる息子夫婦と孫に食べさせるために、800 個作る」と笑顔で話した。

だごの小豆汁

1 月 15 日の五月きつきの日には、朝飯に豊作を祈って、だごの小豆汁をつくる。五月は、

別名「百姓の正月」ともいい農家では大事な年中行事の日である。15日の朝には、カモボイ（鳥追い）というものが行われる。カモボイとは、子どもたちがまだ暗いうちに起こされて田んぼにくる害鳥を追うというもので、カモボイの歌もあるという。カモボイを終えて、家へ入ると囲炉裏には小豆雑煮（アズキゾーン）が煮てあり、家族そろって食べる。これが「だごの小豆汁」である。小豆汁の中へいろんな形の団子を入れる。細長いものは稲穂や俵、平たいものは田んぼを表す。農家である60代男性は「だごの小豆汁でなく、おもちを入れて小豆ぜんざいにして食べる。昔はだんごと小豆以外に大根と里芋を入れていた」と語った。別の60代男性は「作ったり、作らなかったりする。その年に覚えていたら作っとる」と話した。しかし、田畑を所有していない家庭に住む80代女性は「1月15日に小豆汁を食べる習慣はないわ」と語った。

いとこ煮

大根、にんじん、里芋などの野菜を^{さい}賽の目に切ったものに小豆を入れて煮たもの。20年前に中野に嫁いできた40代女性は「だんごと小豆と根菜類を味噌か醤油で味付けて煮ていた。でも、私がこっちにきて2回ほどしか食べてないわ」と話した。

笹餅

6月10日のヤスゴト（田祭り）やお盆の時に作られる。そのようなお盆の日など暑い時期にもちをかつ（もちをつく）と、もちに皮が張って固くなり、また、かびやすいので笹の葉で包む。日持ちがよく、おやつや来客のおみやげにする。70代女性は「昔は作っていたけど、今はもち屋さんに作ってもらっている。お墓にもってったり、お供えしたりしている」と話した。

2-3. 「タイセツナイ」という意識

これまで砺波の郷土料理とその成り立ちについて述べてきたが、米を使った加工品や里芋の完全利用に見られるように、食文化の特徴として「もったいない」という意識が顕著である。「もったいない」とは、砺波地方の方言では、「タイセツナイ」と言われる。中野の住民に「タイセツナイ」という言葉を知っているか、あるいは使っているのか聞いてみたところ、60代～70代の方々から「昭和の時代はタイセツナイという言葉を使っていた人がいた」という語りを聞くことができた。しかし、40代女性は「聞いたことがない」と答えた。「タイセツナイ」という言葉が昭和30年頃までは使われていたようだ。しかし、食材が簡単に手に入るようになり、「タイセツナイ」は使われなくなっていく。

2-4.聞き取り調査から得た昔の食生活の実態

聞き取り調査によると、中野は昭和 30 年（1955 年）に入って冷蔵庫が定着したといわれる。それまでは、昆布締めをたくさん作ったり、赤いもの酢ずいきを使ったり、そうめんを食べるなど、野菜の保存に工夫をしたり、乾物を使った保存食を中心とした食生活が特徴的である。また、不足しがちなタンパク質についても少ない食材から上手に摂取していた。さらに、昭和 40 年（1965 年）頃から、自家用車を持ち出す人が増えてきた。加えて、大型ショッピングセンターやスーパーマーケットの普及に伴い、これまで、食材を近所の商店や豆腐屋、鮮魚店から調達していた人々がスーパーを利用するようになった。60 代男性は「昔は、近くの魚屋とか商店に足を運んでいたが、昔の乾物しか置いてないから今はスーパーばかり行く」と語る。50 代女性は「昔は、近くの魚屋でお刺身を買ったりしていた」と語る。このことから、昭和 45 年（1970 年）頃までは、地区の鮮魚店や商店などで、副食となる食材を買っていたが、大半はスーパーで調達していたようだ。

3.現在の食生活

聞き取り調査や、昔の郷土料理を調べて行く中で、現在の食生活と昔の食生活はどのような相違があるのかについて興味を持った。そこで、中野を中心に、住民に聞き取り調査やアンケートに協力をしてもらい、そこからわかったことをまとめる。

3-1.食生活調査の結果

中野で調査したところ、ほとんどの世帯が農家で、田畑の両方を持っている方が多かった。田んぼは、業者に委託したり、近所の 2、3 世代で暮らす担い手のある家庭に請け負ってもらう家庭が多くみられた。畑は、ほとんどの家庭が自家生産、自家消費をしていた。

畑で作られている主な野菜は、なすび、きゅうり、大根、にんじん、ピーマン、里芋、じゃがいも、さつまいも、かぼちゃ、ねぎ、たまねぎ、とうもろこし、ほうれんそう、すいか、あま瓜、かた瓜、小豆、大豆、つる豆（千石豆、ふじ豆）、丹波の黒豆などである。

60 代女性は、「畑で採れる野菜は変わらないから、食べるものもそんなに昔と変わらない」と語った。畑で収穫された野菜を自家消費している家庭がほとんどだが、他の食材についてはスーパーで調達していた。ある家庭では、食材宅配サービスの「ヨシケイ」を利用している方もいた。自家消費の他に、スーパーや給食センターに野菜を出荷している家庭も多くみられた。屋敷林に囲まれた家庭では、屋敷まわりに柿の木やイチョウの木が植えられていたり、庭先にはふきやぜんまい、みつばなどが生えていたりして、それを調理することもある。2 世代、3 世代同居世帯では、

スーパーをほぼ毎日利用しているが、これは若い世代の方が仕事帰りなどにスーパーに寄る機会が多いからのようだ。自動車を保有する 70 代の高齢者世帯では、週に 2 回から 3 回程度、スーパーを利用するという人が多かった。しかし、自動車を保有しない高齢者世帯では、家族に週 2, 3 回スーパーに行ってもらい、食材を調達してきてもらうとの声もあった。中野にはスーパーがなく、鮮魚店が 1 件、商店が 1 件、製菓店が 1 件、コンビニエンスストアが 1 件などと、食材を調達するのに決して栄えているとは言えない。中野の住民は、スーパーでの買いものために、砺波市街地まで足を運ぶ。交通手段は車か、バスを利用している。

昔の食生活において欠かせなかった保存食に関しては、なすびや大根、里芋のくきを干して越冬食として作られる家庭がほとんどであった。しかし、60 代女性が「里芋も干すけど、（自分が）食べる分だけ。それに、若い人は食べんし、（彼らは）食べるものだとも思っていないわ」と話すように、世代間で保存食、さらには郷土料理を食べる頻度に差があるのかもしれない。次の表は、中野地区に住む 30 代から 60 代の主婦の方に 1 日の献立を聞いてもらったものである。

表 3.中野の住民の 1 日の献立

A さん（60 代）、農家、1 世代世帯（8 月某日）

朝	昼	夕
<ul style="list-style-type: none"> ・ ごはん ・ 卵焼き ・ なすと千石豆の煮物 ・ わかめとオクラの味噌汁 ・ なすの漬物 	<ul style="list-style-type: none"> ・ トースト ・ イチゴジャム（自家製） ・ チーズ ・ アイスコーヒー 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ごはん ・ 豚肉の生姜焼き ・ 酢ずき ・ なすの漬物 ・ インスタントおすまし

B さん（60 代）、農家、2 世代世帯（8 月某日）

朝	昼	夕
<ul style="list-style-type: none"> ・ ごはん ・ 味噌汁 ・ 半熟卵 ・ のり ・ 煮豆 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 冷やしそば ・ サンドウィッチ ・ 飲むヨーグルト 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ごはん ・ かぼちゃサラダ ・ チャプチェ

Cさん（60代）、農家、3世代世帯（10月某日）

朝	昼	夕
<ul style="list-style-type: none"> ・パン ・サラダ ・コロケ ・ハム ・コーヒー牛乳 	<ul style="list-style-type: none"> ・ごはん ・冷奴 ・野菜の煮物 ・焼き魚 	<ul style="list-style-type: none"> ・ごはん ・野菜炒め ・里芋の煮付け ・味噌汁

Dさん（60代）、農家、1世代世帯（10月某日）

朝	昼	夕
<ul style="list-style-type: none"> ・ごはん ・つる豆のごま和え ・味噌汁 	<ul style="list-style-type: none"> ・ごはん ・里芋の煮物 ・味噌汁 	<ul style="list-style-type: none"> ・ごはん ・味噌汁

Eさん（60代）、農家、2世代世帯（10月某日）

朝	昼	夕
<ul style="list-style-type: none"> ・ごはん ・わかめとほうれん草の味噌汁 ・目玉焼き (ウィンナー、ブロッコリ) ・大根菜のよごし (ピーナッツ和え) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ごはん ・野菜炒め ・冷奴 	<ul style="list-style-type: none"> ・ごはん ・さんまの塩焼き ・赤ずいきの酢もの ・キノコ入り湯豆腐 ・果物 (りんご)

Fさん（50代）、農家、2世代世帯（10月某日）

朝	昼	夕
<ul style="list-style-type: none"> ・食パン ・りんご ・コーヒー 	<ul style="list-style-type: none"> ・やきそば 	<ul style="list-style-type: none"> ・栗と山菜のおこわ ・インゲンのごま和え ・肉団子甘酢あんかけ ・味噌汁

Gさん（30代）、非農家、2世代世帯（10月某日）

朝	昼	夕
<ul style="list-style-type: none"> ・ トースト ・ ス克蘭ブルエッグ ・ りんご ・ 納豆 ・ お茶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コンビニ弁当（父） ・ ビーフシチュー（母） ・ 給食(子ども) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ごはん ・ イカフライ ・ 大根の味噌汁 ・ サラダ

Hさん（30代）、非農家、2世代世帯（10月某日）

朝	昼	夕
<ul style="list-style-type: none"> ・ パン ・ ヨーグルト 	<ul style="list-style-type: none"> ・ チャーハン 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ごはん ・ 味噌汁 ・ コロッケ ・ 魚のフライ ・ ポテトサラダ ・ ブロッコリー

全体的にみると、主食としてごはんとパンが主流である。しかし、世代間でみると、1日のうちに摂取する野菜の使用頻度が違う。農家では、畑で採れた野菜を中心に調理された料理が食卓に並ぶ。それに、他の聞き取り調査で伺ったお宅のお姑さん（60代）が「お嫁さんが夕飯の用意をしてくれるから、若い人たちに任せている」と語るように、若い世代の方が台所に立つことが多いようだ。70代女性は「若い人たちは仕事に出とるし、時間がない。朝は特に忙しくて嫁さんは子どもの弁当を作らなくてはいけいないので、冷凍食品とか加工したものを買うよ」と語る。農家を営む70代女性は、「若い人は虫が少しでもついていたら捨てる」「食卓に並ぶ食材の半分以上はスーパーのものやわ」と話す。このことから、2世代、3世代同居住宅では、仕事から帰ってこられた若い世代の方が家族分の食事を作られるため、調理にかかる時間が少ないことからスーパーの惣菜や加工食品を食べられることが増えてきたのだろう。息子夫婦と暮らす60代男性は、「若い人は里芋の煮物は食べない。年配の方たちが食べる分だけ作って食べる」と語るが、砺波の伝統ある郷土料理を若い世代の方は自ら作って食べる機会があまりないことがうかがえる。なお、アンケート調査は夏場に行ったため、保存食を使用した料理はなかなか目にすることはなかった。

アンケート調査でみられたもの以外にも、聞き取り調査をとおして砺波の特色あ

る野菜を使った家庭料理が数多くみられた。里芋の味噌汁、かんぴょうの味噌汁（保存食である八つ頭いものくきを入れたもの）、里芋のかんぴょうのごま和え、里芋の柚味噌和え、里芋のひき肉のあんかけ、里芋の団子の天ぷら、きゅうりのあんかけ（小エビ入り）、ヨシナと油揚げの煮物などがある。このことから、里芋の利用率が高いことがわかる。

次の写真は、実際に調査を行った家庭で食べられていたものである。昼食時には、60代女性が食パンの上によごしをのせて食べていた。かつては、米の不足を補うためのおかずとして食べられてきたよごしは、用途は変わりつつあるが、副食として今も食べられている（写真3参照）。また、保存食についてお話を聞いた家庭では、60代男性が渋柿を焼酎につけて冷凍していたものと黒瓜の粕漬けをふるまってくれた（写真4参照）。

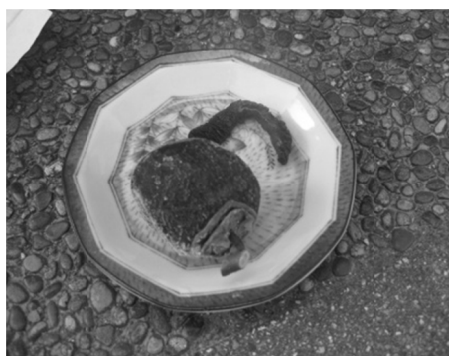


写真 3.食パンと大根の菜のよごし 写真 4.焼酎につけて冷凍された渋柿と黒瓜の粕漬け

以上のことから、家庭で食されている郷土料理や保存食は利用方法や保存方法は変わりつつあるが、いろいろなかたちで今も食べられていることが分かった。また、アンケートや聞き取り調査から分かるように、かつては自分の畑から食材を調達してきたものが、現在ではほとんどの家庭がスーパーで食材を購入しているという状況にある。次項では、実際に現代の食事を支えているスーパー、そして最近増加しつつある地域の特産品を扱う直売所の現状について報告していきたい。

3-2. 砺波のスーパーマーケットと直売所

砺波市内には、スーパーに設置された農産物直売コーナーを含め 9 件の直売所が存在する。給食センターに野菜を出荷している 60 代の女性は、「となみ野農産物生産グループ協議会」に属しており、農産物直売所である「散居の店」を営んでいる。「通常、給食センターに出荷する野菜は学校が夏休みに入ると出荷が止まるので、そのはけ口として 6 月～11 月の土日に限り、直売所を開いた」と語る。農産物直売所が設置してある砺波の某スーパーマーケットでは、特産物コーナーに、漬物や、

新鮮な野菜が並んでいた。またお惣菜コーナーにも郷土料理が所狭しと並んでいた。以下から、スーパーマーケットで見られた砺波地方の郷土料理について、報告する。

特産物コーナー

「フードコート砺波ちゅうおう店」は、平成 17 年の開店以来、「砺波地場産市場」と呼ばれる特産物コーナーを設けている。店長は「食に安全性が求められる、そして地産地消という時代の流れから、このコーナーを取り入れた」と語る。この特産物コーナーには、個人で作られた野菜や工場から出荷している「かぶら寿し」、「よごし」、「漬物」などの砺波を代表するお惣菜などが売られている（写真 5 参照）。特産物コーナーに原木の生しいたけを出している男性は、こちらのスーパーと地元の直売所でしいたけを販売をしている。男性は「高速道路ができたので、配達方法が変わった。交通網が発達し、八百屋がなくなり、みんな今ではスーパーばかりに足を運ばれる」と語る。特産物コーナーでよく売れるのは野菜である。「お惣菜コーナーの利用者には、漬物が好きという年配の固定客もいる」という店長のお話から、利用者の年齢層の高さがうかがえる。調査中、特産物コーナーには、来店客のほとんどが足を運んでいた。しかし、若い世代の客は野菜コーナーだけを見る場合が多く、お惣菜コーナーに目を向けていたのは、数人の年配の客であった。



写真 5.スーパーマーケットに設置された特産物コーナーの様子

特産物コーナーの利用者の語りを紹介したい。50 代女性は「お惣菜コーナーは見ますが、味が濃いので買う時と買わない時がある」と語った。40 代女性は「野菜だけ買う。惣菜は買わない。でも、家でよごしは作りますよ」と語った。ほぼ毎日スーパーを利用されている 30 代女性は「特産物コーナーはたまに見ます。夜忙しい時はスーパーの惣菜コーナーを利用するが、特産物コーナーのお惣菜は見たことはない」と語った。これらのことから、郷土料理は家庭によって味が違うことから、惣菜として購入するよりも、材料となる野菜を購入することが多いことが分かる。

砺波のあるスーパーのお惣菜コーナーには「かぶら」あるいは「大根」、「ぶり」あるいは「さば」、を使った料理がずらりと並んでいた。また、祭事や夏場に食されるユウベス（ゆーべし、ゆべし、べっこう、えびす寒天）が売られている。

なすとそうめんのおつけが郷土料理とされているが、他にもなすとそうめんの煮つけやなすとそうめんのお味噌汁などが家庭用として販売されている。したがって、「なすび」と「そうめん」を使った料理は家庭によって様々であると推測される。また、「なすの辛子漬け」は「なす辛子風味」と記されて売られている。

里芋の茎であるずいきは「いもずる」という名の煮物料理として売られている（写真 6 参照）。なお、右の写真は、「いかと里芋の煮物」である。具材には、いかと里芋の他にインゲンとにんじんが使われている（写真 7 参照）。



写真 6. いもずる



写真 7. いかと里芋の煮物

4. 考察

かつて、この砺波地方で構築されてきた郷土料理とは、屋敷周りの田畑で採れる米や野菜を使って作られていたものであった。その限られた食材を使って、「いもだご」や「ごんだ」、「よごし」、そして多種多様な「保存食」の数々など、砺波地方独自の「食」を構築してきた。その多くに、限られた食材を利用するための工夫がみられる。

調査を進める中で明らかになってきたのは、砺波地方の郷土料理に根付く「タイセツナイの心」であった。しかし、交通の便が発達した現在では、人々は食料を容易に手に入れることができるようになった。それにともない、「タイセツナイの心」はうすれていき、比較的若い住民のなかには、「タイセツナイ」という言葉を知らない人もいた。現在では、郷土料理は家庭の台所という枠を越え、スーパーの「特産物コーナー」、「お惣菜コーナー」や地域の農産物直売所などで売られるものになっている。人々にとっての郷土料理の在り方が、大きく変化したのである。

自給自足の生活が基本となっていた時代の散居村地域では、限られた素材を無駄

なく使った食生活が隅々まで徹底されていた。しかし、物であふれかえった現代、手間ひまかけて作られてきた砺波の郷土料理は、意義を失っていくこととなった。農作物を食材として、完全利用を徹底していた自家消費をしていた時代から、年配の住民だけが農作物を使った料理を食べたり、地元のスーパーには商品化した「郷土料理」がお惣菜として置かれていたり、住民がわざわざ食材をスーパーに買いに行ったりするような時代となった。その背景には、核家族化、食の簡便化により調理時間が短期化したこと、そして飽食があると考えられる。しかし郷土料理とは、その土地ならではの食材をその土地ならではの方法で調理し食べることである。

第3節でみたように、若い世代の人々は自分で郷土料理を作る機会があまりない。しかし、中野の高齢者たちは、昔と変わらぬ方法で、それぞれの家庭の味の郷土料理を作り、食べている。つまり、郷土料理には食べ継がれなくなったものや、かたちが変わってしまったものもあるが、今も完全に失われたということではない。そのような郷土料理を残していくために、県民カレッジ砺波地区センターでは、社会人と高校生が共に「郷土料理」を学ぶ特別講座を設けるなどして、郷土料理の在り方を伝承する活動も行われている。

20年前に砺波市中野の農家に嫁いでこられた40代の女性は、「大根菜のバター炒めは作っていたが、砺波にきて初めてよごしを作った」、「つる豆やせんごく豆のゆでたときの匂いが臭くて慣れるのが大変だったが、胡麻和えにするとおいしいということがわかった」と語ったが、私はそこで砺波の郷土料理がその土地ならではのものであることを改めて知った。しかし、郷土料理を生み出し継承する母体は、個々の家庭でもある。たとえば、第4節で紹介した「なすとそうめんのおつけ」を、醤油ではなく味噌で煮るなど、郷土料理に自分好みのアレンジを加えていた家庭もあった。また、ある40代の女性は、「よごしは祖母に教えてもらったから作っているけど、だんごなどは祖母も作らなかったし、作る必要もない」と語った。別の60代の女性は「来客時に、お茶請けとしてだんごをだすため、きなことごまは絶えず持っている」と語った。現在まで砺波地方で伝承されてきた郷土料理は、食を取り巻く環境の変化を取り入れながら、それぞれの家庭で新たに築かれ直してゆくのだろう。

参考文献

砺波市農業委員会 平成21年度資料

富山県民生涯学習カレッジ砺波地区センター 2009 「事例集 となみ野の食卓」

堀田良 1989 「日本の食生活全集 16 聞き書 富山の食事」

「日本の食生活全集 富山」編集委員会編 農山漁村文化協会

富山県民生涯学習カレッジ砺波地区センター 2010 「となみ野食文化フォーラム 記録集」

富山県農林水産部農産食品課 2010 「越中とやま食の王国 とやま食の匠」

第 10 章 庄川の水環境と生活文化

林 香澄

1.はじめに

砺波市のホームページには、タイトルに「花香り、水清く、風さわやかなまち」と記されており、砺波市が自然豊かで、きれいな水が流れる地域であることがアピールされている。砺波市の中でもとくに庄川町は水の郷として知られている。この報告では、庄川町の住民の生活と水との関係とその変遷について、文献資料や聞き取り調査をもとに明らかにする。

2.庄川町の概要

庄川町は、砺波平野の東南部に位置し、町の中央部に庄川が流れている。かつては東砺波郡に存在した町で、2004 年（平成 16 年）11 月に隣接する砺波市と合併し新砺波市の中に位置することになった。

扇状地の要に位置することから、用水の取入口が多く設けられ、町内に大小の用水が扇骨状に流れている。さらに、庄川の清流は、発電のみならず、240 年余りの伝統を誇る水稻種子（種粃）の生産と、国の伝統工芸材料である挽物^{ひきもの}木^き地^じ（茶器やお盆など）の発展にも寄与し、共に全国一の生産量を誇っている。

庄川町では、水の利用と認識を深め、人々の憩いと安らぎの公園を作ることを目的とした「全町水公園化構想^{ぜんちよう}⁶」によって、1981 年（昭和 56 年）から「水記念公園」の建設が始まり、公園には、資料館、噴水や特産品の庄川挽物を展示販売する特産品館などが設置され、観光客が訪れるようになっている。また、庄川町ではイベントも多く催され、春には「木工まつり」、夏には「庄川峡花火大会」や「観光祭」、「水まつり」、秋には「ゆずまつり」などが開催されて、富山県内外から観光客が集まる。また、毎年 1 月には、厄年を迎えた男女が鯉にお酒を飲ませて、厄を託し庄川へ放流するという伝統行事、「厄払い鯉の放流」が行われる。

水に関わるこれらの活動や行事などから、庄川町は、「水環境保全の重要性について広く国民に PR し、水を守り、水を活かした地域づくりを推進するため、地域固有の水をめぐる歴史・文化や優れた水環境の保持・保全に努めている」、そして「水と人との密接なつながりを形成し、水を活かしたまちづくりに優れた成果を上げている」という理由によって、1996 年（平成 8 年）に国土交通省から「水の郷百選」

⁶ 水の豊かさを庄川町全体でアピールするために水を意識した公園を作ろうというもの。

の一つとして認定された。

3. 「水」と地域住民

先に述べたように、庄川町は水記念公園を建設したり、水に関わるイベントが多々存在したりと、庄川の水を前面に出して町の PR をおこなっている。では、地域住民たちは自分たちの町をどのように認識しているのだろうか。

20 代から 80 代の男女 7 人に「庄川町の誇りは何ですか？」と聞いたところ、7 人中 5 人が水が豊かできれいであることが誇りだと答えた。その中でも、「他の地域の人からよく水を褒められるのがうれしい」と言う人が 3 名いた。他には景観の美しさや自然の豊かさ、人の温かさが庄川の誇りや魅力として語られた。

例数は少ないが、行政だけでなく、地域住民にとっても、庄川の水は庄川町を象徴するものとして捉えられているようである。

では、地域住民は水とどのような関係を持ってきたのだろうか。

ここからは、庄川町の住民と庄川との関係を詳しく記述するが、その際、両者の関係を「地域住民と庄川との『付き合い』」と表現してみようと思う。というのも、住民と川との関わりあいの歴史はとても長いだけでなく、他の地域では見られないユニークな水の利用法があるからである。たんに地域住民と水環境の「関係」と表現するよりは、水との相互交渉や交流の側面も豊かにあるので、このような表現の方が庄川の地域住民と水のことをより正確に表現できると考えられる。以下、まず、地域住民と庄川との「付き合い」の歴史について記していきたい。

4-1. 暴れ川としての「庄川」

庄川は富山県の 7 大河川の 1 つであり、水の量が多く、とても安定した川だが、今のような姿になるまでには随分長い年月がかかった。下流地帯を思う存分に荒れまわった暴れ川で、河道変遷はめまぐるしかった。奈良時代の庄川は、野尻川の河道を通り、小矢部川と合流し、洪水が起こるたびに野尻川から中村川、荒又川と東へ流れを変え、戦国時代の終わり頃には千保川を主流としていた。しかし、1585 年（天正 15 年）の大地震で河道が千保川と中田川に二分した。その後の松川除⁷の築堤により、中田川を本流とする現在の川筋が出来上がった（図 1）。しかし、河道が

⁷ 江戸時代、砺波郡は、加賀藩の直轄領であった。当時は、米が命であり、石高確保に力を注がなければならなかった。しかし、河道が変遷していたのでは農業に必要な水が安定して得られないということで、加賀藩は庄川扇状地の扇頂部の弁財天社前で庄川の流れを一本にする工事を始めた。堤防の長さ 2 キロメートルにもわたり、45 年の歳月と延べ 100 万人を超える労力を費やし 1714 年（正徳 4 年）ついに完成した。堤防をしっかり固めるために松の木が植えられたことから「松川除」と呼ばれるようになった。

固定されても、1960 年（昭和 35 年）に御母衣ダムが出来るまでは雪解け、梅雨、台風のと きなどに度々洪水が起こり、人々を悩ませてきた。

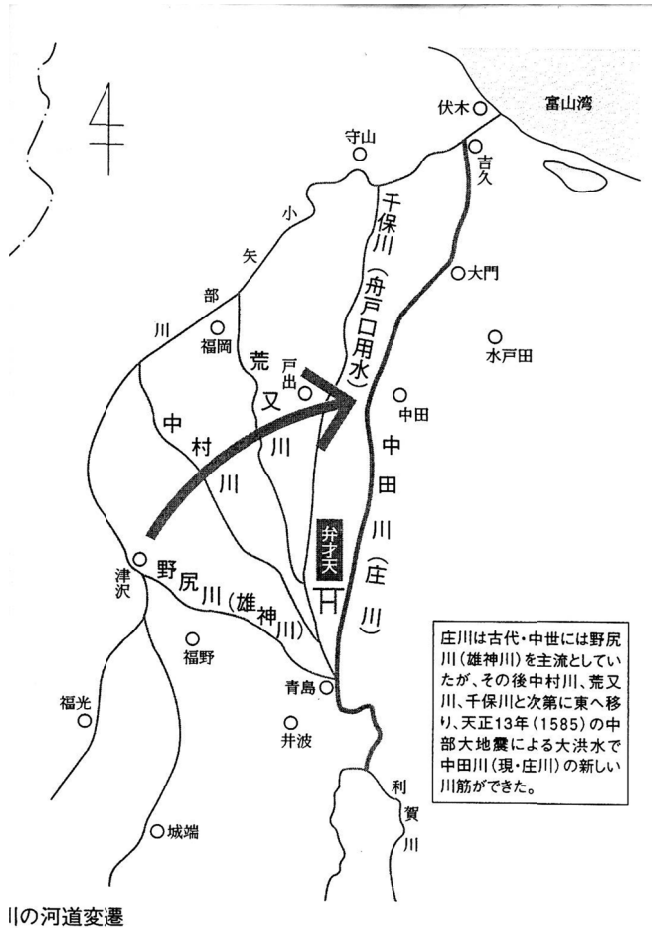


図 1. 庄川の河川変遷

(庄川沿岸用水歴史冊子編纂委員会 2009 年 『砺波平野疏水群庄川沿岸用水』)

4-2. 「庄川流木」－生業の場としての庄川

まだ交通機関が発達していなかった頃、庄川は物を運ぶための重要な道として使われていた。特に、建築資材として飛騨や五箇山の木材を、川下げと呼ばれる庄川の川の流れを利用した運送方法で下流まで運んだことは、「庄川流木」として知られている。一般的に流木というと、漂い流れる木のことをいうが、庄川町では木材の流送作業を表す用語として使われている。この流送作業を仕事とする職人たちは流送夫と呼ばれていた。当時は産業が発達しておらず、この流送夫を職とする人が多かった。

庄川を流れてきた木材は、陸揚げするために用水を使って青島の貯木場へ流し込まれ、青島貯木場は北陸有数の木材の一大集散地となった（写真 1）。今では庄川町の特産品となっている「庄川挽物」（写真 2）は、庄川町が木材の集積地であったこ

とから生まれた産業である。



写真 1. 青島貯木場の様子

(砺波市 2007 年 広報となみ 2007. 9 より)



写真 2. 庄川挽物木地

(<http://www.kougei.or.jp/crafts/1502/f1502.html> より)

庄川流木で活躍した先輩に習い、北海道や静岡の大井川などで流送夫をしていた K 氏に話を聞いた。K 氏は、1938 年（昭和 13 年）に 15 歳で流木の仕事を始め、15～16 年ほど、流送夫をしていた。K 氏は次のように語ったが、そこからは、流木がいに町を支え、町に活気を与えていたかがよく分かる。

庄川町は、山間部に位置し、水田が少ない。だから、農業は発達しなくて、流送しか仕事なかった。当時、400 人程の人が庄川で流送をしていたんだよ。1930 年（昭和 5 年）の小牧ダムの完成によって庄川の流木はなくなってしまったがね（後述の 4-3.「小牧ダム建設による庄川流木事件」参照）。.....流木が盛んだった頃は、流送夫たちのかけ声が庄川に響いていて、賑やかだった。みんなアホみたいに大きな声を出していたよ。住民の中には、流送の姿を見物にくる人もいっぱいいた。その度に、流送夫たちは張り切っていいところを見せようとしていたね。

.....

.....子どもの頃は、父親と青島貯木場に木を見に行ったりしていた。私たちの他にも、陸揚げされた木を見に来る人はたくさんいたよ。.....

流送はとても危険な仕事だった分儲かった。それが、町の発展にもつながった。

.....

また K 氏は、流送夫の活躍を再現しようと始められ、庄川水まつりの一大イベントとなっている流木乗り選手権大会について「流木のことを今に伝えてくれる大会でうれしく思う」と語った。

4-3. 小牧ダム建設による庄川流木事件

富山県氷見市出身の実業家・浅野総一郎は、庄川の豊かな水を発電に生かすため、ダム建設の計画を立て、1916 年（大正 5 年）に庄川水利権の使用を願い出た。浅野は、庄川の堤防に立って水量豊かな激流を眼下に見下ろし、「おお黄金が流れる。黄金が流れている」と絶叫したと伝えられている。

1919 年（大正 8 年）、県がこの大計画を認めて発表すると、大きな損害を被る流木業者・木材業者はもちろんのこと、庄川流域の住民や農民、漁民などにも大きなショックを与えた。小牧の下流地域の灌漑用水はすべて庄川に依存している。したがって、この地方農民の生命線とも言うべき庄川に、ダムを築造して流れをせき止め、下流に流す水を人工的に制限することに対し、農民が先祖代々からの水利使用权を主張して反対運動を起こしたことは当然のことと言える。稲作に最も心配されたのは干ばつであるが、ダムの決壊によって起こりうるであろう大洪水もまた一大脅威であったのだ。また、当時、庄川に生産する鮎・鱒、その他の雑魚を捕獲する漁業専業者や、副業として生計を補っていた業者も相当数に上っていた。彼らはダム出現によって産卵期に魚が遡上できなくなり、魚類が絶滅することを恐れて反対運動に賛同した。反対運動は、600 余名が大衝突する流血騒動にまで発展した。

やがて反対運動は、電力側を相手に裁判へと発展し、約 8 年にもわたって法廷で争ったが、最終的に内務省土木局長の和解案を双方が受け入れ和解した。

小牧ダム建設は 1925 年（大正 14 年）4 月に着手し、5 年の歳月をかけて完成。ダムの完成時には、堤高 79.2 メートル、堤長 300.8 メートルという大きさから東洋一と呼ばれ、安定した電力を供給することができるようになった。そして、ダムの建設により、道路も整備され、木材は陸路で輸送されるようになり、庄川町から流木の風景は消えていった。

4-4. 昭和から現在にかけての庄川

次に、庄川流木事件後から現在にかけて地域住民が具体的に水とどのようにお付き合いしてきたのか、今現在はどのようにお付き合いしているのかを見ていく。

金屋、青島、庄、三谷、雄神地区に住む 60 代以上の住民に庄川との思い出について聞いたところ、「川へ泳ぎに行っていた」「鮎釣りをした」「飲み水にしていた」という声が多かった。飲み水としての利用は男女共通していたが、遊びの場としての利用は男性がほとんどであった。一方で、少数ではあるが、「特に思い出はない」や「庄川へ泳ぎに行ったりもしたが、野球や陸上をすることの方が多かった」という話もあった。聞き取りの結果の差異は、川に近いところに住む人は頻繁に川へ遊びに行っていたのに対し、比較的離れた所に住む人は川まで遊びに行ったりはしなかったという違いによるものだと考えられる。しかし、離れたところに住む人も、全く庄川との繋がりがなかったわけではなく、用水の利用という形で庄川との繋がりを持っていたようだ。「昔は生活用水路の水はキレイで流れも緩やかでうなぎや鮎などが流れていたから、それらを捕って食べたりしていた」「生活用水路の水を飲み水にしていた」という語りから見られるように、家の横などに流れている用水は頻繁に利用していたことが分かる。

4-5. 用水の需要の拡大

かつては子どもたちの遊びの場であった庄川だが、プールなどの遊び場の充実、川遊びは危険という意識の普及により、今はもう川へ遊びに行く子どもはいないそうだ。釣りをする人も 50 年程前と比べたら、だいぶ減ったらしい。これは、鮎が下流の方で商用に捕獲されていることが 1 つの原因となっているようだ。

また、飲料水にもされていたという庄川の水だが、農薬が普及し始めてから（1950 年代頃）飲料水としての利用はなくなったそうだ。

住民の話を聞いていると、庄川自体との関わりは薄れてしまったが、今でも庄川の水を利用した用水や水道水には恩恵を受けていることが分かった。現在における、住民と庄川の水とのお付き合いについて、庄川町金屋地区から青島地区に流れている「二万石用水」を例に見ていきたい。

5. 用水と地域住民の「付き合い」

5-1. 二万石用水の概要

もと野尻岩屋口用水といい、草高⁸ 万石の地域を有していたことから明治 36 年（1903 年）に二万石用水と改称した。かつて、木材を貯木場へ取り入れる重要な用水であり、加賀百万石の礎を築いた砺波平野を灌漑する農業用水だった。現在、庄川沿岸諸用水の中で最も広い耕地を灌漑区域としている。

⁸ 領内で算出される米穀の総量。

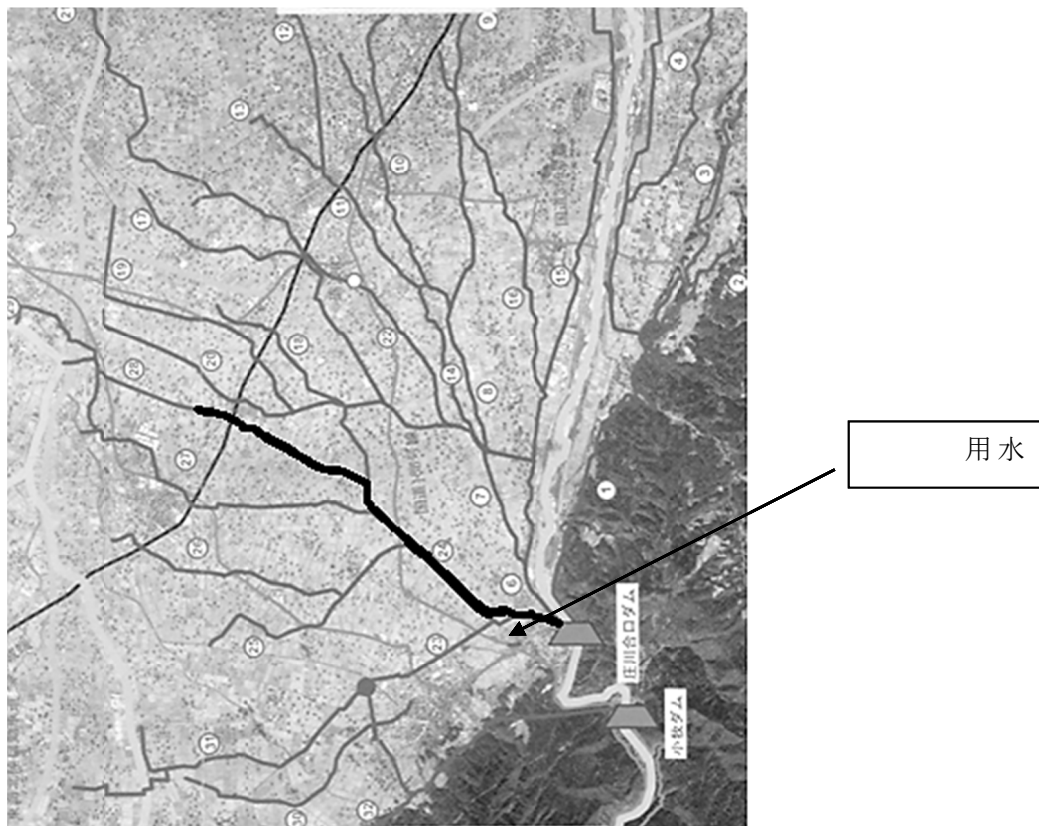


図 2. 庄川沿岸諸用水（水土里ネット）

5-2. 庄川地区県営灌漑排水事業（庄川灌排）

1961 年（昭和 36 年）に農業基本法が制定されて以来、営農の合理化・省力化と水田の汎用化を目的とする圃場整備事業が各地で進められた。その翌年、1962 年（昭和 37 年）には、県下のトップを切って砺波市東野尻地区で圃場整備事業が実施された。以後、砺波平野の圃場整備は飛躍的に拡大し、昭和 50 年代後半までに砺波平野全域にわたる圃場整備がほぼ完了した。

圃場整備事業による用排水分離と乾田化に伴い使用水量が増加し、水量配分の円滑化が求められた。この問題に対処するため、1975 年（昭和 50 年）に庄川地区県営灌漑排水事業が着工された。老朽化が進み、通水能力の不足と漏水ロスが指摘されていた庄川左岸の上流 3 用水（山見八ヶ^{やまみはっか}、新、二万石^{しん}）は、鉄筋コンクリート水路に改修し、個別取水から圧力管の共同用水路による一括取水方式に改めた。そこで生み出された余剰水を農業用水や砺波広域圏の上水道用水にあてることにした。

1994 年（平成 6 年）には事業の主要な施設がほぼ完成した。いずれの用水も市街地を通過する水路であるため、市街地区間は管路構造として生活雑排水の流入を防いだ。新しい工法として、上部水路と暗渠の 2 階建て水路（図 2）、中間貯留施設としての水田用調整池、減勢池による減勢処理などが取り入れられた。そして、1999

年（平成 11 年）に 26 年にもわたる改修工事は幕を閉じた。（庄川沿岸用水歴史冊子 編集委員会 2009 年 『砺波平野疏水群庄川沿岸用水』）

新たなことをするときには、必ずと言っていいほど反対派の人が出てくるもので、この事業も例外ではなかった。「水の町のイメージが壊れる」と、町当局も町議会も住民もこぞってこの事業に反対した（図 2 参照）。当時の庄川町長も「豊かな水をたたえたいくつもの用水が、昔から町民に安らぎを与えてきた。それは金や物には換算できない意味があった。県の計画では、水が町民の目に見えなくなり、廃止された用水がドブ川化する心配がある。納得できない。」と話した。このような庄川町全体の強い批判により、当初の全線暗渠の予定を変更し、暗渠と開渠の 2 重構造にすることで「水の郷 庄川」のイメージが保持された。



図 3. 改修工事に反対した住民たちの反発を伝える当時の新聞記事
（昭和 49 年 5 月 4 日 朝日新聞）

5-3. 庄川灌排による景観の変化

改修工事前の用水の幅は 16 メートルにまで及び、用水沿いに立ち並ぶ家のすぐ傍まで水がきっていた）。また、用水のすぐ左側に道があったが、現在の 3 分の 1 程度の

道幅しかなく、車 1 台がなんとか通れるくらい細い道だった。改修工事後は川幅が縮められ、かわりに家と川との間隔や道路幅が広がった（写真 3）。



写真 3. 現在の二万石用水の様子

なお、地域住民に話を聞いていると、多くの人が、改修工事後の用水のことは「用水」と呼ぶのに対し、改修工事前の用水のことは「川」と表現していたのが特徴的だった。

5-4. 川端について

二万石用水には他の用水とは異なる点がある。それは、「川端（かわばた・かばた）」と呼ばれる洗い場が設置されている点だ（写真 4,5）。金屋地区から青島地区の一本橋までの間には全部で 31 個の川端が設置されている（図 4）。都市計画道路京坂線



写真 4. 川端

と一本橋の間の青島地区では、親水せせらぎ空間（地域住民には砂利公園という愛称で親しまれる、休憩所のようなところ）を除く用水沿いの家はほぼ 1 家に 1 つ川端を持っていた。金屋地区は、庄川灌排の際、金銭上の問題で景観の整備までなされなかったため、石壇の川端や鉄筋の川端がまだらに存在している。鉄筋の川端は住民によって付け加えられたものらしい（写真 6）。

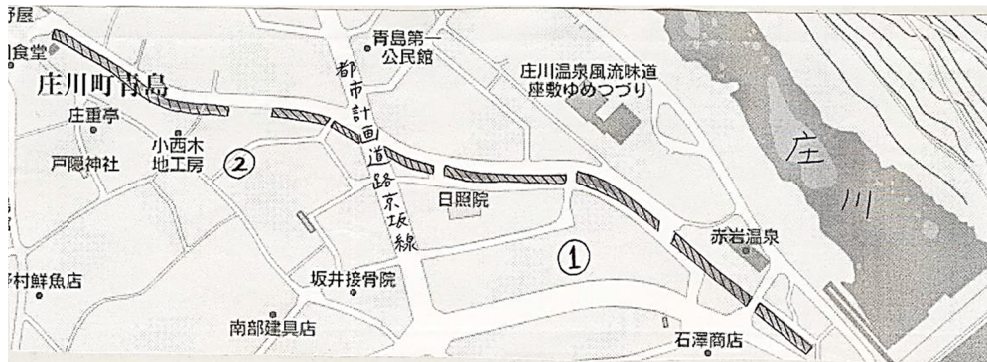
庄川灌排事業の際、景観的にも川端をなくそうという話が持ち出されたが、住民の「昔からの景観を残してほしい」という熱意により川端は残されることとなった。川端のことを要らないといった住民は1人もいなかったそうだ。



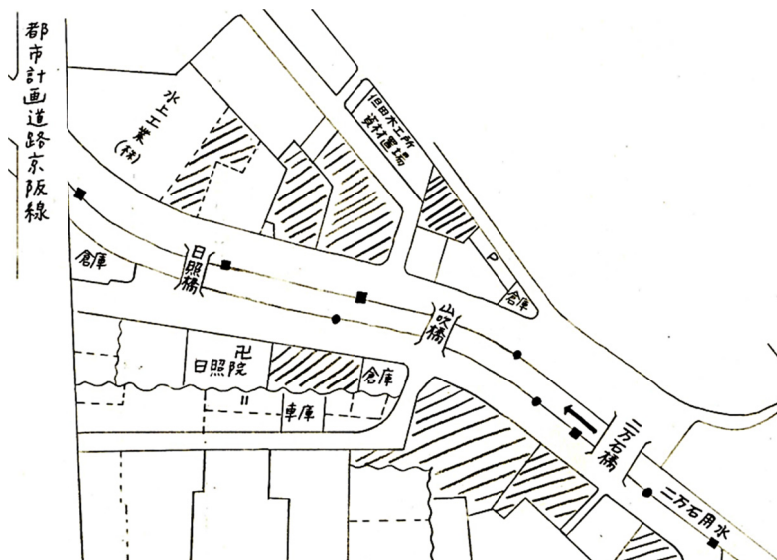
写真 5. 川端を利用する住民



写真 6. 金屋地区の川端



① 金屋地区



- ：鉄筋の川端
- ：石壇の川端
- 斜線：住民のいる家

② 青島地区

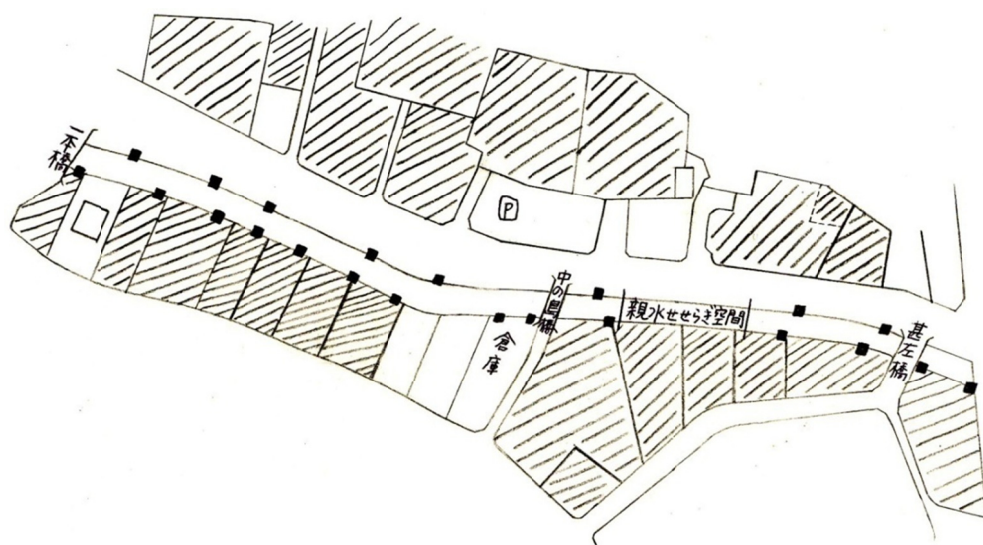


図 4. 金屋地区から青島地区における、二万石用水の川端設置状況

庄川町の中でも特に青島地区は用水とのお付き合いが強く感じられる地域で、毎年 6 月に開催される庄川観光祭では、保育園児から大人までを対象に、二万石用水でニジマスつかみを行っている。保育園児は親水せせらぎ空間にある人工的な川（写真 7）で、小学生以上は用水の中に入ってニジマスつかみを楽しむ。



写真 7. 親水せせらぎ空間

5-5.二万石用水の利用のされ方

二万石用水をどのように利用してきたかについて周辺住民に話を聞いたところ、以下の表のような結果が得られた。1975 年（昭和 50 年）以前は、炊飯や洗濯というように直接身体に関わるものにも用水を使用していたが、現在では泥や汚れ取り、水やりが中心となり、間接的になったようだ。それは、水道や洗濯機の普及によるもので、利用頻度も少し減ったようだ。利用の変化、利用頻度の減少は見られたものの、それでもなお水とのお付き合いは存続していた。

「川」について、「危険だった」「怖かった」という否定的な語りがしばしば聞かれた。当時はガードレールが所々にしかなく、小さい子どもが川に落ちるということがあったそうだ。改修工事の案が出た際は、強く反対した住民たちだが、現在は改修工事について「安全になって良かった」「景観がきれいになって良かった」「道幅が広がって良かった」と評価する住民がほとんどであった。

表. 二万石用水の利用のされ方

1975 年（昭和 50 年）以前の「川」	現在の「用水」
<ul style="list-style-type: none">・炊飯の水・鍋洗い・洗濯・おむつ洗い・スイカを冷やす・網戸を洗う・雪を流す・川遊び	<ul style="list-style-type: none">・花の水やり・雑巾洗い・スイカを冷やす・雪を流す・洗剤を落とす程度の洗濯・野菜の汚れ洗い・泥などの汚れをとる

次に、家のすぐそばに二万石用水が流れていることについてどう思っているかを聞いた。すると、「涼しくて良い」「気持ちが良い」「便利」という声が多く返ってきた。庄川町の水環境は、人々に癒しを与える景観的要素が強くなってきているようだ。

6. 庄川流域で育まれた「水文化」

庄川町を含む庄川流域の地域では、かつて、嫁入り時に「合わせ水」という儀式を行う風習があった。

6-1. 「合わせ水」

嫁入り時に、花嫁は実家から竹の筒に水を持参する。そして花嫁が婚家に着くと、嫁入り先の水を用意し、仲人がカワラケ⁹に両方の水を合わせて花嫁に飲ませる。花嫁がその水を飲むと、仲人はそのカワラケを受け取って耳石という玄関の上がりたての石にぶつけて割る。そのことによって後には戻らない、そして婚家先の「水が合う」ように願う。「水が合う」というのは、いわゆる家風が合うということである。

（出典：

http://www.pref.toyama.jp/sections/1711/mizu/tsutaeru/gaiyou_shougawa.html）

庄川町の金屋、青島、庄、三谷の 4 つの地域で結婚時に合わせ水を行ったかを聞いた。50 代以上の男女 10 名に聞き取りを行ったのだが、利賀村から庄川町に移り住んだという女性 1 人を除いて全員が、自分の結婚時に合わせ水を行ったという結果だった。また、結婚式のときではなく、嫁入り道具を搬入する際に合わせ水を行う家庭もあったらしい。この調査により、合わせ水が庄川流域の水文化となっていることが確認できた。しかし、合わせ水という名称はほとんどの人に通じず、合わせ水の内容を話すと理解してもらえた。このことから、この儀式には特定の名前はつけられておらず、人々もそれほど意識せずに行ってきたことが分かる。

次に、今でも合わせ水が行われているかを聞いたところ、行っている家も少しはあるが、今はもうほとんど廃れているとのことだった。昔は式場で挙式ではなく、家で仏壇にお参りをして挙式という形だったため合わせ水を行ってきたが、今は式場で挙式するのがほとんどであるので、合わせ水は行われなくなってしまったようだ。

7. まとめと考察

庄川町において庄川は、3 つの役割を担ってきた。石高確保のため、生活を支えるため、産業を発達させるための「生業の場」としての役割。川遊びや魚釣りのための「遊びの場」としての役割。そして、合わせ水に見られる「儀礼的／象徴的」な役割である。しかし、ダムの建設、生活様式の変化、庄川灌排などにより、現在これら 3 つの役割はほとんど失われてしまった。そして、庄川に代わり、需要が拡大したのは町のあちこちに流れている用水である。初めのうちは、川と同じような役割を担っていた用水であるが、高度経済成長のあたりから利用数も減り、利用法も炊飯や洗濯といった身体に直接関わるものから、汚れとりなどの間接的なものに変化した。このことは、改修工事の前後で、住民の用水の呼び方が「川」から「用水」へと変化したことに象徴的に表れている。しかし、それでもなお川の水と地域住民

⁹ 神棚に塩や米をお供えするための皿

の「付き合い」は続いている。

庄川流木事件と庄川灌排でみせた大反対からは、庄川町そして住民の水に対する意識の高さが感じられた。だが、その意識に変化が感じられるのも事実である。すなわち、「自分の生活を守るため」という意味合いの強い前者の反対運動から、「水がある景観を保持するため」という後者の反対運動への変化である。これは、「庄川で生きる」という意識から「庄川を楽しむ」という意識への変遷を意味するのではないだろうか。それは、「川」から「用水」という呼び方の変化からも考えられることで、庄川が住民の生きる糧であった事実を象徴する「川」という呼び名が廃れたことは、生活の庄川への依存度がもはや以前ほどではないことを示唆している。「用水」という呼び方への移行は、水に左右されるのではなく、自分たちの側で水をコントロールするという住民の認識の変化にもとづいているのだと考えられるのである。

最後に感想を記したい。

水に関する様々なイベント、水記念公園、水資料館の存在は、庄川町と水との深い関わりを伝える媒体となり、後の世代にも「水の郷 庄川」の意識は受け継がれていくだろう。そして、形は時代に合わせて変化していくだろうが、これからも庄川町と水とのお付き合いは絶えることなく続いていくことと思う。

参考文献・ホームページ

HP『水の郷百選』

<http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/mizusato/shichoson/hokuriku/shougawa.htm>

砺波市 2007年 広報となみ 2007. 9

庄川沿岸用水歴史冊子編纂委員会 2009年 砺波平野疏水群庄川沿岸用水

HP『水の王国とやま』

http://www.pref.toyama.jp/sections/1711/mizu/tsutaeru/gaiyou_shougawa.html

<p>地域社会の文化人類学的調査 20 富山県砺波市の生活文化と地域社会</p>
--

発行日：2010 年 3 月 31 日

編集：竹内潔・野澤豊一

発行：富山大学人文学部文化人類学研究室

〒930-8555 富山市五福 3190 富山大学人文学部

Tel. & Fax 076-445-6186

E-mail anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷：なかたに印刷（株）

富山市婦中町中名 1554－23